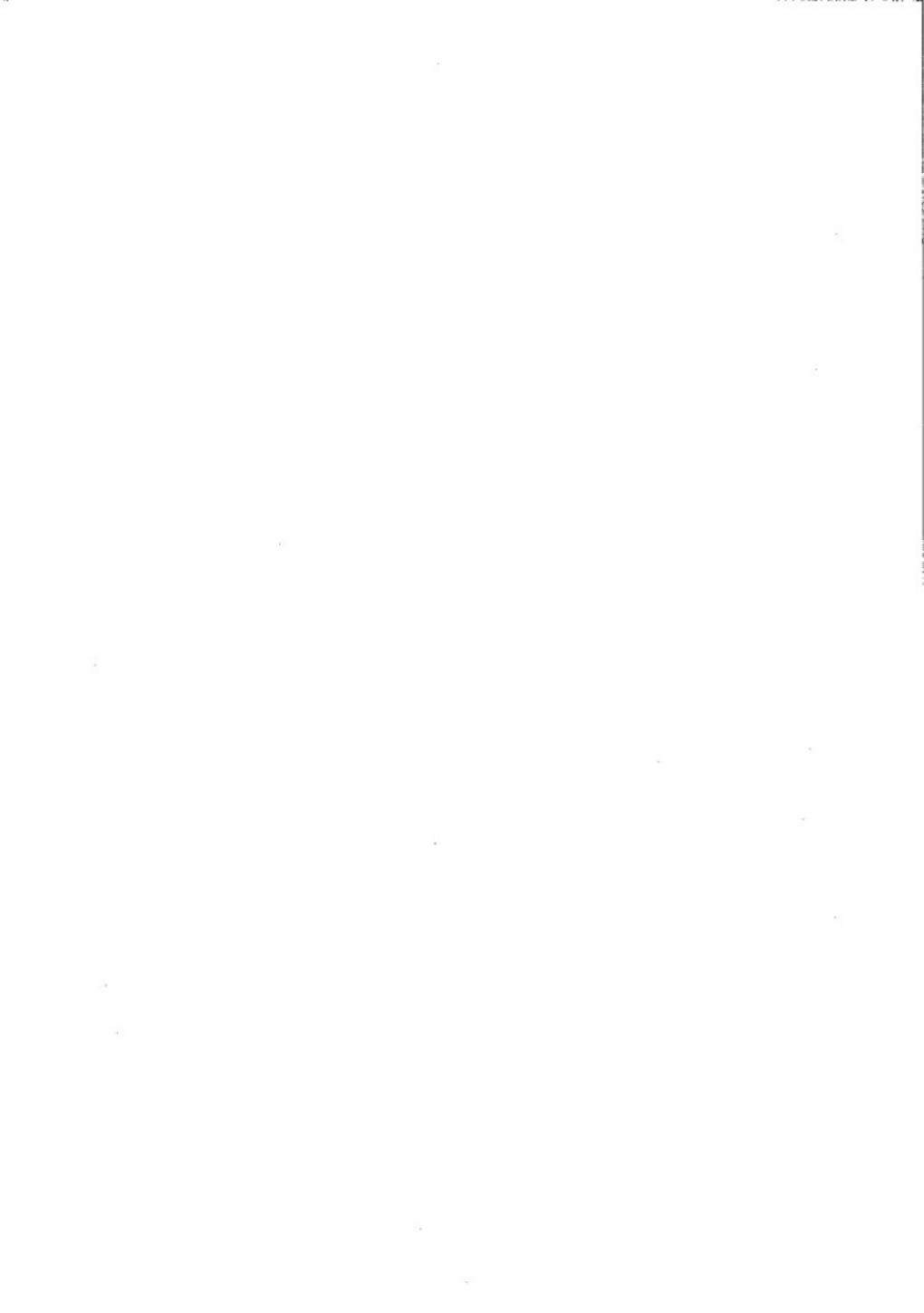


加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・Ⅱ

— 中山間地域総合整備事業（南河内こごせ地区）に伴う —

2003年3月

大阪府教育委員会



加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・II 正誤表

頁	誤	正
2	平石古墳群シショカツ古墳	平石古墳群シショツカ古墳
7 (座標軸)	Y=-167,500	X=-167,500
7 (座標軸)	Y=-167,750	X=-167,750
7 (座標軸)	X=-32,000	Y=-32,000
7 (座標軸)	X=-32,250	Y=-32,250
7 スケール	10m	100m
9 下から5行目	施方	堤方
25~26	周溝座面石段	周溝底面石敷
35 下から5行目	(南端部断面)で、	南端部断面)、
37~38 平面図	縦段	横敷
37~38 平面図	5~5	5~5
49 上から6行目	延べ、	並べ、
58 上から6行目	埋没を示すもので	埋没を示すもので
66 下から11行目	東古墳の南方	当古墳の南方
72 種図番号2	瓦器碗	瓦器瓶
報告書抄録 調査期間	2001年10月~2000年3月	2001年10月~2002年3月
報告書抄録 主な遺構	掘立柱建物	掘立柱建物

加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・Ⅱ

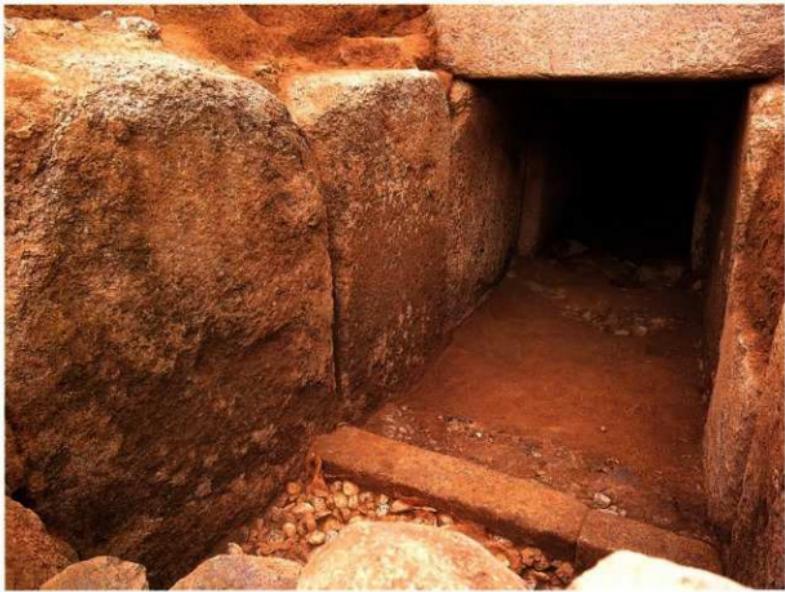
— 中山間地域総合整備事業（南河内こごせ地区）に伴う —

2003年3月

大阪府教育委員会



シショツカ古墳全景（南東から）



石室（南から）



1 銀線



2 銀製
帶飾



3 垂飾部品



6 銀箔飾金具

8 用途不明銀
製品



5 指環

7 銀



4 金糸・銀糸



10 大刀
賣金具



9 鉸具

11 帶飾
金具



14 銀象嵌大刀柄頭



13 杏葉



15 雲珠・辻金具



16 ガラス玉



17 漆塗籠棺



18 朱彩付着凝灰岩



碟數・羨道出土土器



羨道西侧埋甕
高坏発見状況

はしがき

河南町平石川流域に分布する加納古墳群と平石古墳群は、これまでの調査研究から6、7世紀に築かれた古墳群であることが知られています。

平成11年秋に、本府教育委員会が府営中山間地域総合整備事業に伴って実施した試掘調査では、新たにシヨツカ古墳が発見されました。平成13年度は、シヨツカ古墳の全容と規模を探る調査を実施しました。その結果、早くから何度も盜掘を受けて、古墳の内部はかなり荒らされたため、葬送の遺品は少ないうえに残片の状態となっていました。しかし、死者を納めた漆塗籠棺の破片や死者に副えられた武器・武具・馬具・装飾品などを採取することができました。これらの遺物の種類の豊富なことと豪華さ、それに石を貼り3段に築いた大規模な方墳からみて、ここに葬られた人物の社会的地位の高さは容易に想像されます。中でも、漆塗籠棺は日本全国を見渡しても、河内と大和の葛城山麓に築かれた古墳以外には用いられなかった象徴的な遺物です。さらに、棺を納める横口式石槨は、この種の埋葬施設では最も古い6世紀後半に造られたことも分かりました。

このように遺構・遺物のいずれから見ましても、これまでの理解を大きく前進させる情報が今回の調査によって得られました。このことからこれらの古墳群は、平石谷の北方に広がる一須賀古墳群や、さらにその北側の「主陵の谷」磯長谷古墳群と並んで、大阪府にとどまらず広く日本全体の歴史遺産として今後大いに注目されることになるでしょう。

本課としましては、以上のような重要性に鑑み、この地区の整備事業については関係機関と最大限に調整を図りつつ、平石谷全体の文化財の保護に鋭意努めさせていただきます。地元の方々、また広く府民全体が共有する大阪府の代表的かつ特徴的な文化財のひとつとしてご理解をいただき、これから調査にこれまで以上のご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後に、今回の発掘調査の実施にご協力いただきました地元の皆さま並びに関係機関に深く感謝申し上げます。

平成15年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、中山間地域総合整備事業（南河内ごせ地区）に伴う、南河内郡河南町所在加納古墳群・平石古墳群の発掘調査概要報告書である。
2. 調査と遺物整理は、大阪府環境農林水産部の依頼を受けて大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。
3. 調査は、文化財保護課調査第二グループ主任技師今村道雄、同桥本哲を担当者として、平成13年10月より平成14年3月まで行った。遺物整理は、調査管理グループ技師山田隆一、同小浜成が担当した。
4. 本書に使用した座標は、国土座標第VI系に基づき、方位は座標北、標高はT.P.で示している。特に必要な場合は磁北の表示を加えている。
5. 航空写真測量は、株式会社日測に委託した。なお、撮影フィルムは同社において保管している。
6. 今回の調査で出土した金属製品・漆製品の保存処理は、（財）元興寺文化財研究所、奈良大学に委託した。
7. 遺構・遺物の写真撮影は（有）阿南写真工房に委託した。
8. 本概要是、300部作成し、一部あたりの単価は3,329円である。
9. 調査と遺物整理にあたり、下記の機関および方々から格別のご協力とご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げます（団体五十音順・団体内五十音順・敬称略）。
森岡秀人（芦屋市教育委員会）、平田政彦（斑鳩町教育委員会）、市川秀之（大阪狭山市教育委員会）、渡邊邦雄（大阪市立住吉商業高等学校）、中村浩、藤澤典彦（大谷女子大学）、安村俊史（柏原市教育委員会）、赤井毅彦、大橋勉（河南町教育委員会）、木下光弘（河南町給食センター）、太田宏明（河内長野市教育委員会）、竹本勇、吉年研一（北加納地区委員長）、上原真人、小野山節（京都大学）、北野耕平（神戸商船大学）、白石太一郎（国立歴史民俗博物館）、石部正志（五条博物館）、堀田啓一（高野山大学）、森村健一（堺市教育委員会）、塙口義信（堺女子短期大学）、江浦洋、山口誠治（財団法人大阪府文化財センター）、神谷正弘（高石市教育委員会）、猪熊兼勝（京都橘女子大学）、置田雅昭（天理大学）、奥田尚、宮原晋一（奈良県立橿原考古学研究所）、西山要一、水野正好（奈良大学）、石野博信、下大迫幹洋（二上山博物館）、伊達宗泰（花園大学）、伊藤聖浩、笠井敏光、河内一浩（羽曳野市教育委員会）、岩瀬透、上林史郎、岡本敏行、山本彰（府立近つ飛鳥博物館）、金閑惣、石神怡（府立弥生文化博物館）、和田晴吾（立命館大学）、泉森峻、尾上実。
10. 発掘調査及び遺物整理・調査概要の作成に要した経費は、農林水産省の補助を受けた大阪府環境農林水産部と文部科学省の補助を受けた大阪府教育委員会が負担した。
11. 本書は、桥本が執筆、編集し、第1章は調査補助員庵ノ前智博が執筆した。第4章については、奈良県立橿原考古学研究所共同研究員奥田尚氏から玉稿を賜った。

本文目次

例言

はしがき

第1章 調査区周辺の遺跡	1
第2章 調査の契機と経過	5
第1節 調査に至る経過	5
第2節 調査の経過	5
第3章 シショツカ古墳の調査概要	10
第1節 調査前の地形	10
第2節 墳丘	10
第3節 外部施設	28
第4節 石室の構造	36
第5節 閉塞施設	46
第6節 羨道	49
第7節 出上遺物	52
第4章 シショツカ古墳の石材鑑定	66
第5章まとめ	70

挿図目次

第1図 平石谷古墳分布図	2
第2図 南河内ごせ地区事業地位置図	6
第3図 平成12・13年度調査区位置関係図	7
第4図 平成13年度調査区位置図	8
第5図 シショツカ古墳全体図	11～12
第6図 墳丘盛土断面図	14
第7図 墳丘第3段北西コーナー平面・断面図	15
第8図 墳丘第3段北東コーナー平面・断面図	16

第9図	墳丘南側前面貼石平面・立面図	17
第10図	墳丘第1段西側貼石出土状況平面・断面図	18
第11図	南東トレンチ貼石出土状況平面・断面図	19~20
第12図	第7トレンチ（墳丘）西側貼石出土状況平面・断面図ほか	21~22
第13図	第7トレンチ（墳丘）東側貼石出土状況平面・立面図	23~24
第14図	第6トレンチ（墳丘）北側貼石・石敷出土状況平面・立面図	25~26
第15図	前面テラス状施設下裾石出土状況平面・立面図	27
第16図	第8トレンチ石列・遺物出土状況平面・断面図	29~30
第17図	第6~8トレンチ断面図	31~32
第18図	第23・24トレンチ、第3調査区東壁断面図	33~34
第19図	石室～羨道部平面・立面図	37~38
第20図	石室内堆積土第207・208層遺物出土状況平面・断面図	39~40
第21図	碟敷上須恵器壺出土状況平面・立面図	41
第22図	碟敷上挂甲小札・鉄鎌・鏡板出土状況平面・断面図	42
第23図	閉塞施設平面・立面図	47~48
第24図	羨道埋甕出土状況平面・断面図	50
第25図	羨道西側埋甕内高坏発見状況平面・断面図	51
第26図	石室および墳丘擾乱土出土土器	53
第27図	碟敷上出土須恵器四耳壺	53
第28図	羨道出土須恵器甕	54
第29図	羨道出土西側埋甕内発見須恵器無蓋高坏	55
第30図	第6~8・23・24トレンチ出土土器	56
第31図	第6トレンチ南端搅乱部出土土器（1）	57
第32図	第6トレンチ南端搅乱部出土土器（2）	58
第33図	石室内搅乱土出土株原石・アプライト片	59
第34図	羨道部搅乱土出土株原石片	60
第35図	第6トレンチ南端搅乱部出土株原石片	61
第36図	シショツカ古墳の石材の石種	67

卷頭写真図版目次

- | | |
|----------------|-------------------|
| 1 シショツカ古墳全景・石室 | 3 金属製品・玉・漆塗籠棺・凝灰岩 |
| 2 金属製品各種 | 4 美道・蹀敷出土須恵器 |

写真図版目次

- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1 シショツカ古墳遠景 | 21 前室後方両側壁 |
| 2 シショツカ古墳全景（1） | 22 奥室壁面細部 |
| 3 シショツカ古墳全景（2） | 23 石室内遺物出土状況 |
| 4 前面貼石 | 24 石室内遺物出土状況細部 |
| 5 墳丘北側全景 | 25 閉塞施設・美道 |
| 6 墳頂コーナー | 26 美道両側壁 |
| 7 墳丘北側周溝 | 27 閉塞施設・美道埋甕 |
| 8 墳丘東側・西側 | 28 石室内堆積土出土土器 |
| 9 墳丘東側貼石 | 29 美道部出土埋甕 |
| 10 墳丘西側貼石 | 30 美道西埋甕内発見土器 |
| 11 貼石中出土株原石 | 31 第6～8トレンチ出土土器 |
| 12 前面周溝・テラス状施設 | 32 第8・23・24トレンチ出土土器 |
| 13 南側・西側周溝ほか | 33 第6トレンチ南端搅乱部出土土器（1） |
| 14 前面テラス状施設下据石 | 34 第6トレンチ南端搅乱部出土土器（2）ほか |
| 15 墳丘第3段盛土 | 35 株原石・アプライト |
| 16 第7・8トレンチ蹀敷・遺物出土状況 | 36 金属製品（1）鉄鎌 |
| 17 石室前面・蹀敷 | 37 金属製品（2）刀子・大刀ほか |
| 18 前室前方両側壁 | 38 金属製品（3）小札ほか |
| 19 奥室全景 | 39 金属製品（4）馬具 |
| 20 奥室両側壁 | |

第1章 調査区周辺の遺跡（第1図）

加納古墳群・平石古墳群は、葛城山系北方の岩橋山（標高658.8m）の西麓、大阪府南河内郡河南町加納・平石地区に所在する。

葛城山系の東麓は急傾斜であるのに対し、西麓は緩傾斜をなす傾動地塊である。一方、西麓は北から一の禿山塊、持尾山塊、白木・中村山塊と呼ばれる3つの山塊による丘陵地帯であり、起伏の激しい地形となっている。一の禿山塊と持尾山塊の間には平石川が、持尾山塊と白木・中村山塊の間には梅川が流れ、後者は加納地区で平石川と合流し、さらに北に流れて石川に注ぐ。

加納古墳群・平石古墳群は、平石川が形成する河岸段丘上に位置する。ここでは一の禿山塊から派生する舌状の複数の尾根が、この谷あいに向かって張り出している。そのような尾根の末端の南斜面に西から東へと並列して、シショツカ古墳、アカハゲ古墳、ツカマリ古墳が築造されている。またそれより西に目をやると、一の禿山塊から南へ張り出す丘陵上には加納古墳群が形成されている。

この谷筋を通る竹内南街道は、河内と大和の国境にある平石峠（標高378m）を越えると、大和国の当麻で丹比道（のちの竹内街道）と合流し、飛鳥京へ至る横大路へ通じている。したがって平石は南河内地方、特に石川上流の山間部と奈良盆地南部とを結ぶ交通の要所であった。

平石谷周辺の遺跡を見てみると、旧石器時代から繩文時代にかけての主だった遺跡は今のところ知られていない。弥生時代になっても、遺跡の数はそれほど多くない。平石谷から北西約3kmに、弥生時代中期後半から後期にかけての高地性集落、東山遺跡がみられる程度である。この遺跡は梅川の東方の標高約90~160mの丘陵上に立地し、竪穴式住居跡が53棟発見されている。

古墳時代になると、寛弘寺古墳群が造営され始める。寛弘寺古墳群は平石谷から西に約3.5kmに位置する低平な丘陵上に形成され、現在約100基の古墳が確認されている。その造墓活動は古墳時代前期後半から終末期まで長期にわたっている。前期から中期にかけての埋葬形態は木棺直葬であり、後期中葉になって横穴式石室が導入される。この時期の集落遺跡としては、古墳時代中期の竪穴式住居が数棟検出された神山遺跡が挙げられるが、その様相はまだ明確でない。

古墳時代後期になると、平石谷の周辺で数多くの古墳が築造されはじめる。その代表的なものが、平石古墳群の北方に隣接する一須賀古墳群である。一須賀古墳群は、高安千塚古墳群・平尾山千塚古墳群と並ぶ河内の三大群集墳の一つである。6世紀前半から7世紀中葉ごろまで築かれた古墳群で、現在約250基もの古墳が確認されている。径10~20m程度の円墳を中心で、中には方墳もみられる。埋葬形態の多くは横穴式石室である。玄門に石階をつくり玄室を一段低くするような石室形態やミニチュア炊飯具形土器の出土などは、渡来系氏族の影響を受けた特色とされている。

後期後半になると、加納古墳群が築かれるようになる。径10~15m程の円墳で、石室形態は横穴式石室である。その中で2号墳はほぼ完存した状態で発見され、玄室長さ3.20m、幅1.65m、



第1図 平石谷古墳分布図

- | | |
|----------------|-----------------------|
| 1 加納古墳群 1号墳 | 9 同大原古墳 |
| 2 同 2号墳 | 10 同バチ川古墳 |
| 3 同 5号墳 | 11 同バチ川 2号墳 |
| 4 同 6号墳 | 12~15 同ツカマリ北古墳他 |
| 5 同 7号墳 | 16 平石古墳群（無名古墳） |
| 6 平石古墳群シヨウカツ古墳 | 17~19 一須賀古墳群P支群 2~4号墳 |
| 7 同アカハゲ古墳 | 20~23 同M支群 2~5号墳 |
| 8 同ツカマリ古墳 | |

高さ1.80mの規模で、赤色彩文付き黒漆鞘入り刀、中空金製耳環、鉄釘、須恵器（台付壺、壺）といった遺物が出土した。

河南町南部の芦生谷では、全国的にみても稀な双円墳の金山古墳が築造される。金山古墳は長軸の長さ85.8mで周濠を廻らしている。昭和21年、小林行雄氏らにより発掘調査が行なわれた北丘では、内部に削抜式家形石棺2基を納めた横穴式石室が設けられていることが判明した。平成5年度の河南町教育委員会による発掘調査では、南丘にも北丘と同じような横穴式石室の存在が確認されている。築造年代は600年前後とされている。

古墳時代終末期になって、平石古墳群が築造されはじめる。シヨツカ古墳から東北東約370mにアカハゲ古墳が、それより北東約170mにツカマリ古墳が築造される。いずれも花崗岩切石を使用した横口式石槨墳である。アカハゲ古墳は、全長9.66m、石槨の長さ2.3m、幅1.5m、高さ1.2mで、石槨の前に前室と羨道が付く構造である。石槨内部は盜掘をうけていたが、漆塗籠棺・ガラス製扁平管玉・黄褐色有蓋圓面鏡などの遺物が出土している。ツカマリ古墳は、全長7.65m、石槨の長さ2.4m、幅・高さはともに1.32mで、石槨の前に羨道を備える。アカハゲ古墳と共に通する塗塗籠棺・ガラス製扁平管玉が見られるほか、金象嵌竜文大刀や緑釉陶製棺台・金製コイル状金具、七宝飾銀製刀子飾金具なども出土している。これらの横口式石槨墳の北方の丘陵上にもバチ川古墳やバチ川2号墳、大原古墳など切石造りの石室墳が築造されている。

平石谷東方の葛城山地中には持尾古墳群が展開している。現在、岩橋山の頂上付近に横口式石槨の未完成といわれる久米の岩橋や、7世紀中葉以降の横穴式小石室が4基確認されている。

一の秃山塊の北方、二上山西麓には盆地状地形の磯長谷が広がる。磯長谷古墳群は一般に「王陵の谷」と呼ばれ、ここには最後の前方後円墳である太子西山古墳（伝敏達陵古墳）をはじめ、春日向山古墳（伝用明陵古墳）・山田高塚古墳（伝推古陵古墳）・春日上ノ山古墳（伝孝德陵古墳）のような大王墓や上城古墳（伝聖德太子墓）が存在する。

磯長谷古墳群には干陵墓以外にも、7世紀前半の大方形墳群である葉室古墳群や、7世紀後半に築造された双方墳の二子塚古墳などがある。また横口式石槨墳もみられ、7世紀中葉以降とされる松井塚古墳・仏陀寺古墳などがある。田須谷1号墳は、復元すると小口山古墳に類似する横口式石槨墳と考えられている。梅原末治氏の報告によると太子町春日にも横口式石槨墳が存在し、春日古墳と呼ばれているが、位置は定かでない。石槨の形態から7世紀中葉以前に築造された可能性が高い。

平石古墳群や磯長谷古墳群以外にも、南河内には多数の横口式石槨墳が築造されている。

磯長谷古墳群北方の鉢伏山・寺山付近に位置する飛鳥千塚古墳群内には、觀音塚古墳・觀音塚西古墳・觀音塚上古墳・鉢伏山南峰古墳・鉢伏山西峰古墳・オーコ8号墳がある。いずれも石槨の前に前室と羨道、もしくは羨道だけをもつ形態である。

平石谷の南西約1.5km、白木・中村山塊の北方に築かれた白木古墳群内では、7世紀中葉に白木古墳と白木北古墳（仮称）が築造され、後者では底石だけが残っていた。

石川の左岸、羽曳野丘陵の北側には、7世紀後半のヒチンジョ池西古墳・小口山古墳・徳楽山古墳が分布する。羽曳野丘陵の東側には、お龜石古墳・宮前山1号墳がある。お龜石古墳の石椁を取り巻く瓦積施設に用いられた瓦は近隣の新堂廃寺のもので、両者の間には相互の関係が窺われる。平成13年度に富田林市教育委員会は発掘調査を実施し、この古墳が一辺21mの方墳で、築造年代は625年前後と発表した。

これより以降、周辺で注意されるのは、平石峠の山道入口付近に高貴寺が建立されることであろう。高貴寺は、文武天皇の時代に役行者が葛城山の峯々に開いた28カ所の靈場の一つとして香花寺と名付けたのが始まりであると伝えている。現在も境内には鎌倉時代末期の石造十三重塔や石造宝篋印塔、応永2(1395)年在銘の石造燈籠などを見ることができる。

高貴寺の西方には、もとは鎮守であったが、明治初(1868)年の「神仏分離令」によって分社された磐船神社がある。さらに磐船神社の西方、標高243mの丘陵上には、南北朝期に楠木家の支城として河内国南部で重要な役割を果たした平岩氏の居城、平石城跡がある。これについては正平14(1359)年、足利義詮が南朝の本拠地である河内国南部に攻め入った際、「福塚、川辺、佐々良、岩郡、橋本判官以下ノ兵ハ、平石ノ城ヲ構テ、五百余騎ニテ楯籠ル」とある『太平記』卷34の記載に拠って知られ、翌正平15(1360)年、平岩氏は防戦の末敗北を喫したという。

参考文献

- 梅原末治 「河内踏査報告(五)」「考古学雑誌」4-1 1913年
- 上林史郎 「一須賀古墳群の形成－I支群を中心にして－」「大阪文化財論集II－財團法人大阪府文化財センター設立30周年記念論集－」 2002年
- 水野正好 「IV 古墳時代」「図説 発掘が語る日本史」4近畿編 新人物往来社 1985年
- 大阪府教育委員会 「金山古墳および大藪古墳の調査」 1953年
- 大阪府教育委員会 「加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要－中山間地域総合整備事業(南河内ごせ地区)に伴う－」 2002年
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 「一須賀古墳群の調査II WA支群」 2000年
- 香芝市二上山博物館 「葛城山麓の終末期古墳と古代寺院－平野古墳群と尼寺廃寺跡」 2002年
- 河南町・河南町教育委員会 「前方後円墳の終焉」 1994年3月27日
- 河南町誌編纂委員会 「河南町誌」 1968年
- (財)大阪府文化財調査研究センター 「田須谷古墳群－南阪奈道路建設に伴う終末期古墳の発掘調査－」(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第43集 1999年
- 富田林市教育委員会 「お龜石古墳現地説明会資料」 2002年2月10日
- 富田林市史編集委員会 「富田林市史」第1巻 1985年

第2章 調査の契機と経過

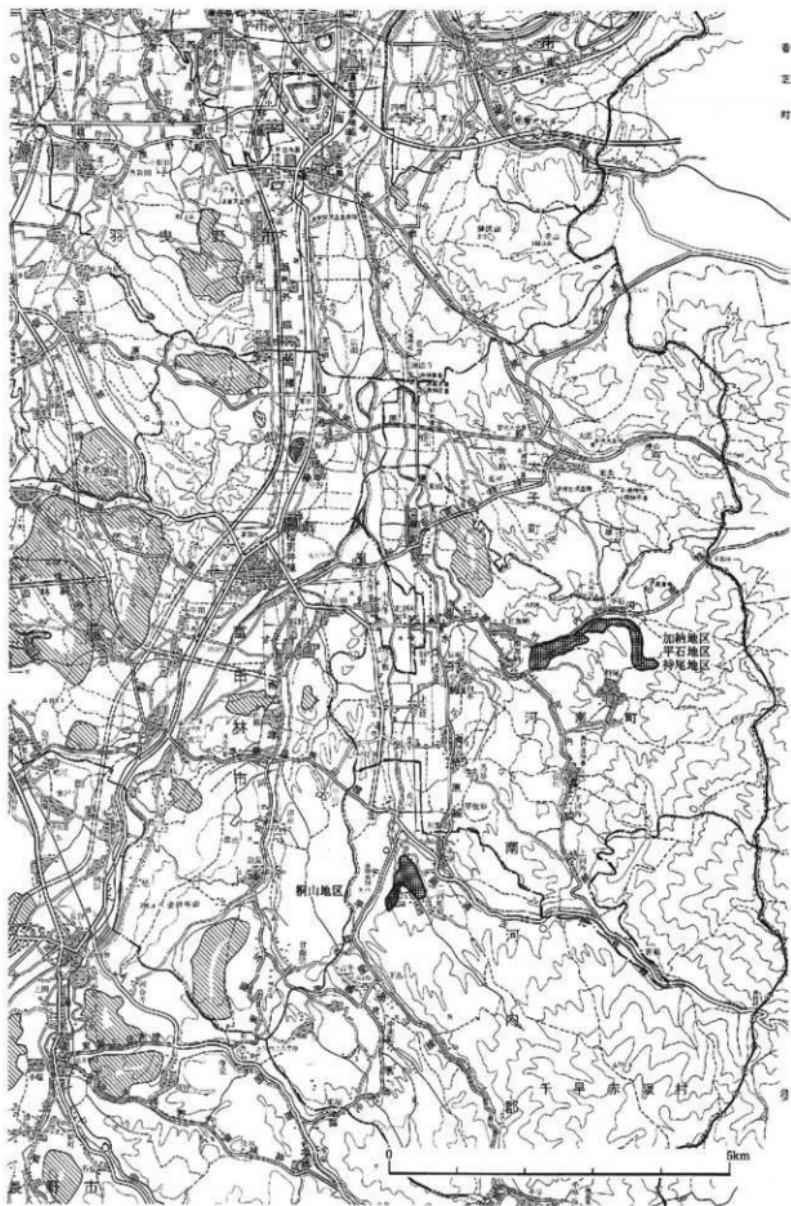
第1節 調査に至る経過（第2～4図）

本調査は、「南河内ごせ地区の農空間整備事業」に伴い、平成11年度から大阪府教育委員会文化財保護課が環境農林水産部からの依頼を受けて実施している。この事業は、農作業の省力化・効力化を図り、大雨災害を受けにくい農地・農業施設を作り、豊かな自然遺産と歴史資源を有効に活用しつつ、都市住民との交流型農業の展開に寄与することを目的とし、平成10年から平成16年にかけて圃場整備を実施する計画である。圃場整備対象面積は、河南町加納・平石・持尾地区と千早赤阪村桐山地区の55.7haである。事業対象地区内には前章で述べたように、多くの歴史・文化遺産が知られている。このことから本課は事業主体の大坂府環境農林水産部と埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、これらの地区において平成11年度に試掘調査を実施し、埋蔵文化財の分布を把握した。その調査結果に基づき平成12年度には加納地区と桐山地区で発掘調査を実施し、特に加納地区では加納1・2・5・6号墳を中心とする古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳の内容を明らかにした。残存状態の良好な加納2号墳については環境農林水産部と協議の上、若干の工法を変更して、保存が図られることになった。平成13年度には前年の結果を踏まえ、加納・平石両地区にわたり、総面積10,150m²について発掘調査を実施した。

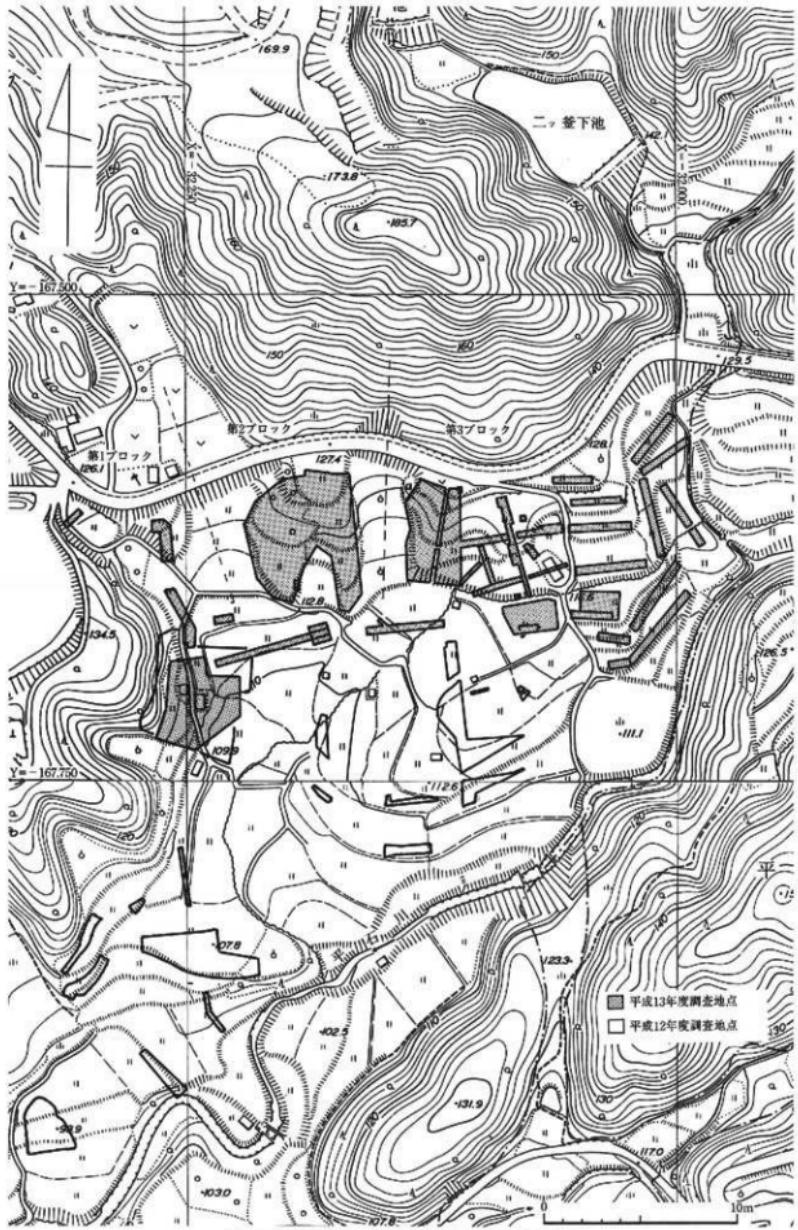
第2節 調査の経過

準備作業を経て実際の発掘調査にかかったのは、平成13年10月である。調査地は、平石谷へ流れ込む南北方向の旧谷筋によって東西に大きく3つのブロックに分けられる。それを西から東へと調査を進めた。まず最初のブロックでは前年度に実施した加納古墳群を中心とする第1調査区と第1～4トレンチ、次いで丘陵先端が南に分岐して張り出す第2のブロックでは第2調査区、そして最後は、平成11年度の試掘調査で発見された、シヨツカ古墳の築かれた安定した南向き丘陵を中心とする第3のブロックで、ここでは同古墳西でやや南に張り出しを見せる丘陵を対象とした第3調査区と、シヨツカ古墳そのものを把握するための第6～9・23・24トレンチほかの小トレンチ、さらに古墳東側の谷部に至る棚田を対象とした第10～22トレンチを設定した。

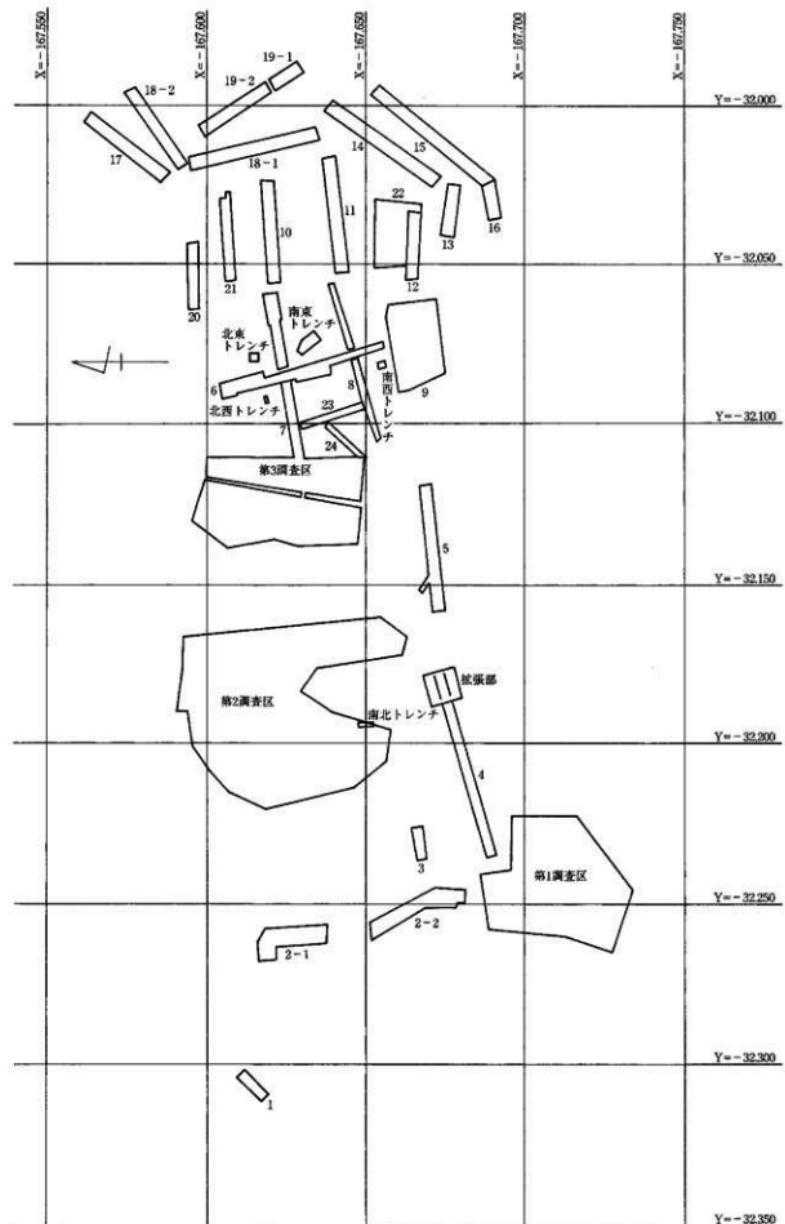
第1ブロックの調査経過 第1調査区では前年度の加納1・2号墳と5・6号墳の墳丘構築を観察する作業を継続した。石室が良好に残り、保存がなされることになっている加納2号墳では床面の一部断ち割りを行った。その際、金製耳環が玄室壁面下の炭層より1点出土している。将来の農道により一部除去される予定の羨道入り口の側石については調査後、除去して掘り方を観察した。また羨道入り口の閉塞に利用された凝灰岩板石も取り外した後、入り口を閉鎖した。一方、側壁・奥壁を残す加納1号墳は農道によりやむなく取り壊されることになったため、墳丘



第2図 南河内こごせ地区事業地位置図



第3図 平成12・13年度調査区位置関係図



第4図 平成13年度調査区位置図

の断ち割りを行って構築状態を観察し記録保存とした。第1調査区北の痩せ尾根にはトレンチを数本設定して、堆積土の観察を試みたが、地山層とその上の流土、さらにそれらの上に盛土した耕作土を確認したのみで遺構は検出されなかった。

第2ブロックの調査経過　ここでは北方から下る分岐する尾根に設定した第2調査区で、横穴式石室の残骸が丘陵先端部で検出された。側壁・奥壁の石はすべて取り除かれて、その痕跡だけであった。現在の道路より南にかけてこの尾根全体が棚田を得るために数段に削平されていて、耕土直下に黄色い地山が露呈する状態であった。耕土下に部分的に認められた薄い灰褐色粘質土からは中世の瓦器片が混じるので、少なくとも中世には古墳は棚田造成により消滅した可能性が高い。この尾根下の低地に設定した第4トレンチでは、東端で第2ブロックと第3ブロックの境の谷部に派生すると思われる旧谷地形が検出された。その埋積土より古墳時代後期～中世の土器類をはじめ、加工された木材の断片が出土したため、拡張して（第4トレンチ拡張部）より詳しいデータを得ることとした。その結果、奈良時代から中世を経て現在の耕作地が形成される過程が把握できた。また加工された木材にはアカマツの幹を半截した平坦面に削り込みがなされている。

第3ブロックの調査経過　このブロックの中心には南に張り出す整った棚田があり、これがシショツカ古墳（現地に残る字名「シショツカ」より命名された）そのものであるため、それを挟む東西の状況を把握する目的で、西に第3調査区を設定し、また東の農道を挟んだ棚田、さらにその東の谷地斜面に対して北から南へトレンチを設定した。シショツカ古墳では南北方向と東西方向のトレンチを設定して墳丘や石室の残存状態、外部施設などの観察を行った。第3調査区は南北方向の尾根が張り出していたが、ここには何回かにわたって繰り返された棚田造成の状況を断面観察によって知り得た以外、遺構・遺物は検出されなかった。その他のトレンチで注目されるのは、シショツカ古墳の南に設定した第9トレンチの耕土直下で、主に奈良時代の土師器・須恵器類を出土する不定形な土坑が、また第12トレンチではピットの一部が検出されたため、さらに拡張した結果（第22トレンチ）、方形堀方をもつ3間×4間程度の掘立柱建物が検出されたことが挙げられる。しかしこれらの遺構は圃場整備事業によって破壊されることはないと想定され、検出にとどめ埋め戻して保存することとした。その東側の第14・15トレンチでは北から南に落ちる小規模な谷筋が検出され、堆砂中より奈良時代～中・近世の土師器・須恵器・瓦器・磁器が多量に出土した。

第3章 シショツカ古墳の調査概要

第1節 調査前の地形

平成11年度の試掘調査の $2.0 \times 6.0\text{m}$ の南北トレンチ（試坑No62）では、現地表面より 1.25m で石室天井石が存在すること、墳丘盛土は版築状であること、南端部では石室に向かって盜掘坑が開けられていることを確認していた。それによっても想像以上の良好な残存状況が窺われたので、今回の調査では出来る限り損壊を防ぎ、かつ古墳の構造を掘る必要から、南北方向のトレンチ設定ではこの試掘坑をそのまま延長して縦断面の観察に利用した（第6トレンチ）。したがってトレンチ全体の方向は石室平面の中軸線と若干ずれが生じている。

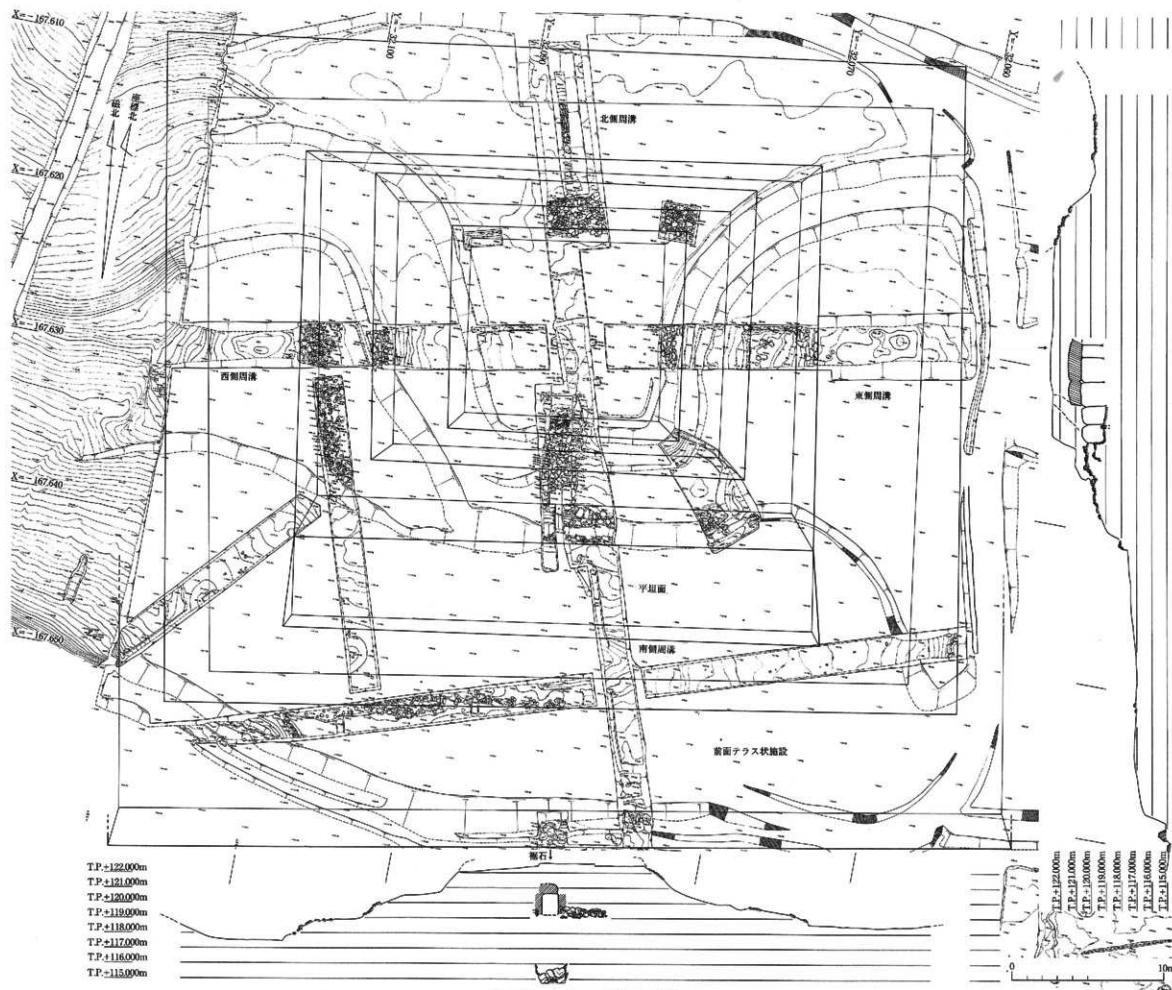
調査前の状況は上底 10.0m 、下底 40.0m 、高さ 24.0m ほどの、平面が台形をなす山が南に突出し、その縁辺を巡るように南側に3段の棚田が取り付いていた。しかし東側では中段は上段に平行するものの、下段のラインは南東に拡がって、古墳東の農道と合流し、一方西側では下段の上に盛土をしていたため下段と中段が同一面の棚田に変更されていた。下段の下には南北 16m ほどの平坦な田があり、その南端の高さ約 2m の法面は石垣となっていた。石垣は人頭大の乱石積みであるが、下場には一部コンクリートで固められた長さ 10m 以上の大石が据えられていた。

シショツカ古墳は、直線距離にして北西 660.0m 、標高 238.97m に設置されている三角点のある山頂（通称「一の禿」）から、途中南西に屈曲しつつ南東に延びる主尾根が、稜線からやや南にずれる平石谷右岸段丘へと収束する先端を選んで築かれている。現在の府道竹内河南線がこの山裾に沿って大きくカーブを描くところで、東は平石谷の集落から西は富田林方面が望まれる。古墳背後の北に立ち上がるるのは、先の主尾根に連なる稜線上を南下する標高 186.6m の山頂であり、ここからの傾斜面をほぼ現府道の南の崖面あたりで東西に切って南側を独立させ、その南側の緩やかな傾斜面に墳丘が築かれている。上記の南端裾の石垣の下場からこの山頂までは地図上で直線距離にして約 200m 、山頂との比高 70m で仰角は 19° 、山塊を断ち切っている現在の道路面までは約 60m 、比高 25m で仰角は 11° を測る。当初の墳頂を、高さ 1.0m ほどの削平高を考慮して現状より高さ 1.0m 以内までと考えると、距離 30.0m 、比高 8.0m で仰角は 16° 程度になる。古墳の立地する位置は東に高く西に低いため、やや西に偏るけれども、仰角 20° 以内で仰ぎ見ることのできる山頂と、東西が谷地形で区切られた尾根の先端で、周辺から際立つ墳形は、背後の山塊に無理なく包み込まれ、安定した印象を受ける。

第2節 墳丘（第5図）

1) 墳丘の形状と規模

墳丘第2・3段に版築状盛土を施す3段集成の横長の方墳である。この墳丘を載せる墳丘裾平



第5図 シジョツカ古墳全体図

壇面（T.P.117.5m）と残存墳頂（T.P.122.2m）との比高差は4.7mを測る。規模は、貼石の残りが多い東側と北東隅角そして北側を中心に復原してみると、第1段は南北25.3m、東西34.2m、第2段は南北18.9m、東西24.9m、第3段は南北13.6m、東西15.3mとなる。したがって各段の南北と東西の辺長の比率は、第1段が1:1.35、第2段が1:1.31、第3段が1:1.13を得る。第3段の数値は西側が削られているので本来の辺長が掴みにくいためあって、本来は第1・2段と同じような比率をとっていたと考えられる。尺0.3mとした場合、第1段南北84.33尺、東西114.00尺、第2段南北63.00尺、東西83.00尺、第3段南北45.33尺、東西51.00尺に換算できる。以上の各辺の比率からすると、簡便に計測可能な辺長3尺:4尺:5尺の直角三角形を基本とする平面取りも考えられよう。

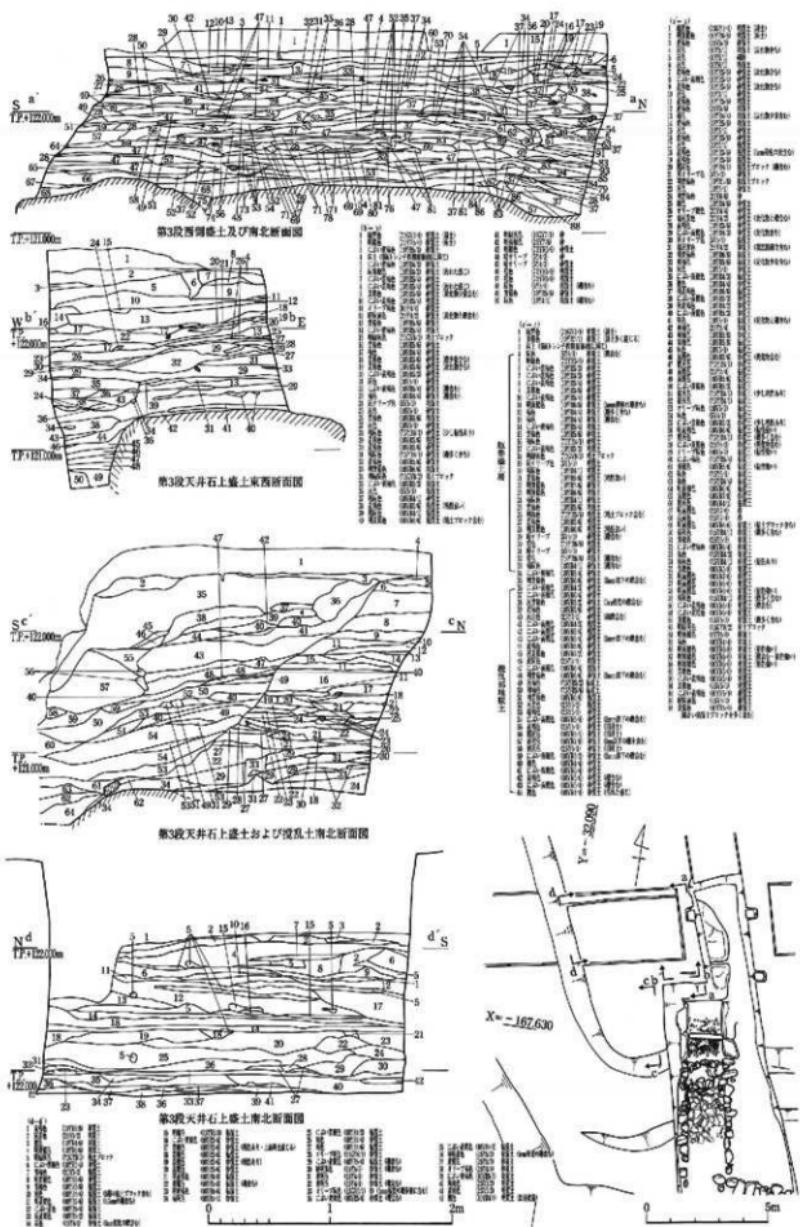
残存墳頂までの高さは、東辺中央で3.48m、西辺中央で4.11m、南辺中央で5.00m、北辺中央で2.03mである。各段の高さについてみると、第1段は東辺で0.92m、西辺で0.98m、南辺で2.34m、北辺で0.4m、第2段は東辺で0.8m、西辺で1.1m、北辺で1.5m、第3段は東辺で1.3m、西辺で1.13m、北辺で0.2mを測る。南辺の第2・3段の立ち上がりは閉塞石の上部や天井石が盗掘など後世の搅乱で1枚外されているので推定せざるを得ないが、側壁や残存する天井石の上面ラインなどを考慮して、第2段が0.7~0.8m、第3段で1.8m程度と考えられる。段の傾斜度は南北方向では、南側第1段が35°、第2段が45°、第3段は68°~70°、北側第1段は25°、第2段は40°、第3段は20°を計測する。また東西方向では東側第1段30°、第2段20°以上、第3段38°、西側第1段30°、第2段35°、第3段55°を測る。

段と段の間には小テラスが巡る。テラスの幅は一定していない。第1段テラスでは、南辺と東西両辺に比べ北辺は0.5mと狭い。第2段テラスでは東西両辺に比べて南北両辺が狭くなる。そして北辺ではやや傾斜するが約1.5mとなり、東西両辺からのテラス面の連続が認められる。

以上のように高さ、傾斜角、テラスの取り方などからみると、北から急激に南に下る尾根を背負い、東に高く西に低い地形に制約されながら、その中に正面、つまり南向きを強調しようとする築造企図が窺われる。

2) 墳丘の構造（第6図）

墳丘の築成は、第1段については南東コーナーに設定した南東トレンチや第7トレンチ東側西部に現れた、後世の耕作活動により削られた壁面から部分的にではあるが窺われ、また第2~3段については南北断面（第6トレンチ）、東西断面（第7トレンチ）そして第3段の削り取られた西辺（第7トレンチ西側第3段法面）により観察できた。第2~3段では砂質土と粘質土を主体として、これを交互に水平に積み上げている。層厚は2.0~10.0cm幅が多いが、墳丘中心部の天井石上ではきめ細かく密であり、その周辺はやや粗い。交互といっても同じ土を何回か積み上げ、その後別の土をまた何回か積み上げているようである。天井石の周囲の若干傾斜する面ではさらに層厚5.0~10.0cmの粘土を加えている。また砂質土と粘質土を中心には凝灰岩や花崗岩の0.3~0.5cmの礫粒が混入していたため、断面にはそれらが白っぽく表出していた。しかしこれらの礫粒が



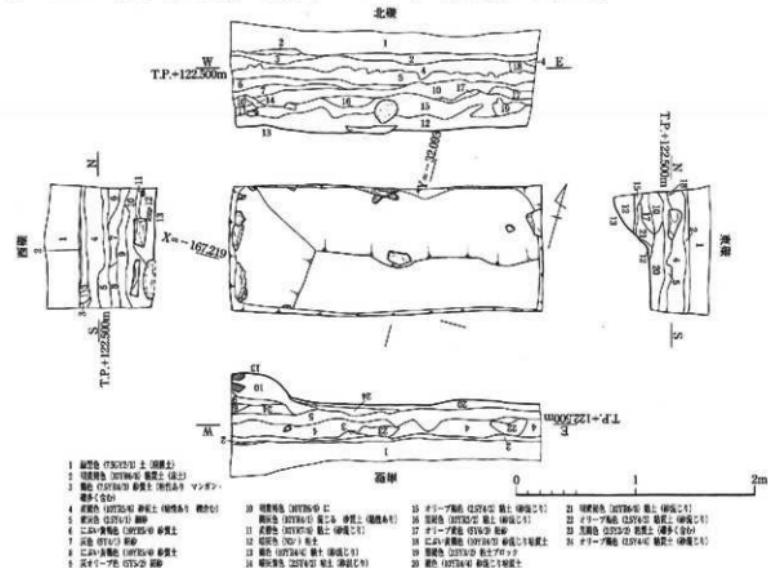
第6図 填丘盛土断面図

認められるのは、特に天井石直上に限っている。このようにして締まりのある比較的硬い埴丘が構築されている。この版築状の盛土の1層（第31層）から器種は不明であるが須恵器細片が出土している。

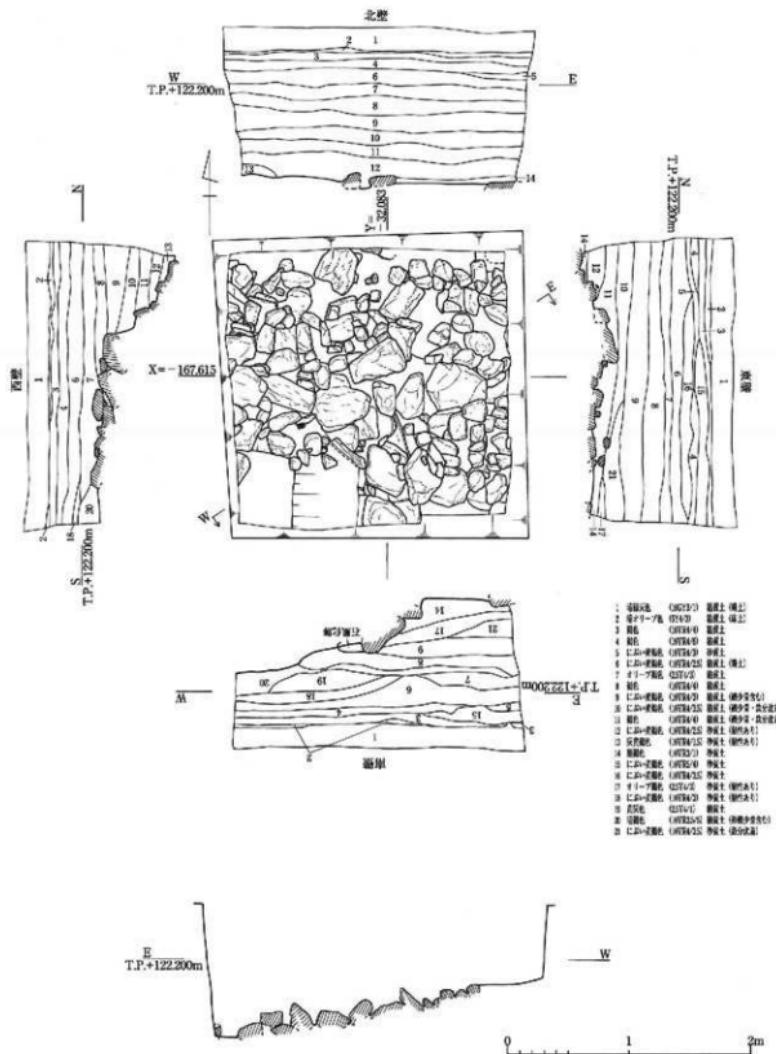
西側では第2段の上に2.0~5.0cmの砾を含んで東から西へ流れるように堆積する褐色土の溜まり（第7トレンチ西側断面第37層）が観察された。おそらく後世、埴頂を削平して現状の平坦な耕作面に造成する際に西側に落とされたものであろう。したがってこの褐色土とそれに混じる砾はもともと埴頂に施されていたものと想像できる。

埴丘第1段の基盤土は第2~3段のような版築状ではなく、砂質土を主体とする盛土である。後述するように、奥室に流入した搅乱土を除いて露出した奥壁下面の砂質土（第6トレンチ第238層）と同じ土質が、南東トレンチb-b'断面（第16層）で確認されている。これからすると第1段の盛土は石室を構築する基盤土であると考えられる。ただ違いは奥室のそれがより締まった硬い感触であった。

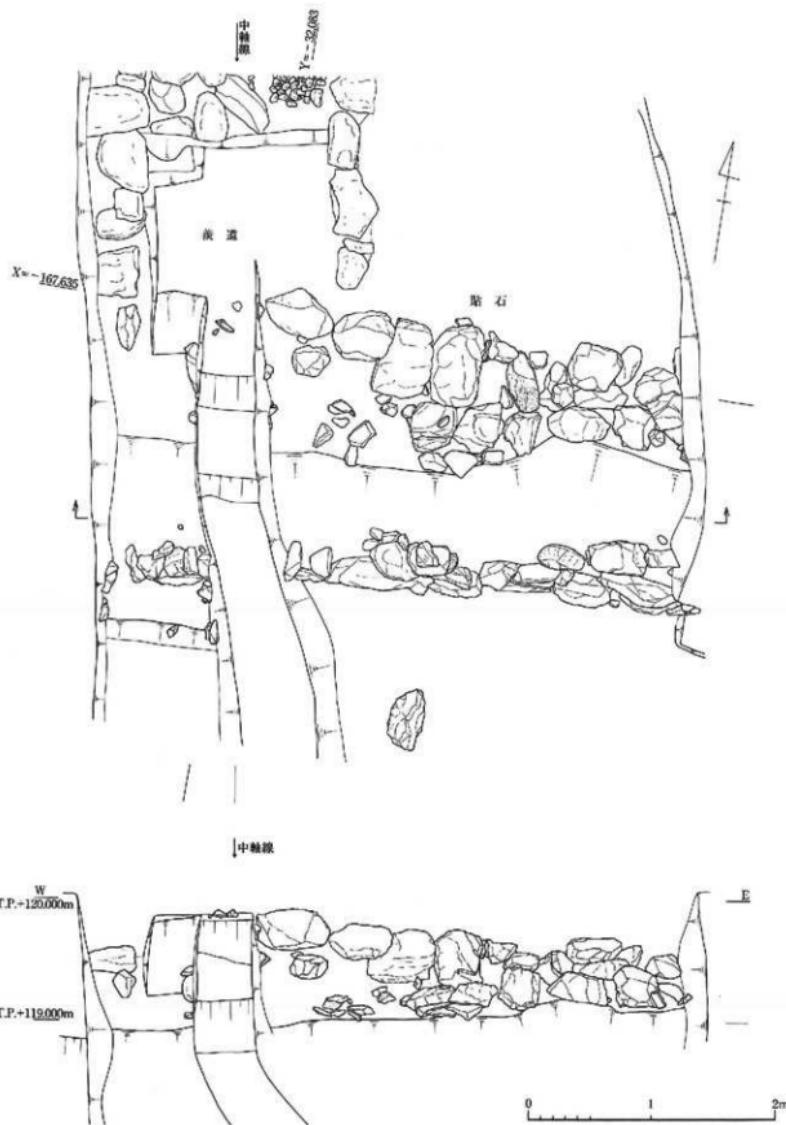
埴丘第1段盛土のデータとしては、平成11年度の試掘調査の際、ちょうど南側第1段テラスに設定した試掘坑Na63の断面観察の結果がある。このときは現地表面から1.5mまで掘り下げ、耕土下に褐色土を基調とする6層を認めた。現地表面から0.5~0.9mで北から南に傾斜する3層の堆積土の内、上位2層には淡灰色の微砂が縦状に混じり、それらの下は灰色細砂で、さらにその下が黄褐色の砂質土であった。灰色細砂の上面（T.P.118.8m）は平坦面をなし、石室奥壁際の下面にみられた微砂（第238層）や南東トレンチb-b'（第16層）であった。



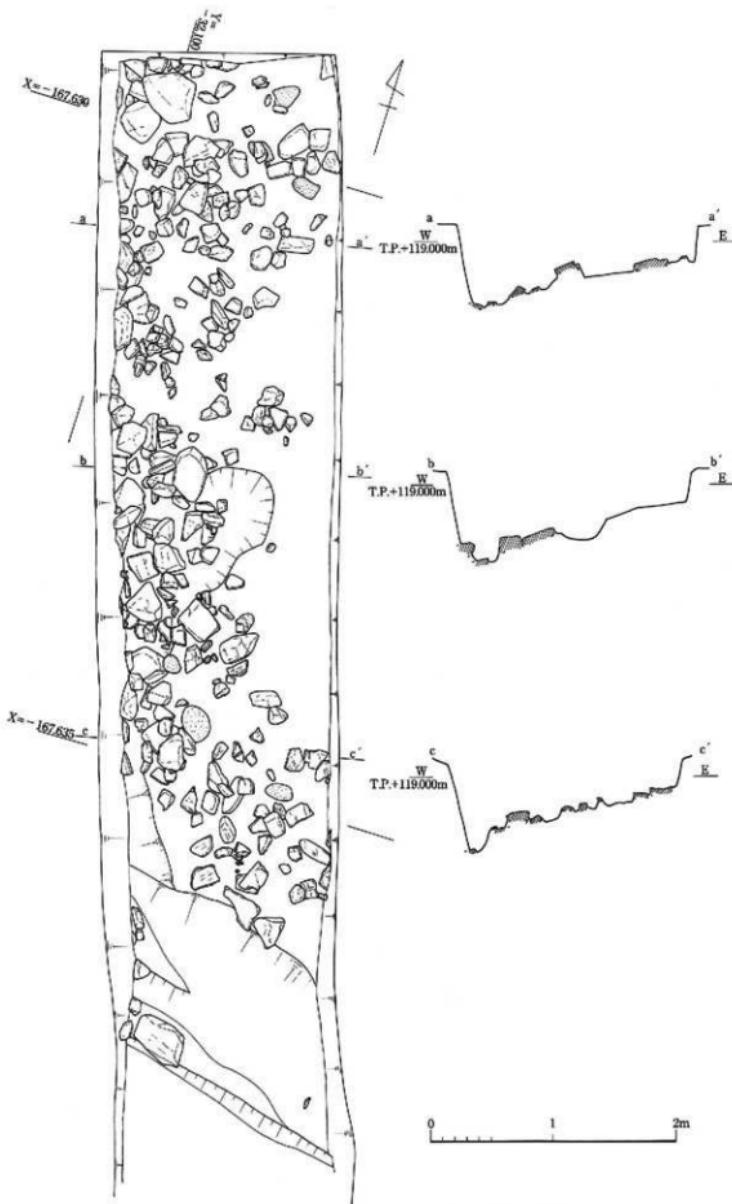
第7図 墓丘第3段北西コーナー平面・断面図



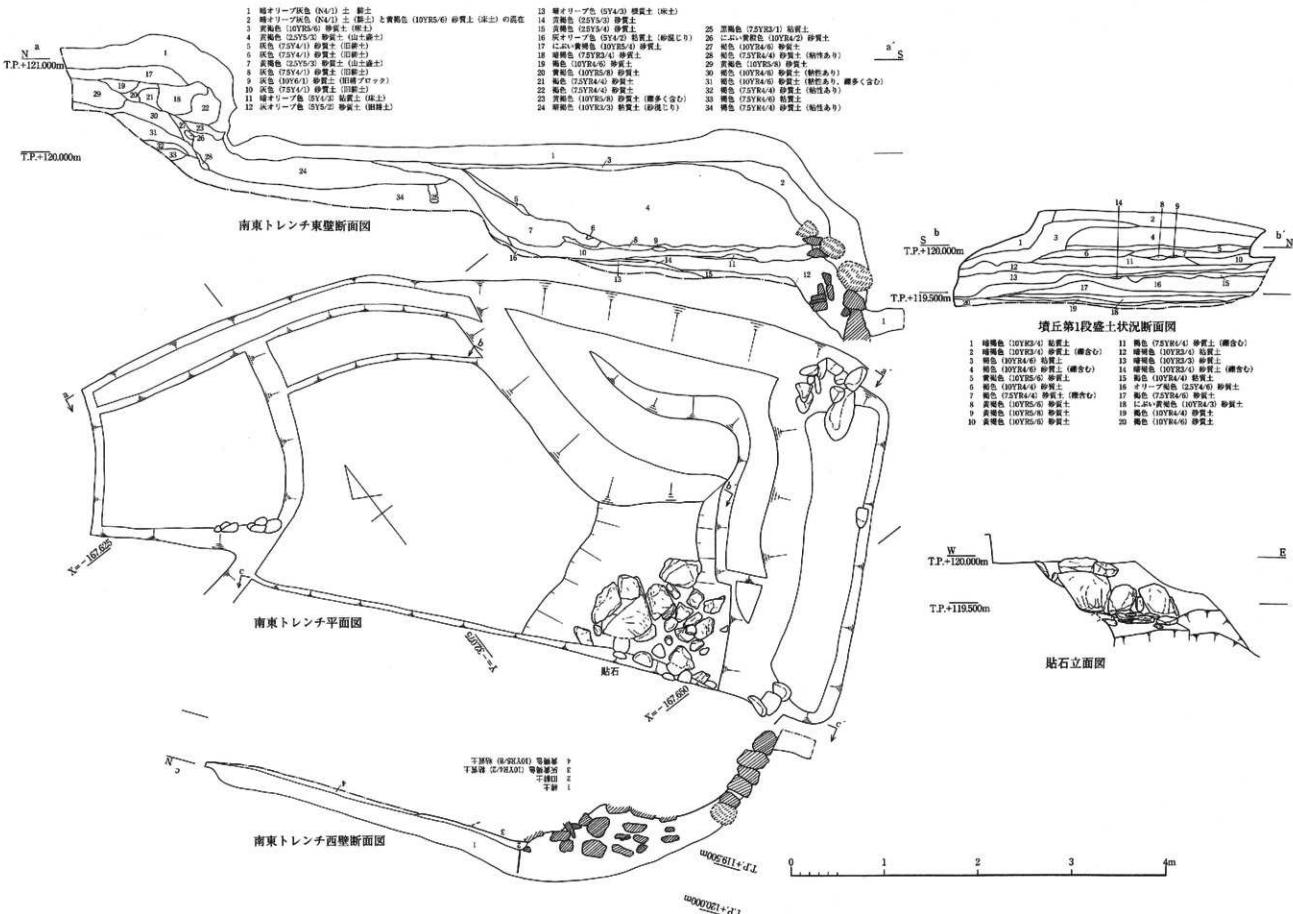
第8図 塙丘第3段北東コーナー平面・断面図



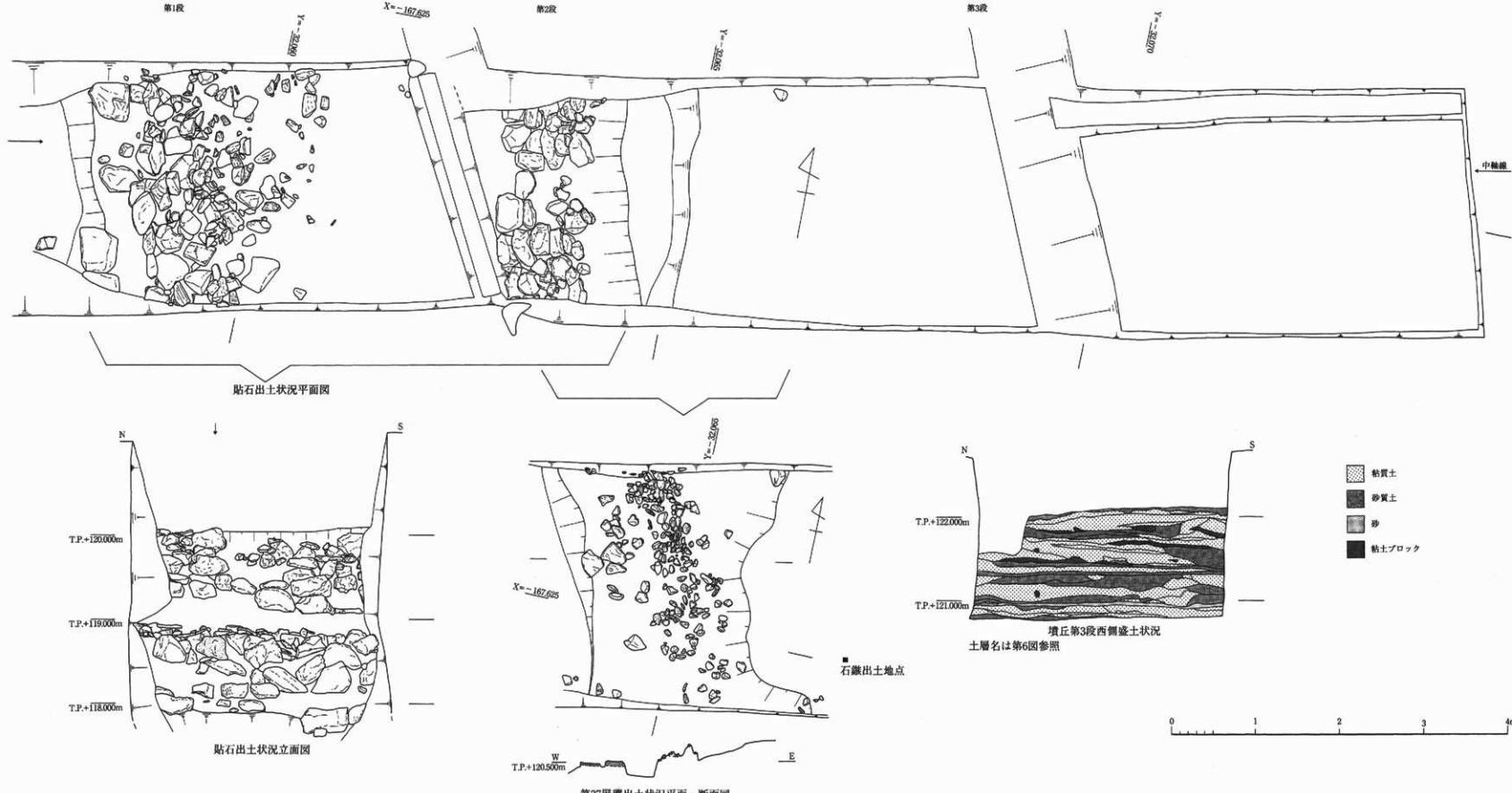
第9図 墳丘南側前面貼石平面・立面図



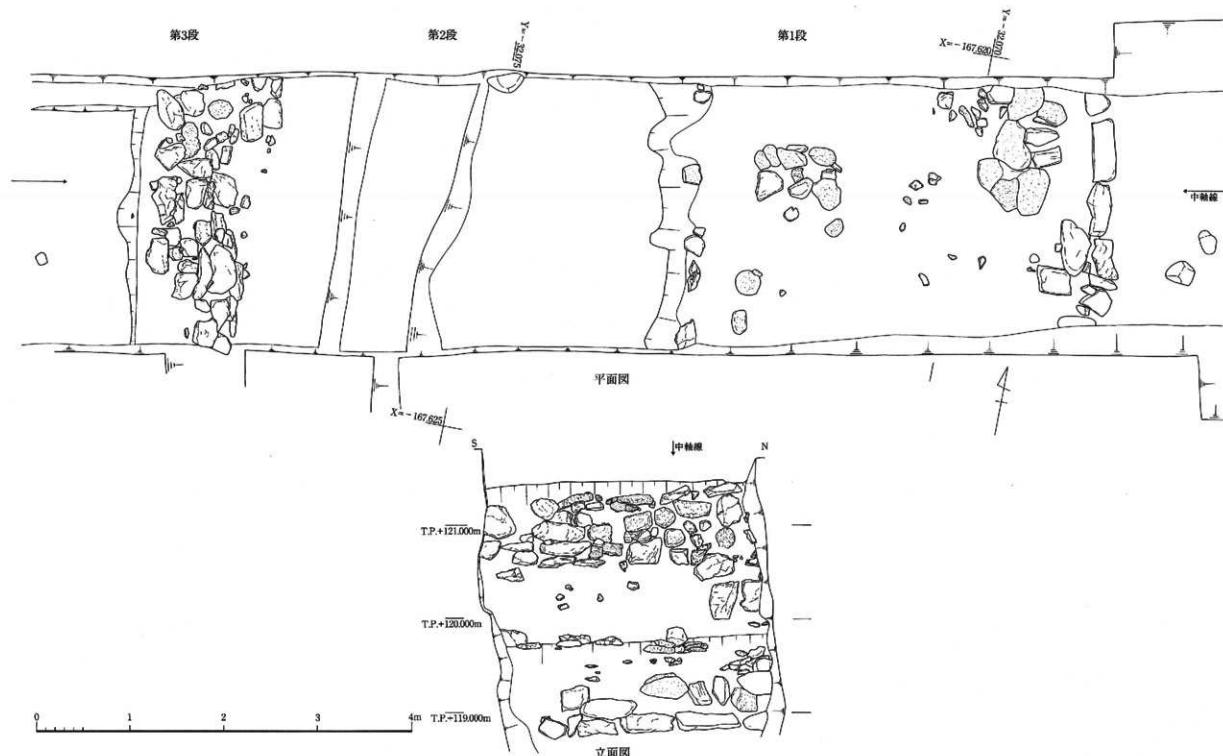
第10図 墳丘第1段西側貼石出土状況平面・断面図



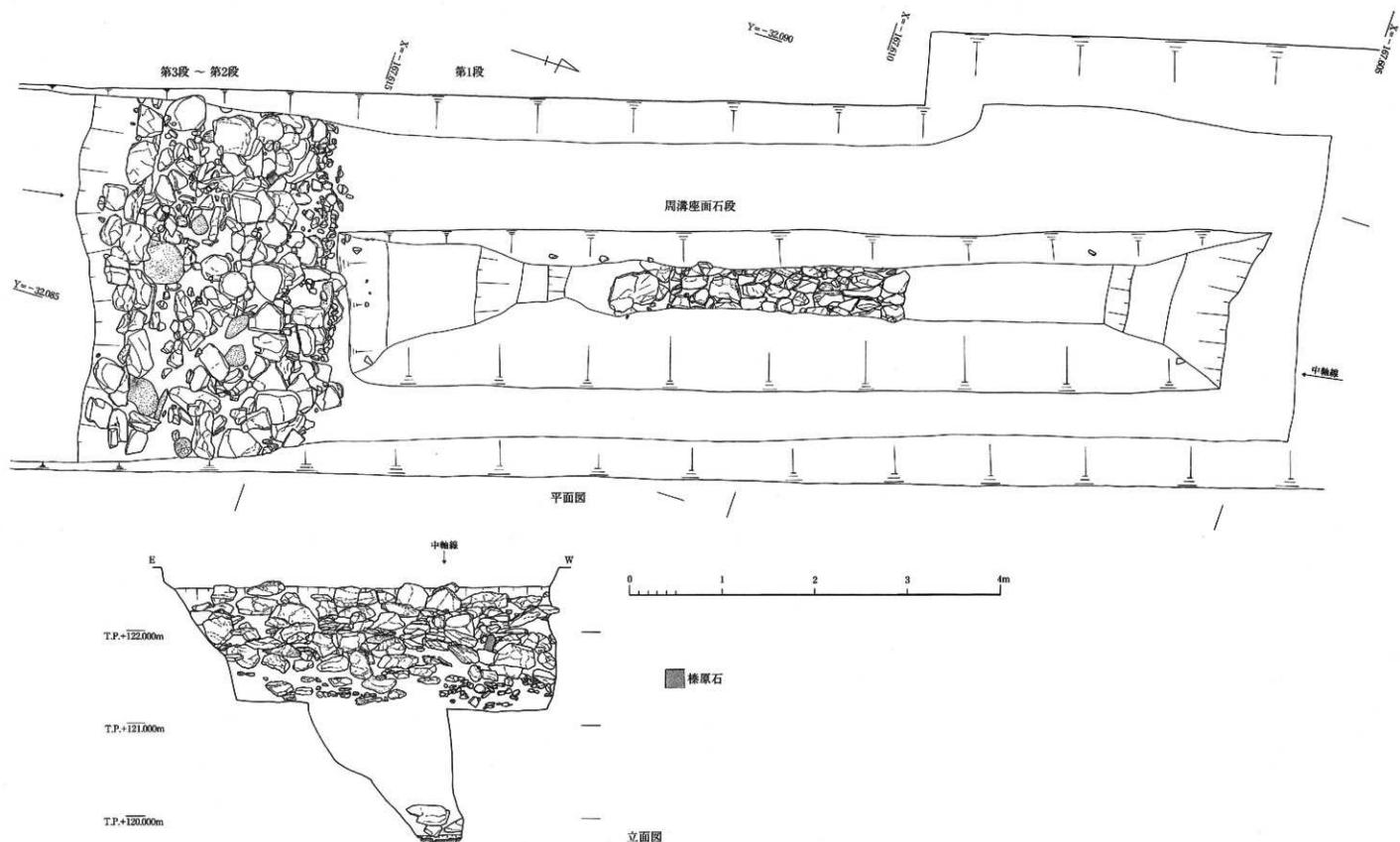
第11図 南東トレンチ貼石出土状況平面・断面図



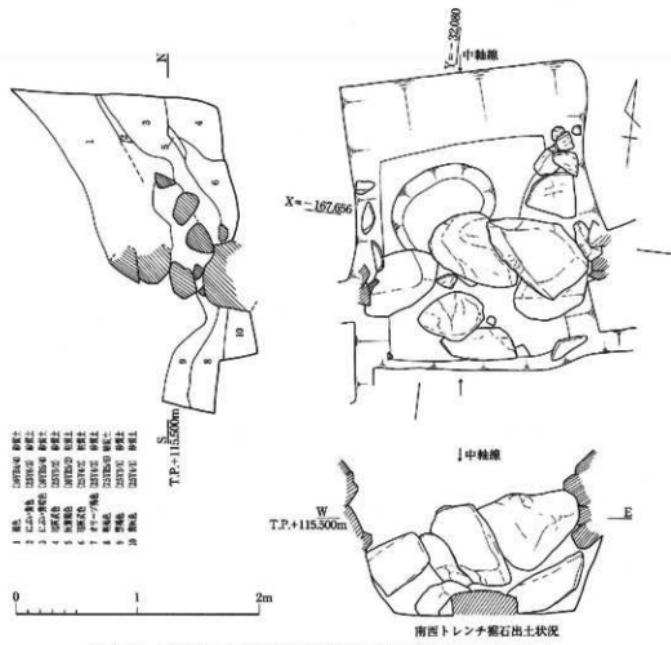
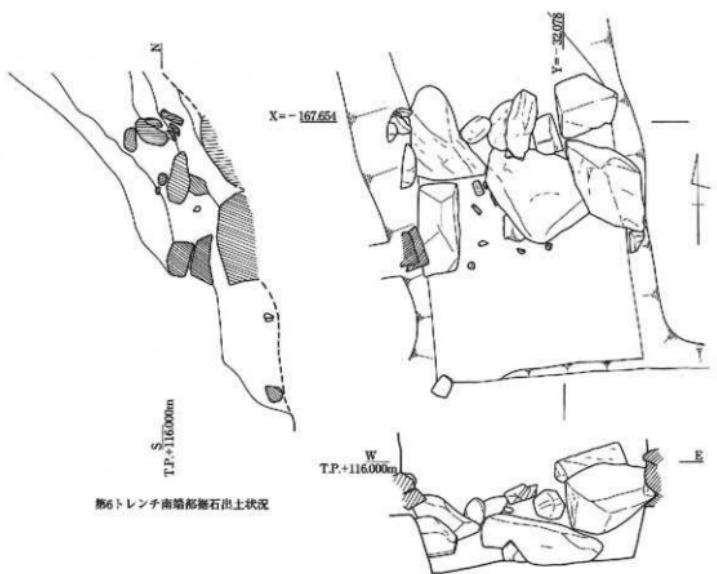
第12図 第7トレンチ（墳丘）西侧貼石出土状況平面・断面図ほか



第13図 第7トレンチ(塙丘)東側貼石出土状況平面・立面図



第14図 第6トレンチ(填丘)北側貼石・石敷出土状況平面・立面図



第15図 前面テラス状施設下裾石出土状況平面・立面図

3) 貼石（第7～14図）

貼石は、墳丘西側第3段、東側第2段の擾乱された部分を除いて各段の斜面に認められた。墳丘第1段南側では段の肩部を中心に最大40.0×60.0cm、厚さ10.0cmの板石が斜面に貼り付けられ、それらの間に小石が詰められている。同じような貼石は墳丘第1段南東コーナー（南東トレンチ）でも一部確認できた。東側では第1段裾部に長さ50.0～70.0cmの同様の板石が横置きに貼り付けられていた。これらの貼石は墳丘第3段で残りがよく、それは東辺でよく観察される（第7トレンチ東側）。この東辺が北辺と接する部分に設定した北東トレンチでは若干の崩れはみられたが、石積みの隅角の稜線を辿ることができた。北辺では墳丘第3段の立ち上がりは高さ0.2m残り、30.0～40.0cmの板状の厚みのある石を傾斜面に貼り付けている。ここではテラス面にも、大きいもので30.0～40.0cm、小さいものでは10.0cm内外の石を葺いている。貼石というより傾斜面に沿って石を積む状況である。それより北に下って、第2段傾斜面肩部になると、今度は10.0～15.0cmの礫が敷き詰められ、第1段のテラスの石積みを下から支えるような状況である。第1段裾近くでは40.0×50.0cm、厚さ10.0～15.0cmの板状の右が溝底に横倒しになっていて、裾部にかかる断面ではこの石が本来直立していたことを示す抜けの痕跡があり（第6トレンチ北側断面第108層）、それより南側にはほぼ水平な堆積層（第107層）が認められた。したがっておそらく横倒しの板状の石は、盛土の崩れを防ぐため第1段裾に立てられていたのだろう。

墳丘の版築状盛土の傾斜面に施されたこれらの貼石は、直接斜面に貼り付けられるのではなく、暗褐色の粘質土を裏込めのように塗りつけてから貼っている。既に述べた第7トレンチ西側断面第37層の褐色土も墳頂で同じように施された土であったろう。

貼石として使用されている石は板状の川原石が主体であるが、東側墳丘第3段と北側第2段テラス面では擦原石の板石がそれぞれ1枚用いられているのが確認された（写真図版11）。

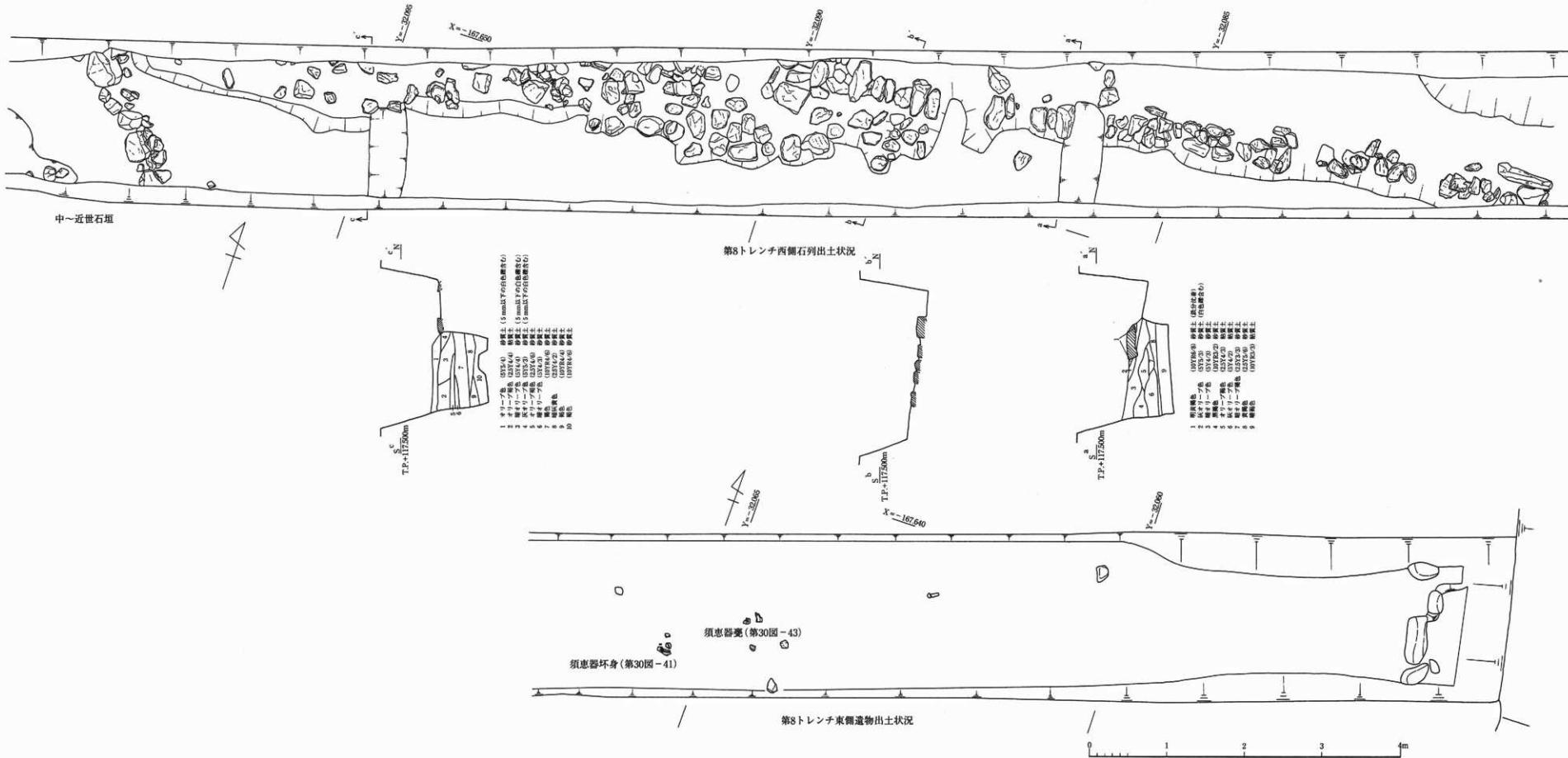
第3節 外部施設（第15～18図）

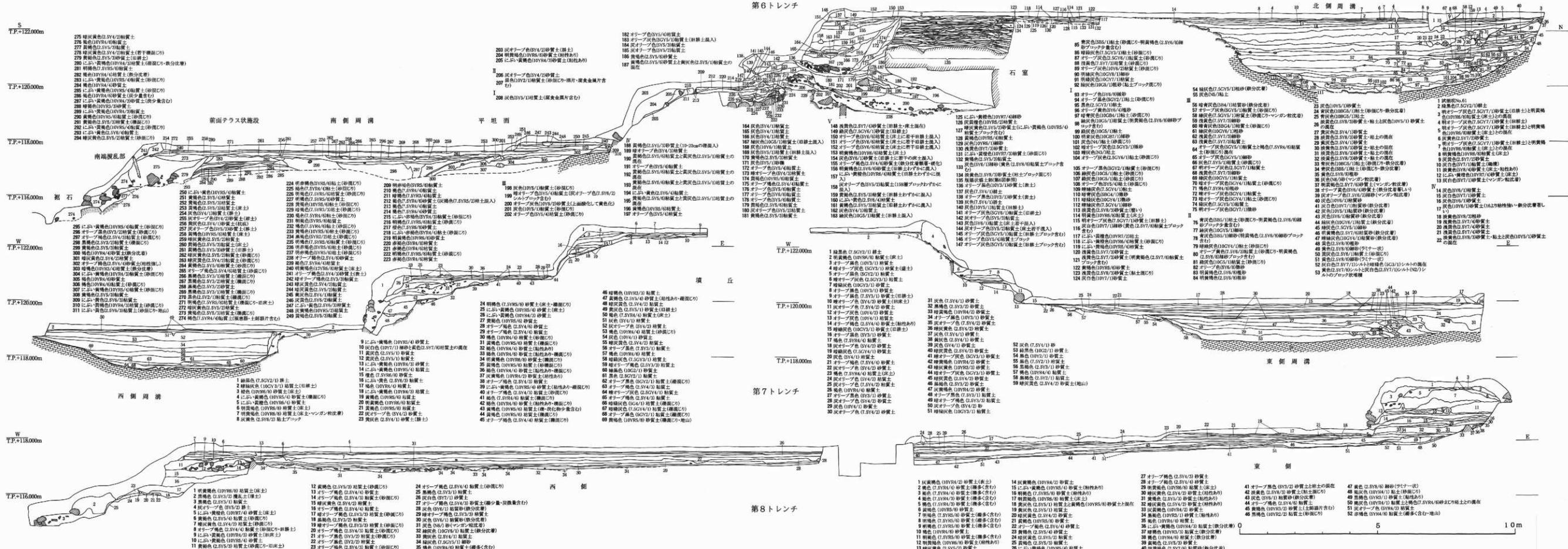
外部施設としては墳丘裾を取り巻く周溝が墳丘の四周を巡る。南側では墳丘裾に取り付く平坦部と前面テラス状施設があり、周溝はその間を通る。

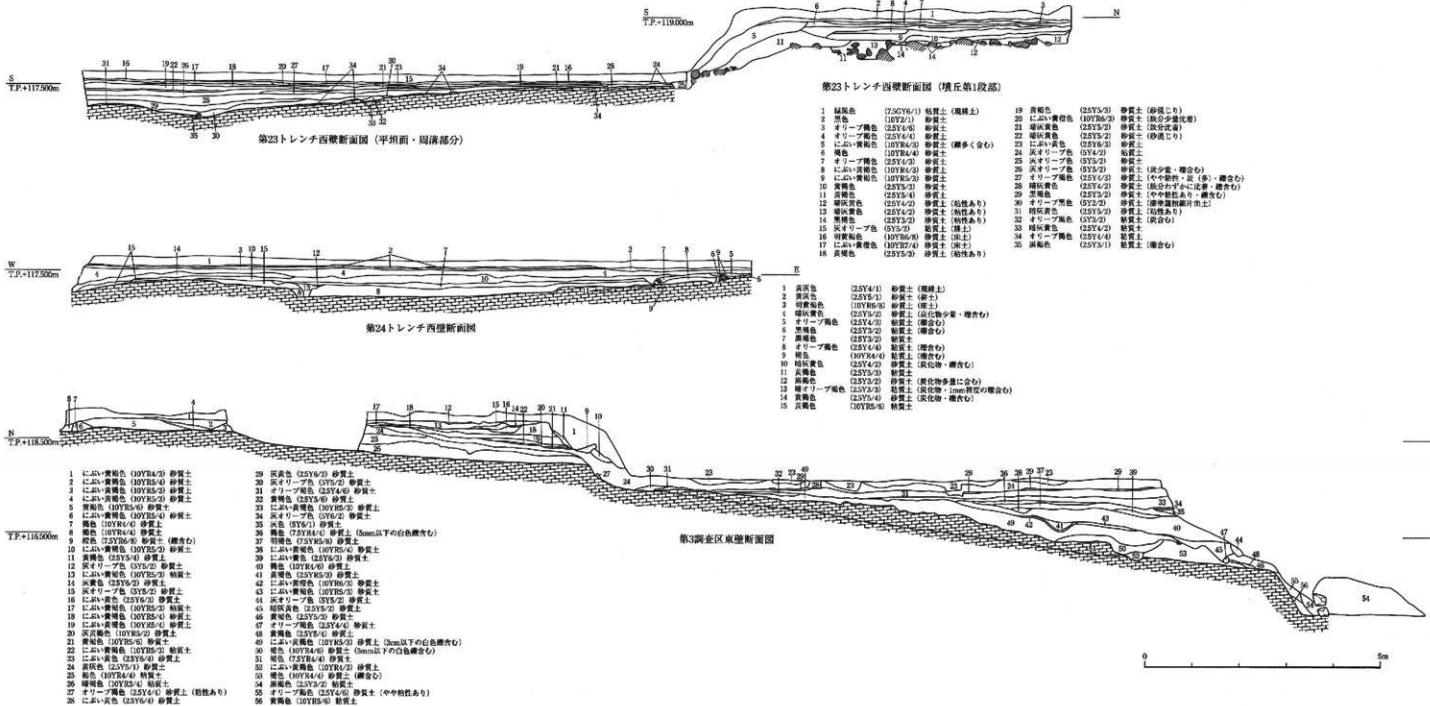
1) 周溝

周溝の幅は北側で8.0m、南側で5.5m、西側で8.5m、東側では後世の出水により損なわれて明確ではないが、ほぼ現里道付近までを考え9.5m程度と見られる。溝底面は北側（第6トレンチ北側）でT.P.119.8mを測り、これは墳丘第1段上面テラスと同一レベルである。東側（第7トレンチ東側）ではT.P.119.0m、西側では第7トレンチ西側でT.P.117.4m、第24トレンチではT.P.117.0m、第23トレンチではT.P.116.9m、南側ではT.P.117.0mで、急峻な背後の尾根から深く断ち切られた北側を除けば、概ねT.P.117.0m前後に揃えられている。

溝底面には暗い色合いの粘質土や粘土また砂質土が堆積している。第7トレンチ東側断面図の







第18図 第23・24トレンチ、第3調査区東壁断面図

第58層、同トレンチ西側断面図の第64・65層、第6トレンチ北側断面図の第103層、同トレンチ南側の第296層、第23トレンチ断面図第30・32層、第24トレンチの断面図第6・8層、南側の第6トレンチ第296層である。

以上の堆積土からわずかながら遺物が出土した。西側の周溝にあたる第24トレンチの第8層で須恵器壺身・蓋・壺（第30図57～62）、南側の周溝にあたる第23トレンチの第30層では漆塗籠棺の細片2点が出土している。同じく南側周溝東半部にあたる第8トレンチ東側の第43層では須恵器の破片（第30図39・41・43）がまとまって出土した（第16図）。

これらの上層より上位の堆積土は中世耕作土とみられ、どの周溝からも土師器・須恵器に加えて瓦器・土師器皿などの破片が出土する。特に墳丘北側にあたる第6トレンチ北側では現地表面より深さ3.0mにおよぶ周溝を埋めて耕作土として利用していった状況が明かである。堆積土は土質から見て大きく砂質土・微砂・細砂・粗砂と粘質土・粘土に分けられる。周溝底面の古墳築造に伴う敷石上に堆積した砂質土（第103層）以後、砂層が覆い、その後また粘質土・粘土が堆積する。これを粘土質と砂質の組み合わせで見ると、T.P.119.8mからT.P.122.3mまで大きく4回程度の似たような堆積土の組み合わせ（I～IV）が観察される。そしてIとIIの間に北側（山手）から小規模な流土があり、同じことはIIIとIVの間にも認められる。IVより上位には現代の耕作土の基盤となる粘質土とそれが床土化した土が堆積する。遺物はIVの土層群で、瓦器椀・土師器小皿・土師質釜など中世土器に加えて若干の須恵器片（臺体部）が出土している。これによってIVの土層群はすでに中世の耕作土として利用されていたようである。また周溝が完全に埋没して、現在見る平坦面となるのは中世以後のことと推定される。

2) 平坦面と前面テラス状施設

墳丘第1段裾部の下T.P.117.6m付近で確認された北から南に傾斜する地山面（第6トレンチ断面図第311層上面）には、一連の斜面堆積層（第300～307層）がある。このような堆積は、次節の第3調査区の棚田造成の断面観察の際に認められた流土の斜面堆積と同様な状況であり、平坦面はこれらの堆積層の上面（第302層上面）を利用したと考えられる。一方、前面テラス状施設は周溝を介して、第6トレンチ南端断面にみられるように、一連の粘質土や砂質土（第282～295層）をほぼ水平に積み上げて、墳丘裾部のレベルまで嵩上げしている。またこの嵩上げの状況は第3調査区東壁南北断面でも観察される。

3) 前面テラス状施設下裾石列

テラス状施設の構築土とその南側裾の大石の列石までの間は、後世の開墾によって削られ（第6トレンチ南端部断面）で、本来のテラス幅の南北3.0mほどの区間が断ち切られた状態となっている。テラス盛土上面と列石の下場レベル（T.P.115.2m）とでは、比高差は2.2mある。そこでは地山面に0.70～1.0mの大石が据えられていたが、これはテラス法面を擁護し、また古墳の外域を画する南辺の石列とも考えられる。この石列の位置や比高、それから想定される法面を考慮すると、テラスの南北幅は5.0m程度であったとみられる。石室中軸線と裾部が交わる個所に設

定した南西トレーニングでも、やはり同様の裾石の存在が確かめられている。これら検出された裾石の東西ラインを東に辿ると、現在の石垣の基礎石がコンクリートで固めて据えられている同じような規模の石に行き当たる。これらの石も本来はこの古墳築造に伴って施工された石の名残ではないかと思われる。

第4節 石室の構造（第19～22図）

1) 石室

切石積横穴式石室で、横口式石槻と呼ばれる形状である。石室は奥壁が墳丘の中心に置かれ、全体としては南に張り出す。T.P.119.0mあたりに側壁・奥壁に使用されている石の下面がくるので、段築第1段の上面から1.0m下がった位置に石室が据えられ、墳丘第2段から3段によってこの石室が覆われる。埋葬施設は奥室、前室、羨道からなり、全長は約11.6mである。石室の中軸線と南北との振れはN-2° 50' -Wであり、ほぼ真南に開口する。計測値は細部で異なるが、奥室は右側壁で長さ2.47m、左側壁で長さ2.46m、幅は天井石では1.09～1.12m、中程の垂直壁面では1.10～1.13m、検出最下面では1.20～1.22mである。前室は右側壁で長さ4.00m、左側壁で3.85～3.86m、幅は天井石で1.36m、中程垂直壁面では1.41m、検出最下面では1.46mである。奥室・前室ともに攪乱が激しいため実際の床面は損なわれて、明確なレベルは押さえがたい。この前室の南に凝灰岩仕切石によって前室内に画される南北長0.74～0.94mの疊敷部分がある。疊敷部分の幅は前室幅のそれとほぼ同じく1.46～1.50mを測る。

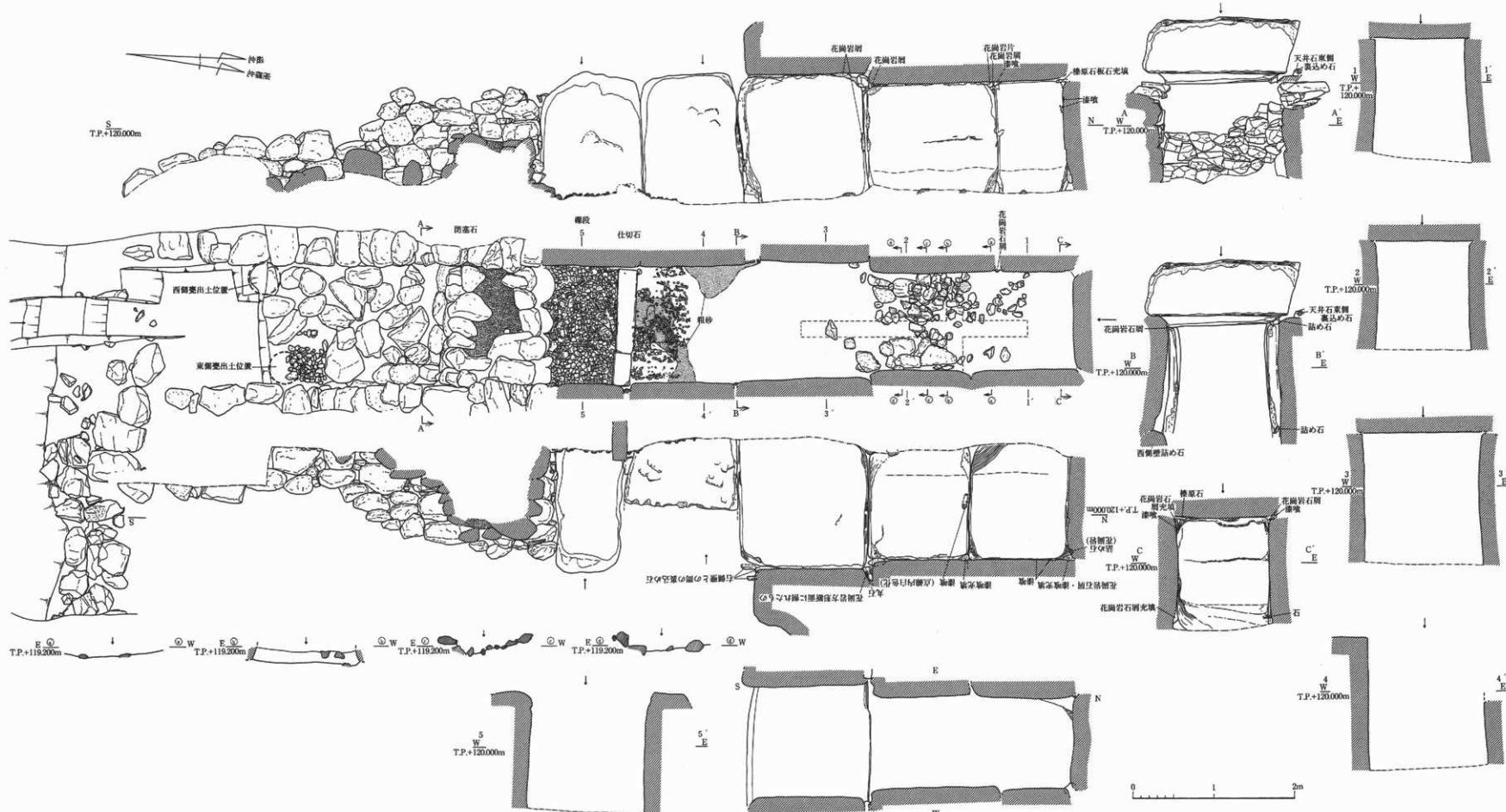
仕切石を前室と羨道の区切りとみるか、仕切石を前室の中のなんらかの区切りとして、側壁の切石第1石とそれより南の川原石積み側壁との境を前室と羨道との境とみるか、であるが、便宜的にここでは後者の捉え方で記述していきたい。

2) 壁面

奥室、前室すべて花崗岩切石を使用している。奥壁は1枚で高さ1.32～1.40m、幅1.08～1.14m。奥室右側壁は第1石が高さ1.32～1.36m、幅1.62～1.64mと第2石が高さ1.39～1.40m、幅0.82～0.88mで縦長のものと横長のものを使用し、寸法の違う2枚を組み合わせ、左側壁は第1石が高さ1.30～1.38m、幅1.24～1.26mと第2石が高さ1.44m、幅1.23mで、ほぼ垂直に立てて構築している。奥室の左右第1石目の小口上部には扉受けの抉りがある。下部は石材の幅が狭く下窄まりになり、扉受けの抉り込みが認められるのは、天井石から下0.9mのところまでである。

石室入り口の右側壁第1石は高さ1.55m、幅1.20～1.27m、第2石は高さ1.62m、幅1.20～1.23m、第3石は高さ1.55m、幅1.43～1.54mである。前室左側壁第1石は高さ1.52m、幅0.78～0.85m、第2石は上半部が欠失し、残存高は0.85m、幅1.41m、左側壁第3石は高さ1.62m、幅1.58mである。

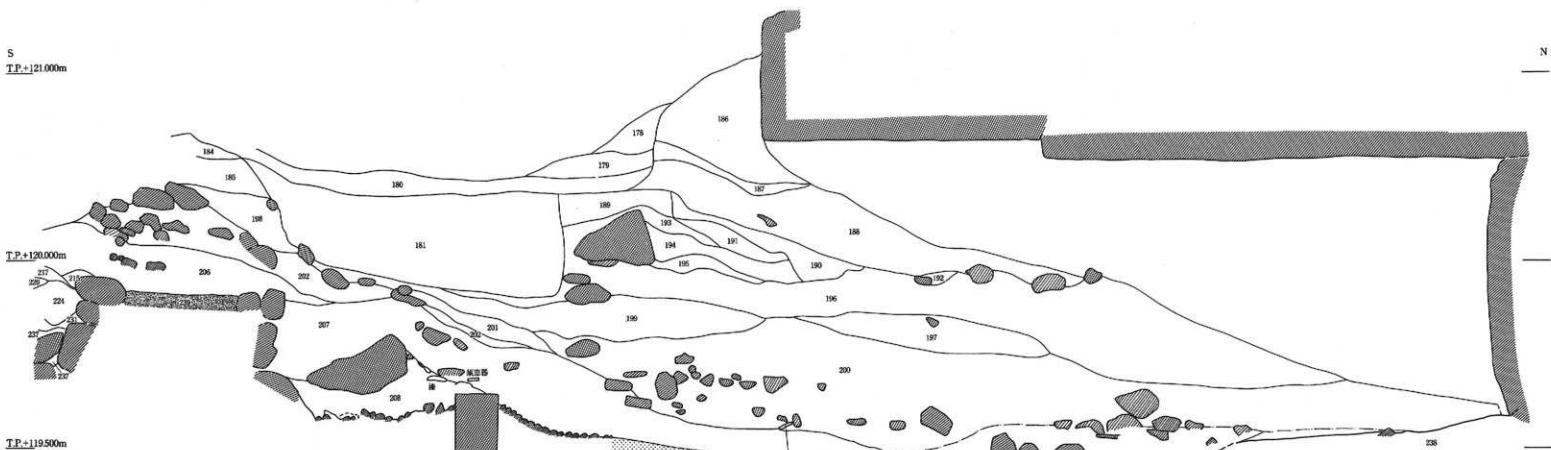
上半部欠失の第2石の切断面には浅い半円形の鑿痕が9カ所に残る。径は5.0～10.0cm、長さが5.0～6.0cmで、鑿で石材を取るために水平に割り取っている。矢跡の大きさからみて江戸～明治



第19図 石室～羨道部平面・立面図

S
TP.+21.000m

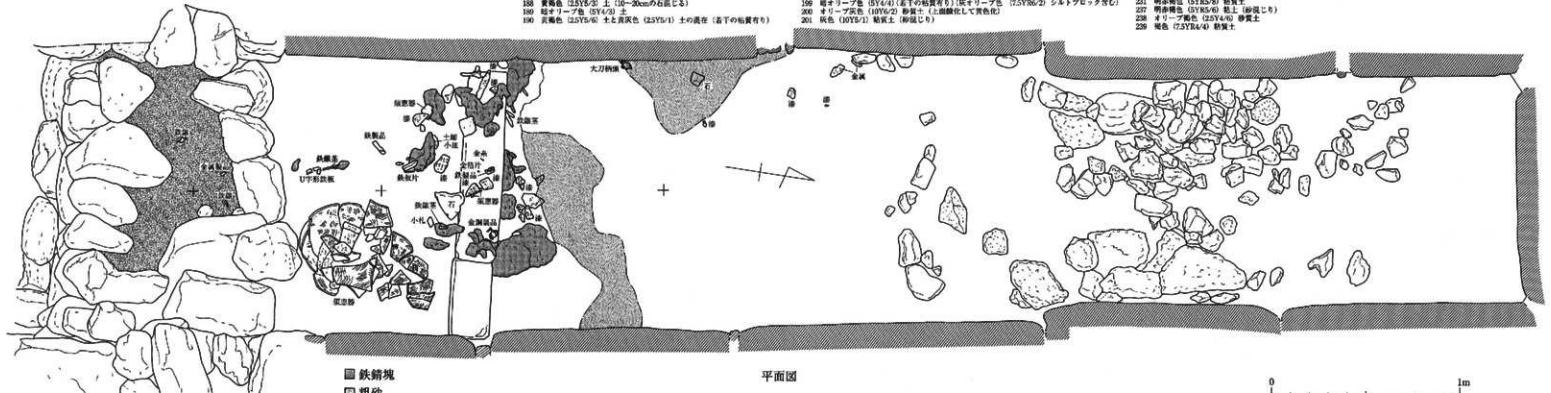
N



断面図

178 オリーブ色 (SY5/6) 粘土上
179 青緑色 (2SY5/6) 粘土上
180 黄褐色 (2SY5/3) 粘土
181 黄褐色 (2SY5/3) 粘土
182 黄褐色 (2SY5/3) 粘土
183 黄緑色 (5SY5/6) 粘土
184 黄緑色 (5SY5/6) 粘土
185 黄緑色 (5SY5/6) 粘土
186 黄緑色 (5SY5/6) 粘土
187 黄緑色 (5SY5/6) 粘土
188 黄緑色 (5SY5/6) 土 (下に20cmの粘土)
189 黄緑色 (5SY5/6) 土
190 黄緑色 (5SY5/6) 土の混在 (基下の粘土有り)
191 オリーブ色 (SY5/6) 土
192 青緑色 (2SY5/6) 土と粘土 (SY5/1) 上の粘土 (若干の粘土有り)
193 黄緑色 (5SY5/6) 土
194 黄緑色 (5SY5/6) 土の混在 (若干の粘土有り)
195 黄緑色 (5SY5/6) 土の混在 (若干の粘土有り)
196 黄緑色 (5SY5/6) 土の混在 (若干の粘土有り)
197 黄緑色 (5SY5/6) 土の混在
198 黄緑色 (5SY5/6) 土の混在
199 黄緑色 (5SY5/6) 土の混在 (若干の粘土有り)
200 黄緑色 (5SY5/6) 土の混在 (若干の粘土有り)
201 黄緑色 (5SY5/6) 土の混在 (若干の粘土有り)

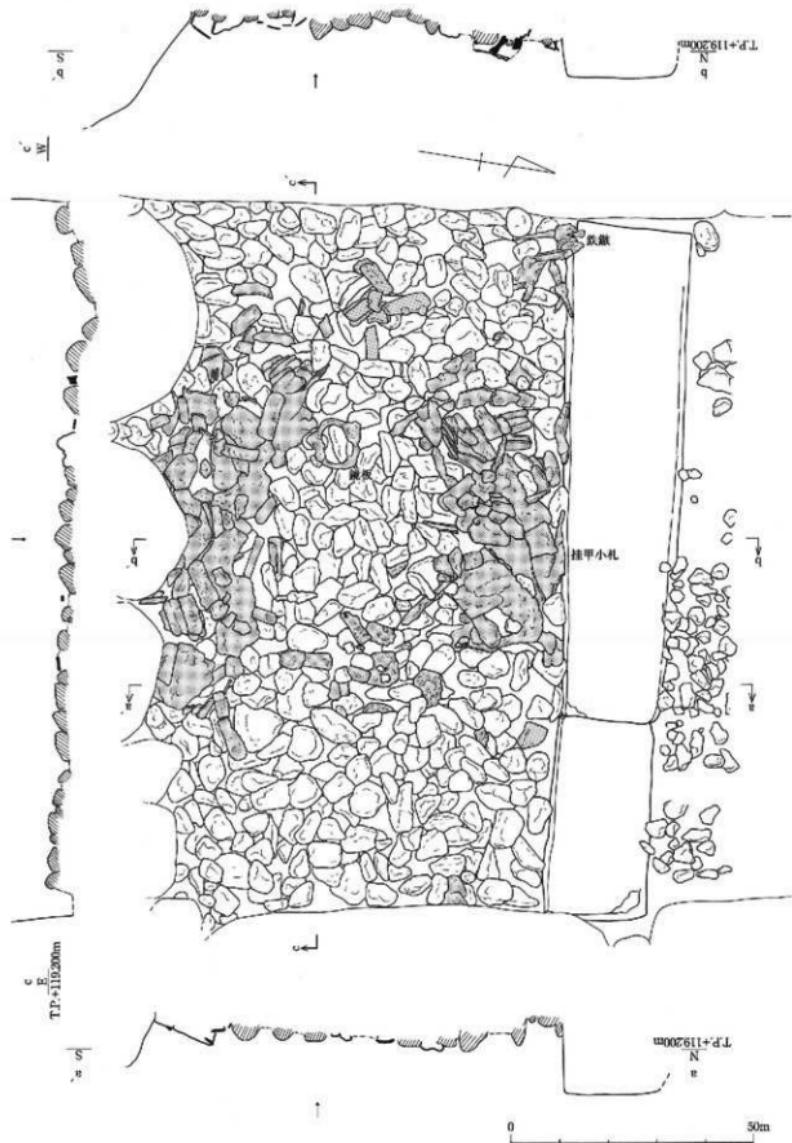
202 オリーブ色 (SY5/6) 粘土 (砂混じり)
203 黄緑色 (5SY5/6) 粘土 (砂混じり)
204 黄緑色 (5SY5/6) 粘土 (砂混じり) (塊片・金属製品の塊片含む)
205 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり) (塊片・金属製品の塊片含む)
206 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
207 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
208 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
209 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
210 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
211 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
212 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
213 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
214 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
215 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
216 黄色 (SY5/4) 粘土 (砂混じり)
217 黄色 (SY5/4) 粘土上
218 黄色 (SY5/4) 粘土上
219 黄色 (SY5/4) 粘土上
220 黄色 (SY5/4) 粘土上
221 黄色 (SY5/4) 粘土上
222 黄色 (SY5/4) 粘土上
223 黄色 (SY5/4) 粘土上
224 黄色 (SY5/4) 粘土上
225 黄色 (SY5/4) 粘土上
226 黄色 (SY5/4) 粘土上
227 黄色 (SY5/4) 粘土上
228 黄色 (SY5/4) 粘土上
229 黄色 (SY5/4) 粘土上



第20図 石室内堆積土207・208層遺物出土状況平面・断面図



第21図 碓敷上須恵器壺出土状況平面・立面図



第22図 碓敷上挂甲小札・鐵鎌・銅板出土状況平面・断面図

くらいの仕業と考えられる。この側壁はその他の側壁に比べて表面の風化も少なく硬質であること、天井石を外し閉塞石の一部を外して持ち出しやすいこと、下半部が残ったのは既にその高さまで石室内に流入土が溜まって埋没していたこと、などから再利用のためこのように割取られたと考えられる。左右両側壁の第1石はとともに縦長の石材で、ほかの2石に比べてやや丈高である。

側壁・奥壁・天井石の三者が組み合う部分にも特徴がみられる。天井石を載せる際、側壁上面の凹凸を整えるために鋭利な刃物によって削った調整痕が、ほとんどどの側壁上面にも認められ、削り屑の細粒が側壁と天井石の間に詰まっていた。それが隙間を塞ぎ、結果として天井石の安定が保たれている。側石はどれも側辺が丸みをもって窄まる座布団状であるので、側辺と側辺に隙間が生じている。奥壁と側壁と天井石の合う隅角は特に空隙が大きい。そのような隙間には石が充填されている。前室右側壁の第2石と第3石の下部空隙には1辺20.0cmの方形の凝灰岩片、第3石と奥室第1石の上部の、前室と奥室の天井石の境の空隙には15.0cmの花崗岩片、奥室第1石と第2石の上部の空隙には厚さ5.0cmの花崗岩片、第2石と奥壁の上部空隙には厚さ2.5cmの板石(榛原石)片が詰められている。また前室左側壁では第1石と第2石の下部空隙に長さ25.0cm、幅10.0cm以上の川原砾が詰められていた。第3石上部では割り取られた第2石との空隙に詰め、しかも裏込めとした長さ20.0cmほどの川原石が数点認められた。第3石と奥室第1石の上部の、前室と奥室の天井石の境の空隙には1辺10.0cmの断面方形の花崗岩割石、長さ10.0~20.0cmの川原砾数点、第2石と奥壁との上部空隙には10.0cm大の花崗岩片の充填が認められた。これらの石とともに多くの場合やはり花崗岩の石屑が多量に詰められている。

3) 漆喰

詰め石とともに見られたのは漆喰である。右側壁では奥室の第1石と第2石と天井石の間に漆喰の充填、第2石と奥壁の接合部上方で20.0cmの範囲にわたって斑状の漆喰の痕跡が認められた。また奥室左側壁では第1石と第2石と天井石との空隙に20.0cmにわたって漆喰の詰め込みが、またその下の第2石中程の側片付近にも30.0cm範囲にわたって斑状の漆喰の痕跡が認められた。同様に第3石の奥壁寄りで天井石との空隙には2.0~5.0cmの漆喰の塊が残り、また奥壁との上部空隙は花崗岩屑と漆喰を詰め込んで塞いでいた。詰め石は前室と奥室の壁面の隙間のあるところには上部下部を問わず行われているが、漆喰が使用されるのは奥室に限られ、天井石との空隙に塗りつけて塊となっているばかりでなく、下方では天井より0.8~0.9m下がった側壁と側壁の接合部を中心に塗布され、それより下には認められない。このことは側壁が天井より1.1~1.2mでやや下空みになり、平坦な内法面ではなくなっていることと合致する。これは搅乱以前の本来の床面レベルを捉える根拠のひとつでもあろう。

4) 側壁・奥壁の石

石室の側壁・奥壁に用いられた石は表面が風化のため剥落する部分が目立つ。特に端部、隅角の剥落は激しい。また土に埋まった側壁下部の表面は土を取り除くだけでも石の表面が土に付着して剥がれる状態であった。したがって顕著な加工痕を認めがたいが、図中に示した奥室の側

壁・奥壁の下方の稜線以下は粗い叩きではないかと思われる。前室左側壁第2石の上半部の割取られた石には幅10.0cm単位の縦位の削り痕がある。この石の場合、既に述べたようにほかに比べて硬質であり、その分加工痕もよく留められているのであろうか。それほどではないが、前室右側壁第2石にも同様の加工の痕跡が上半部にかすかに認められる。右側壁第1石では中央に抉られたような陥没があり、これも加工の際の強い叩きの痕かも知れない。奥壁表面には横位の筋目を挟んで中央は腹を張るように軽く盛り上がり、下方は天井より1.07mのところで極端に厚みを減じる。この石の場合はほとんど自然石をそのまま利用している。

以上、前後両石室を構成する石は、天井石が1石抜き取られて2石、側壁各5石、奥壁1石であった。扉石は扉受けがあるので、仮に石であれば、盜掘の際破壊されたと思われる。石室内に溜まった盜掘搅乱土に紛れて面をなす凝灰岩の破片や石粒が出土しているので、あるいはそれが扉石の材であった可能性も否定できない。

5) 床石

奥室床面に石が敷き詰められていたかどうか、これも敷かれた原位置を保つ石は全く認められなかったから事実としては指摘できない。天井より1.4m下った面で平面の検出を終えることとしたが、前室から奥室にかけて最終的に幅0.2m、長さ2.8mの小トレンチを掘り下げ、搅乱の及んでいる深さを確かめた。しかし奥室で最終確認面より深さ0.15~0.2mに達してもまだ瓦器片を含む混礫土であり、床石があったにしても、少なくとも中世に相当掘り返されて取り去られらしい。最終的に掘り下げた面ではもはや奥室側壁の石の下縁が一部露呈したことからすると、仮に床石があるとしても、床石の上に側壁が載るのではなく、両側壁で挟む形であったろう。

奥室から前室にかけて散乱した5.0~45.0cmの石は中世の搅乱で当初の位置が乱されているといえ、本来は床下の施設に用いられたと考えることもできよう。また石室内に堆積したⅡ層や、既に試掘時点で確認した盜掘坑の埋め戻し土から流紋岩の板石片が出土している。その中には端面や平面を加工した形跡のある破片もあり、隅角をついている破片もあるので、奥室の敷石や、側壁と床石、あるいは段差部分の詰め石などに用いられた可能性は高い。

6) 天井石

天井石は2石を残すのみであるが、奥室1石、前室は2石の計3石（前室第1石が左右両側壁ともやや高いので、この部分だけ庇のような天井石を考えると4石）であったと思われる。残った2枚の天井石の内法面はきわめて平滑である。前室の天井石は長さ1.62m、幅1.36m以上、検出した最大の厚さは0.8m。前面は垂直に立ち上がり、非常に平坦に仕上げられ、内法面との角度は直角で、稜角は丸みをついている。端面の高さは0.45~0.53mである。正面から見た場合、内法面はやや西に傾斜する。奥室の天井石は長さ2.47m以上で、小口は、前室天井石より0.1m低くしつらえ、その分だけ垂直で平坦な端面をなす。両天井石の中央の間隙から見た限りでは、奥室天井石は内端部より北上がりの傾斜面となり、そこに前室天井石の逆傾斜面が載るが、左側壁上では両者の間に、試掘調査の段階で確認していた幅3.0cmほどの隙間が認められた。

7) 仕切石

前室の南側に設置された凝灰岩板石2石の側辺を上にして、前室を東西に横断する形で立て並べた石である。東側のものは幅0.20m、長さ0.40m、西側のものは幅0.20～0.22m、長さ1.02mである。高さは遺構損壊のおそれがあったため、0.42mまでしか確認できなかった。したがって少なくとも0.42m以上の立ち上がりがあると思われる。つまり、この仕切石は厚さ0.20m、幅0.42m以上、長さ0.40mと1.00mの直方体の石材を長側辺を上にして立て並べているのである。後章の石材鑑定から使用された凝灰岩は二上山牡丹洞産（東側石材）と鹿谷寺産（西側石材）とされている。

8) 砂とバラス

仕切石の北側は砂とその表面を覆うバラス（径5.0cm以内の小礫）が敷かれ、バラスは仕切石より奥室側0.6mに及び、特に東半部に残っていた。その下の砂は仕切石より奥室側1.1m、つまり前室のほぼ中央付近まで認められ、ここから南の仕切石に向かって下方に傾斜する形で堆積し、それより北側には及んでいない。この砂とバラスの上面は奥室側に向かって緩やかな傾斜面をなしていた。しかし閉塞石上部から北側石室内に流れ込む盗掘の搅乱土（II層）を除去して現れたことからみて、これは搅乱によるものと思われ、本来は平坦な面であったろう。したがって仕切石は北側に盛られた砂の崩れを防ぐための役目も果たしていたのではないかと考えられる。砂の使用については排水の便が考えられるが、地下を掘り下げて明確な施設を検出するに至らなかった。

9) 碟敷

仕切石の南側、閉塞石北面までの間約0.8mの空間は長さ10.0cm以上の白っぽい川原碟をびっしりと敷き詰めた碟敷となっている。碟敷上面レベルは仕切石上面から5.0cmほど低い。この面の東壁際で須恵器四耳壺（第27図）が出土したが、底部以外は盗掘時の落石と思われる閉塞石の一部（長さ0.54m、厚さ0.2m）により圧し潰されていた。またその西側では挂甲小札、素環鏡板、鉄鎌などが出土し、一部は仕切石上面にも及んでいた。これらの鉄製品は碟敷や仕切石に銹着しているものが多く、碟とともに取り上げざるを得ない場合もあった。このような出土状態からみて須恵器壺・鉄製品類は葬送の時点での上に置かれたものと考えられる。

10) 石室内堆積土

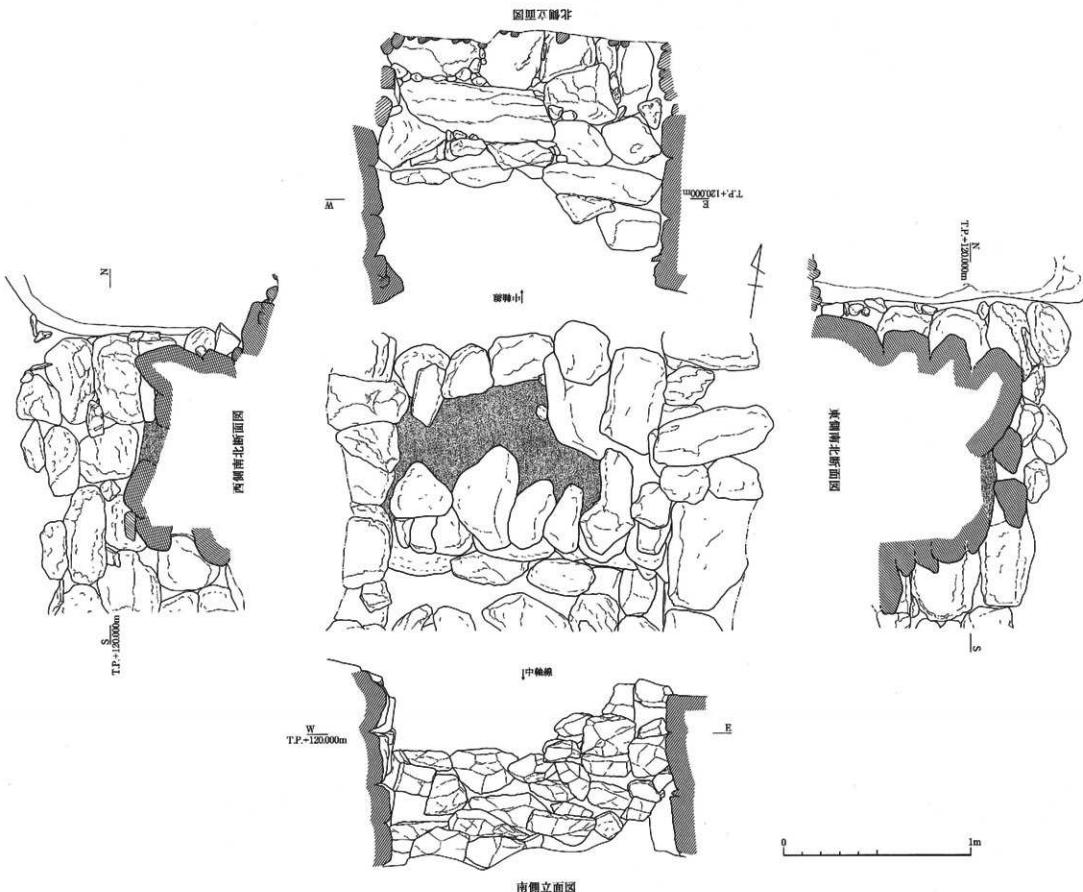
石室内には盗掘による搅乱土や流土が閉塞石上方から石室奥に流れ込むように堆積している。最終的な石室内堆積土の上面は天井石内法前端（T.P.120.6m）から奥壁下部（T.P.119.2m）にかけて傾斜面をなしている。最終的な検出面を掘り下げたT.P.119.0mの面より下にはまだ搅乱層が存在したが、それはもはや側壁の下端部に達して危険なため一部中央に南北の小トレンチを設けて確認したものである。石室内の堆積土は大きくみてI～IVの4層に分けられ、その上に近世～近代の搅乱や埋め戻しと思われるV層が堆積している。I層は石室に最初に溜まった、碟敷上面にのみみられる土である。この土に覆われる形で須恵器壺や挂甲小札、鉄鎌など土器・鉄製品が

出土し、しかもそれらの遺物はすべて礫敷に密着し、これより上位の堆積層にみられるような中世遺物は含まない。また閉塞石の一部が盗掘の際に須恵器大形壺の上に落としたままになったことも幸いして、当初の副葬品の配置状況の一端がこのように比較的良好に留められることになったと考えられる。Ⅱ層は閉塞石を跨いで前室後方に流れ込む形で堆積する黒色を呈する比較的粘性のある土であり、仕切石を越えて北側では砂・パラス上面を覆う。この上からは漆塗籠棺、亀甲繋文銀嵌大刀柄頭、金銅装馬具や飾金具、銀製帶金具、金糸、ガラス玉、須恵器、流紋岩質溶結凝灰岩（株原石）板石などの破片が、中世瓦器碗や土師器小皿とともに出土した。本墳の出土品の大半が出土した土層である。第Ⅲ層は5層に細分される。Ⅱ層の上に堆積する土層（第198～200層）では、南のT.P.120.4m付近より前室を経て奥室前半に流れ込む形で大小の礫が多量に出土した。前室と奥室の境付近では、この礫の混在する搅乱土が検出面より下にまだ深く及んでいる。奥室と前室の検出面の下に設けた下層確認のための小トレンチ（T.P.119.0～119.1m）で、その構成土のひとつである第200層から礫に混じって瓦器片が出土している。Ⅳ層は最終的に石室を塞いでしまう土で、12層程度に分層される。黄色系の色調で混入する礫はⅢ層に比べて少なく、またⅢ層では礫が南から北に傾斜するように流れ込む形をとっていたのに対して、この土層ではほぼ水平に近い状態で出土する。Ⅲ・Ⅳ層では古墳に伴った遺物の出土はみられなかった。調査後、石室内の土（Ⅰ～Ⅳ層）はすべて水洗作業を継続している。これまでの洗浄結果からすると、漆塗籠棺、凝灰岩、花崗岩などの細片や屑が採取されている。しかしその大半はⅡ層を中心とするもので、この点では現地での作業結果と矛盾しない。なお、洗浄作業はまだ完了するに至っていない。以上の石室内堆積土を最終的に覆うのがⅤ層である。35層ほどに細分されるこの一連の堆積土は、T.P.122.4mで耕土の下に数層を挟んで、版築状盛土を北から南へ削った斜面に盛り上げられた堆積状況を示している。T.P.120.5mから120.8mにかけては5.0～30.0cmの礫を多量に含む土（第171層）がみられ、それらの礫と混在して近世の磁器碗（第26図1）が出土している。また試掘調査ではこの搅乱盛土中から板石（株原石）片が出土している。

以上のようにⅠ層は最初の盗掘の影響を受けてはいるが、葬送時の副葬品配置の位置関係の一面を比較的よくとどめた土層といえよう。それより上位に堆積する各層には、中世土器の細片に加えて、近世の磁器碗や近代のガラス片、アルミ製リベットなどが混入する。したがって中世の盗掘で荒らされて以降近代に至るまで、完全に埋まりきることなく開口状態が続き、それに伴う盗掘のみならず農作業や開墾に伴う人の出入りがあった可能性がある。

第5節 閉塞施設（第23図）

仕切石南辺より南へ0.76mに築かれている。石室側壁第1石の南に、南北の下場幅1.4～1.5m、上場幅1.1～1.2mにわたって積み上げられている。残存高は0.8mである。これは外された天井石の高さを考えると、その半分弱の高さにすぎない4～5段が残った状態である。おそらくは6段



第23図 閉塞施設平面・立面図

程度はあったと思われる。そのうち盗掘の際に6段目は完全に取り外され、さらに西側では4段目まで取り外されたようである。閉塞石北面は側壁第1石と羨道との境に合わせている。積み上げた石の大きさは一定しているわけではないが、長さ0.35～0.55m、幅0.25～0.40mの長手の自然石を中心にして石室側と羨道入り口側の両側から積み上げている。

最下段の基礎となる東西の列石は、北面の石室側についてみると長さ0.3～0.5mの石をほぼ西半に横長に延べ、残った東壁との空間には同じ0.5mの石を今度は縱長に延べ、さらにそれらとの間に残った空間は0.3m程度の石を縦に充填しておさまりを調整している。さらに2段目には西半に長さ0.9m、高さ0.3～0.4mの横長の石を載せている。その結果東側の2段目の石との間に約10cmほどの高低差が生じるが、その差は3段目に至って小振りの石を用いて解消している。それより上位は外されて不明だが、東壁沿いには2段の石積みが残っていて、そのひとつがこれまた長さ0.6m以上の横長の石を用いている。つまり、基礎の石の上第2段以上の石組みはこのように横長の石とそれによって生じる左右の空隙を0.3～0.4mほどの石で詰めて積み上げていく形をとっているようである。

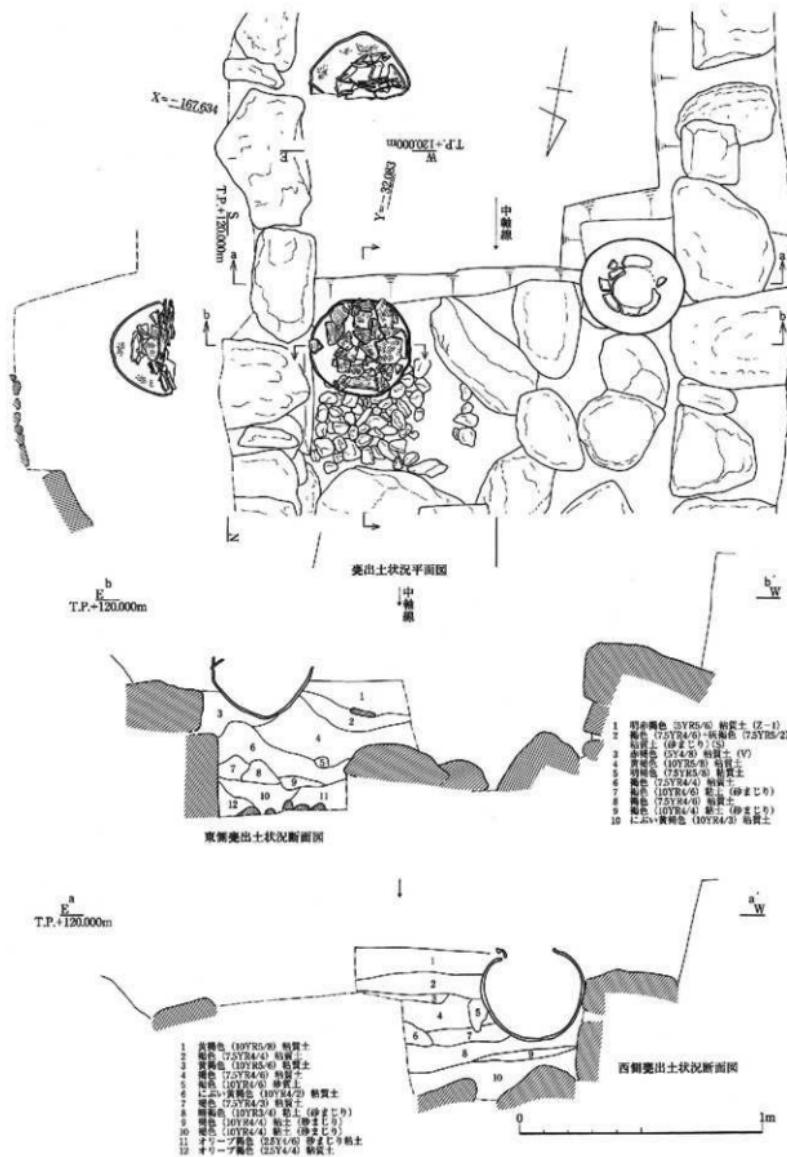
閉塞施設南面は羨道の埋め石を外すことはしなかったので、基底の石まで詳細に観察できなかったが、ほぼ同様の積み上げであった。これを南北方向の断面でみれば、基底は南北幅約1.5m、それより上は幅約0.5～0.6mの立ち上がりとなって、南北に裾括りの安定した形をとっている。

閉塞は石積みだけでなく、以上の北面と南面からの石積みの間に褐色の粘土を段毎に詰め（第239層）、そのうえ石積みの空隙に主に5.0～10.0cmの小蝶を充填し、石室を厳重に密封した状況が窺われる。このように積み上げられた閉塞の一部（長さ0.60mの大石）が、盗掘によって先ほども述べた北側の蝶敷上に置かれた須恵器壺の上に落下したのである。

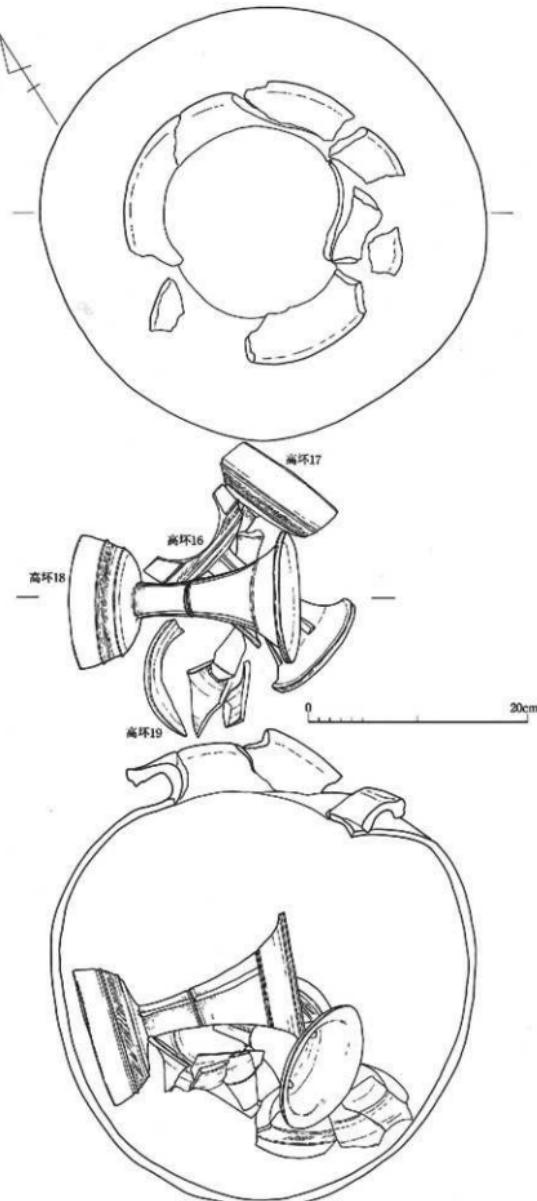
第6節 羨道（第24～25図）

羨道を仕切石からると約6.0m、仕切石南の蝶敷の切れる位置、すなわち側壁第1石南縁から測れば約5.0mとなる。羨道幅は北端で1.5m、入り口付近ではやや拡がり1.6mを測る。羨道部側壁の壁面は石室側壁第1石より南3.5mにかけて小口積みとしている。その幅は0.35～0.55m、長さ0.25～0.35mと0.60m以上の二様の石を長辺を羨道の南北辺に直行する形で用いて積み上げている。入り口付近では石の長辺を羨道の南北辺に平行する形に積んでいるものがある。壁面は垂直に立ち上がるが、第2段テラスに当たる閉塞石部分両側の最も高く積み上げてあるところでは、最上段の石が壁面より5.0～10.0cm内側に迫り出している。

石積みは閉塞石両側の第2段テラスに当たる部分で6～7段、閉塞石南面より1.2m以南の第1テラスに当たる部分では3～4段で、それより南の入り口に向かっては1～2段と考えられる。前室天井内法面のレベルを考慮すると、第2段テラスに当たる部分の羨道壁面の石積み上面は数石外されてしまっているものの、6～7段であったと思われる。



第24図 義道埋蔵出土状況平面・断面図



第25図 羨道西侧埋甕内高环発見状況平面・断面図

羨道側壁は側面では、石室側壁第1石南面から2.3mのところに墳丘第1段テラスから第2段に立ち上がる傾斜変換点がくる。傾斜角は14°程度である。それより南入り口に向かう2.5mが第1段テラスとなるが、変換点から1.0mくらいのところも南に向かって5~6°の傾斜がみられる。

閉塞石より南は羨道入り口にかけて現耕土直下に褐色系の粘質土が全体に堆積していた。閉塞石を覆う盜掘に伴う擾乱土（第206層）を除くと、これらの埋積土が露呈し、南北1.7mにわたって掘り下げた範囲で第209層から第237層を識別した。この埋積土の下では羨道壁面や閉塞石にもみられた長辺0.30~0.50m中心とする礫がほぼ全体にわたって出土した。羨道部をまずこれらの石で埋め、さらにその上から上記の29層におよぶ粘質土を積み、羨道部を入り口まで完全に塞いだようである。しかし第1段テラス部に相当する羨道の東半部には、これらの石がみられない0.5m四方の空間が認められ、代わってここには5.0~15.0cmの礫を敷き詰めていた。この礫敷の上面の高さはT.P.119.1mである。

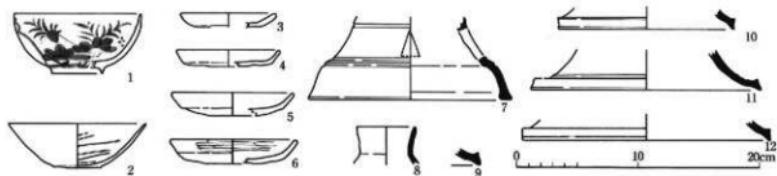
礫面より0.4m上では礫面の空間のやや南寄りの東壁際で須恵器壺体部上半が土圧で圧し潰れた状態で検出された。さらにこの壺の西側の壁際でも同様の壺が完形でやはり埋め置かれた状態で出土した。いずれの壺も穴を掘ってそこに埋めるというものではなく、羨道を埋めていく過程で立て置かれた状態だった。東側の壺の底面レベルはT.P.121.5m、西側のそれはT.P.121.46mである。西側の壺の口縁部上端が後世の耕作土下面にあたっていたが、東側ではそれよりさらに深く耕作土が及んでいた。これらの壺の残存状態とそのレベルからみて、西側壺口縁部上端とこの壺が接する羨道部西側壁上面がレベル的には同一であり、かつその西側壁上面が墳丘第1段のテラス面ともレベル的に等しいから、検出された石積み上面レベルが当初の高さを保ち、同時にテラス面の高さでもあったであろう。

西側の壺には高坏4個体が横重ねで納められていた。壺の底面から上に向かって高坏19→高坏17→高坏16→高坏18（第29図）と、口縁部に打ち欠きある高坏（同図16・17）をそうでない高坏（同図18・19）で上下からはさむ形をとり、脚部でかさなるように積み重ねられている。壺の内部全体に黄色土が充満していた。

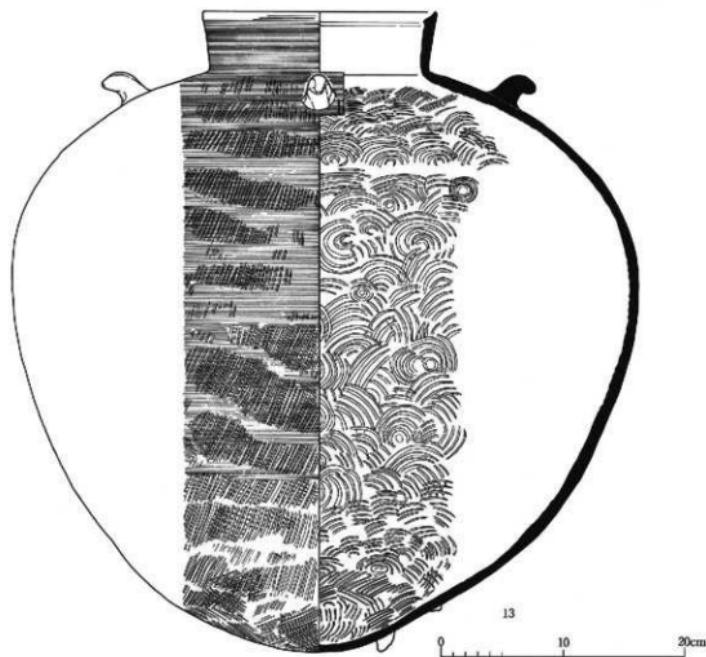
第7節 出土遺物

シショツカ古墳からの出土遺物は、盜掘により搅乱され破碎された断片となっているが、葬送儀礼に伴って配置された状態を比較的乱されることがないまま残ったものも若干あり、それ以外には周溝の埋積土より出土した遺物がわずかにある。

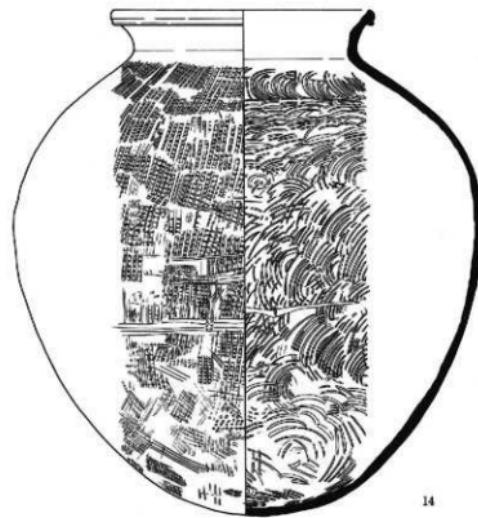
容器では、漆塗籠棺、須恵器四耳壺、羨道部の須恵器壺、須恵器高坏などがあり、装飾品ではガラス玉、金糸、金製・銀製・金銅製飾金具、銀製帶金具、武器では銀象嵌大刀、銀装刀子、鉄鎌、馬具では鞍金具、杏葉、替付属品（鏡板、引手など）、雲珠・辻金具、鉢具、武具では挂甲



第26図 石室および墳丘攢乱土出土土器

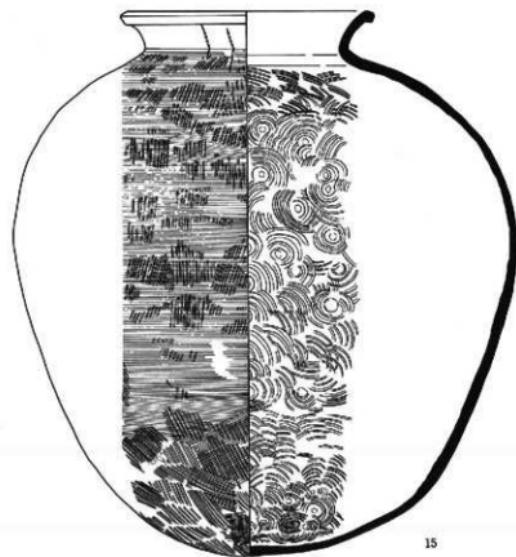


第27図 磺敷上出土須恵器四耳壺



14

西側面

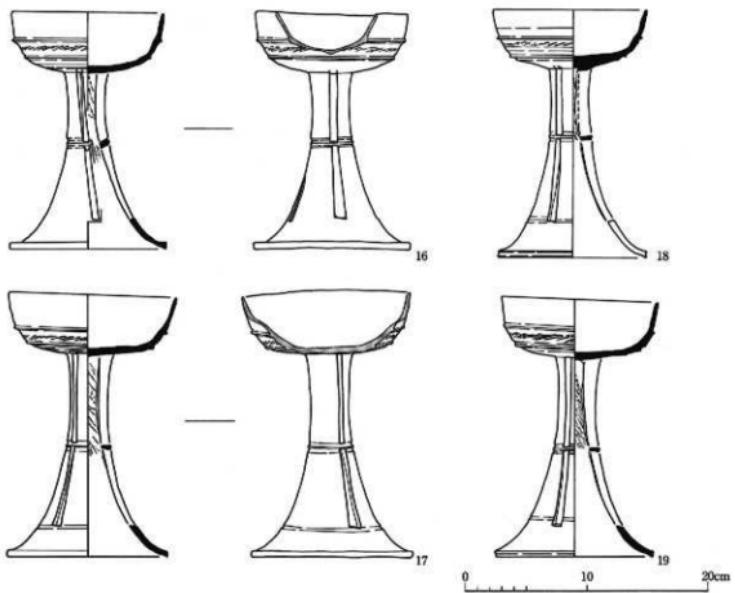


15

東側面

0 10 20cm

第28図 美道出土須恵器甕



第29図 羨道出土西側埋甕内発見須恵器無蓋高坏

小札などがある。

1) 土器（第26～30図・遺物観察表）

土器は、閉塞石から前室にかけて堆積した擾乱土（第198～207層）出土の中世土器、須恵器、前室碟敷上面出土須恵器壺、羨道に埋められた須恵器壺とその1点に納められた高坏がある。その中で碟敷の壺、羨道の壺そして壺の中に納められた高坏などは出土状態から、この古墳の葬送儀礼に伴って用いられた土器である。また、外部では南北トレンチや東西トレンチの周溝堆積土出土土器、石室盜掘坑堆積土出土土器などがある。

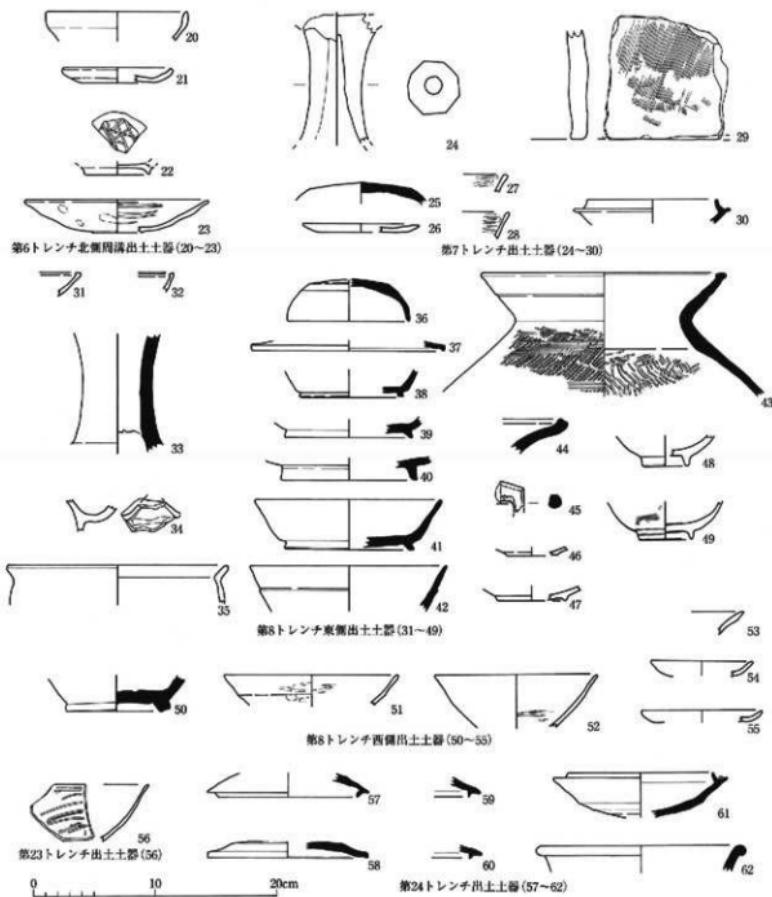
擾乱土出土土器（1～12） 墳丘南斜面の擾乱部分から出土した染付磁器碗（1）以外の土器類は、すべて石室内の擾乱土（第207層）より出土している。この土層では13～14世紀の土器（2～6）が、葬送の儀礼に用いられた須恵器の破片（7～12）とともに出土している。

石室碟敷面出土土器（13） 閉塞石の北側の碟敷に接地し、ほぼ1個体が検出された。腰高の均齊の取れた器で6世紀後半と考えられる。

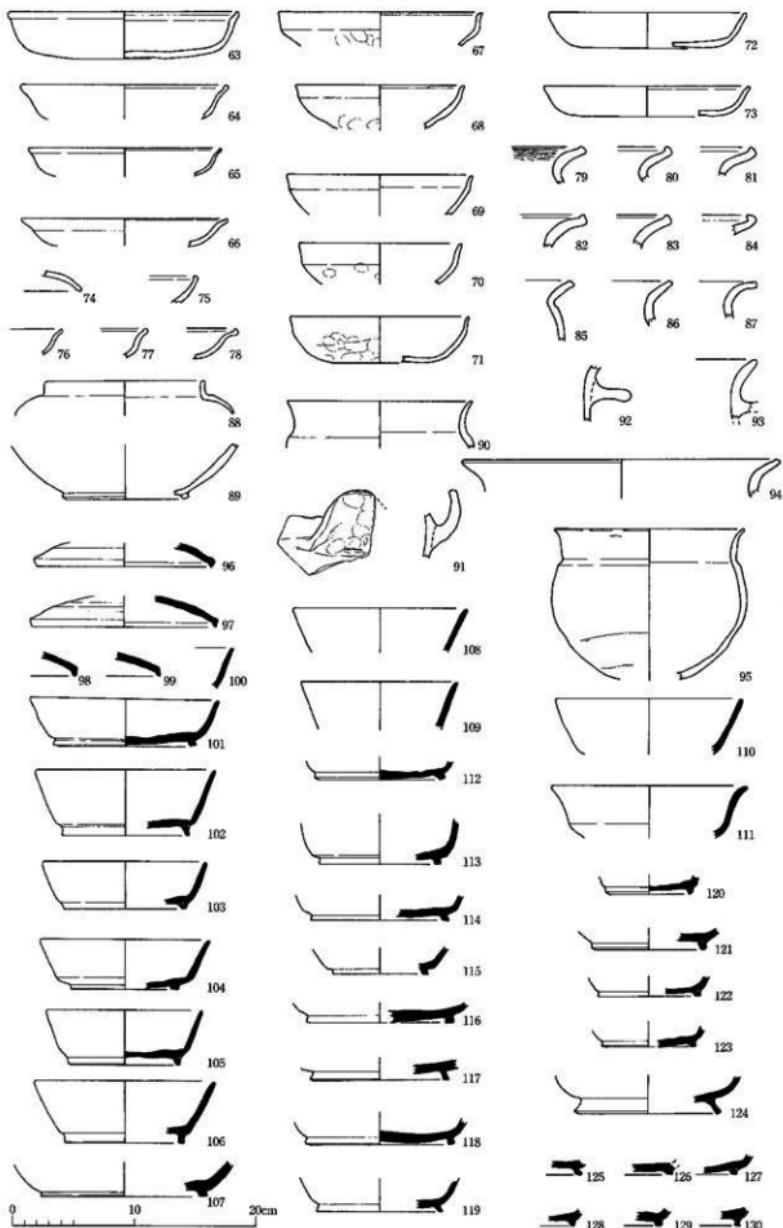
羨道部出土土器（14～19） 羨道入り口から2.0～2.2mで羨道両側壁際に接して正立状態で埋められた壺と、西側の壺に納められていた高坏である。これらの土器は出土状態からみて葬送の最終的な段階で一括して埋置されたものである。高坏は脚部が全高に占める割合が、74.7%（16）、

76.6% (17)、76.3% (18)、80.7% (19) といずれも長脚化のピークを示している。また透かし窓の切り取りの際につけた坏部底面の金属製工具による鋭い刃先の痕跡や砂粒の目立たない精良な胎土、端部や縁のシャープさと均齊のとれた器形は、製作後ほかに用いられることなく古墳に納められたものと思われる。これらの土器を一括して 6 世紀後半とみたい。

周溝出土土器 (20~62) 周溝内出土の土器はほとんどが中世の耕作土の堆積層から出土しているが、周溝の底面で出土した土器もある。搅乱のため残存状態はよくなかったが、墳丘東側第1段テラス面の名残と思われる窪みに堆積した黒褐色砂質土 (第7トレンチ東側断面図第56層)

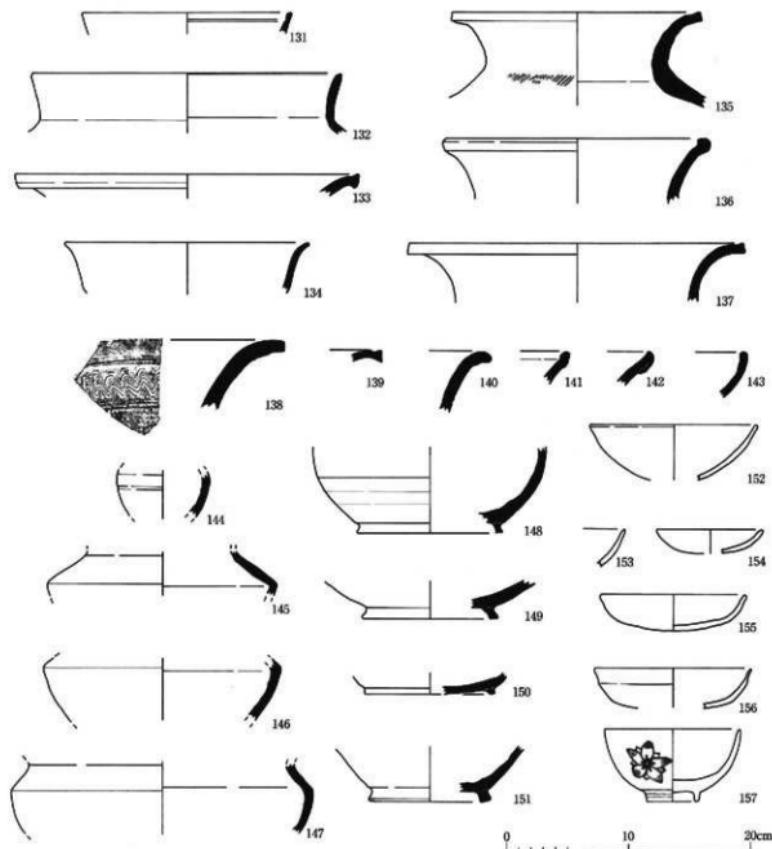


第30図 第6~8・23・24トレンチ出土土器

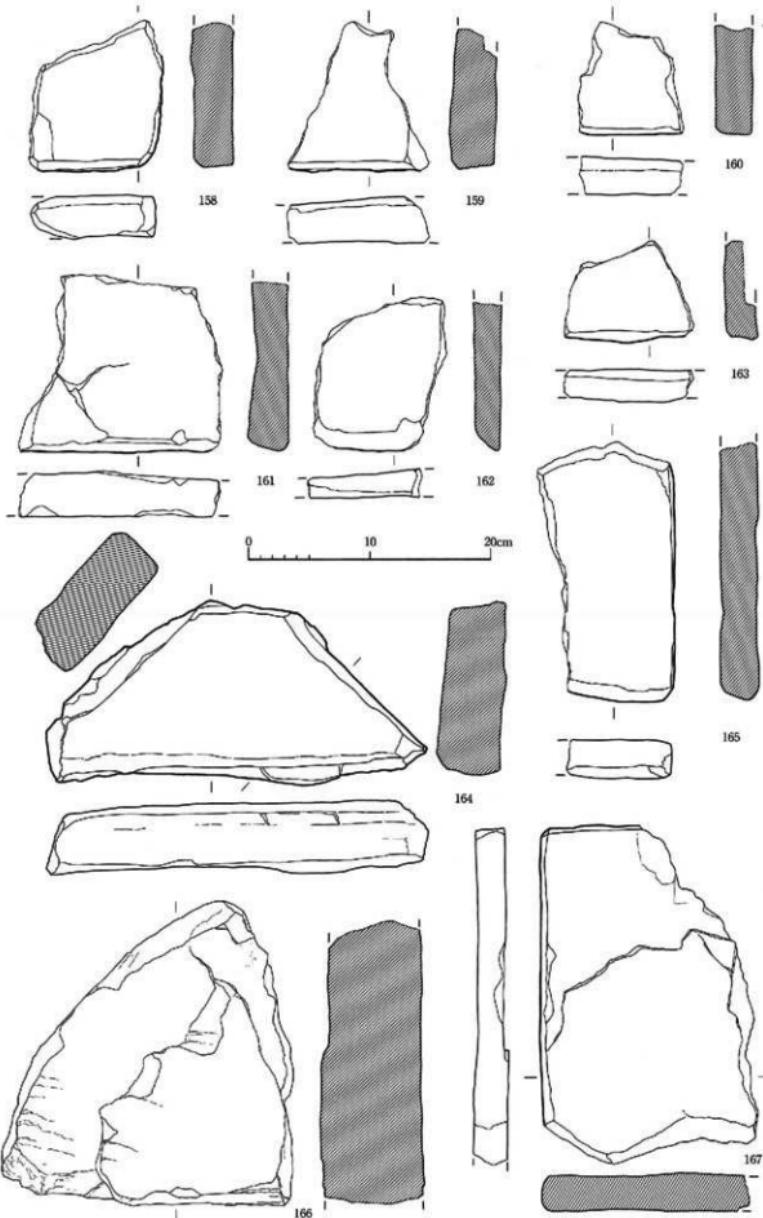


第31図 第6トレンチ南端攢乱部出土土器 (1)

出土の須恵器坏蓋（25）、西側周溝底面の褐色粘質土（第7トレンチ西側断面第64層）出土の須恵器坏身（30）、同24トレンチの褐色粘質土（第8層）出土の須恵器（57～62）、南側周溝の黒色土（第8トレンチ東側第43層）出土の土師器（32・33）、須恵器（36・38～44）がある。これらのうち西側周溝の須恵器坏身（30）は他に混入する遺物ではなく、古墳の時期の一端を示し、6世紀後半と考えられる。一方、第8トレンチの須恵器は第6トレンチの古墳周溝堆積土（第278層）に連続する土質であり、それは周溝の埋没を示すもので、時期的には7世紀末～8世紀と思われる。24トレンチもまた同様の須恵器を含んでいる。その他の土器類は以上の土層より上位の堆積土より出土しており、8世紀以降中世～近世に至る耕作土に混入したものである。



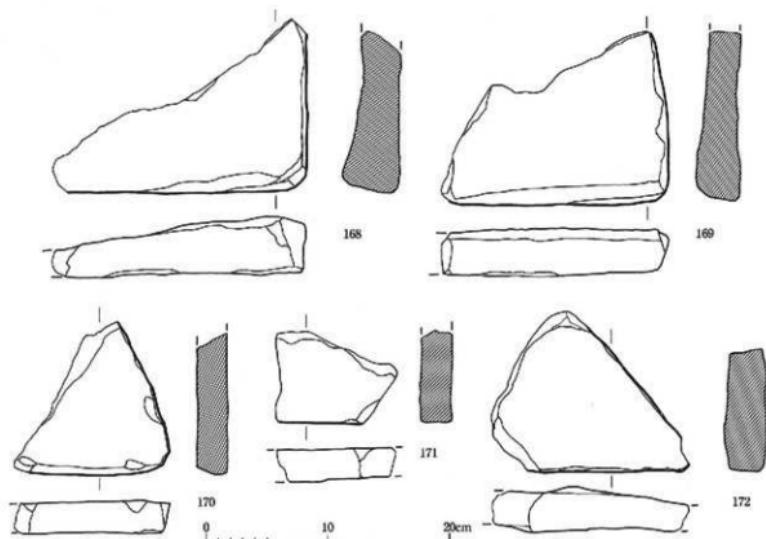
第32図 第6トレンチ南端擾乱部出土土器（2）



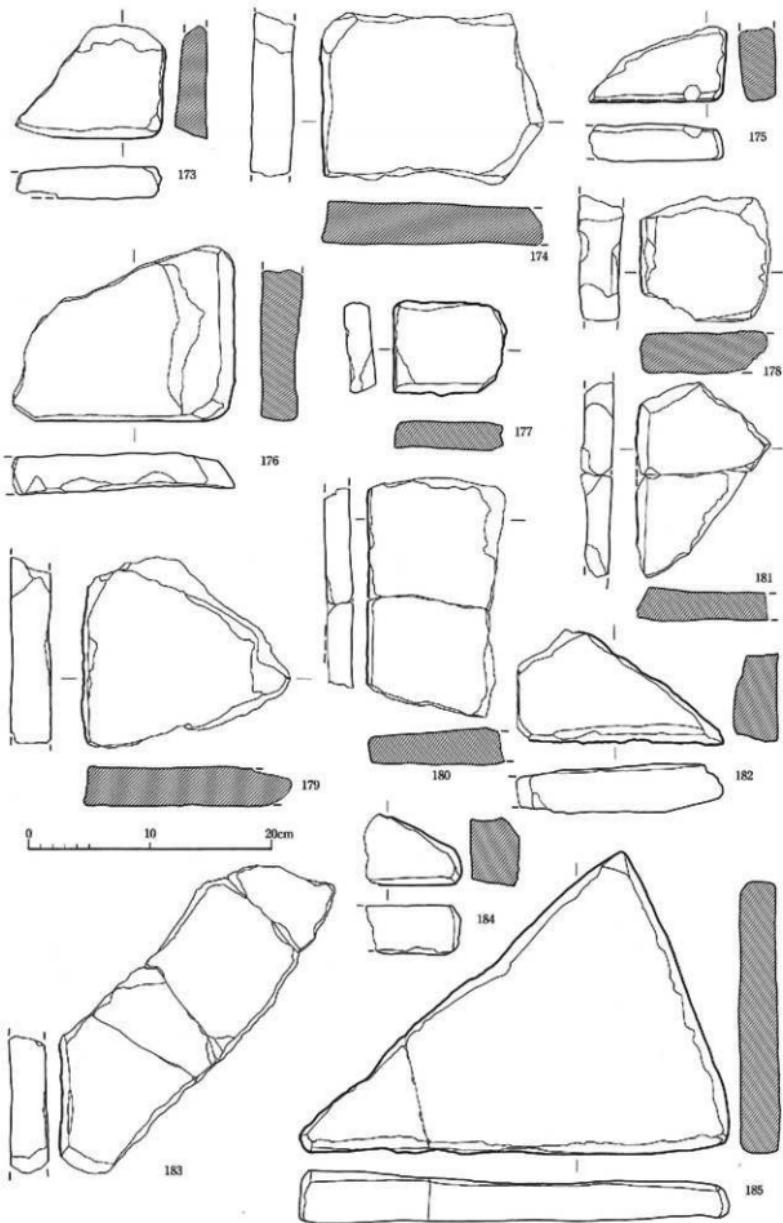
第33図 石室内攢乱土出土標原石・アブライト片

前面テラス状施設削平盛土出土土器（第31・32図） 第6トレンチ南端部テラスを削った後の盛土中から出土した土師器・須恵器・瓦器などである。

シショツカ古墳の南北縦断を観察するトレンチとして設定した第6トレンチでは厚さ0.4~0.5mの新旧耕土・床土を除くと、シショツカ古墳の墳丘第1段裾より南へ16.0m付近のT.P.117.4mから、前面テラス状施設裾の22.0m付近のT.P.115.6mに至る6.0m間に後世の棚田の拡張状況を示す堆積土が観察される。これら一連の盛土は古墳の前面テラス状施設の盛土を北から南にかけて斜めに断ち切る形で堆積する。堆積土は黄褐色系の砂質土・粘質土で、10.0~50.0cm大の石を多量に含んでいる。棚田造成の際の石積みが4段ほど北側斜面に認められる（第276層の南斜面に積み上げられた石積み）。またその後南へと継ぎ足して棚田の拡張が行われ（第272~275層）、それが最終的に現在の石積みとなっている。これらの堆積土からはコンテナ4杯分の奈良時代の土師器・須恵器、中世の瓦器、近世の磁器碗、縄文時代サヌカイト製石器などが第272~275層を中心に出土した。土器は、7世紀後半から18世紀に及ぶ土器類で、量的には8世紀代の土師器・須恵器が圧倒的に多い。しかし13世紀代の瓦器や、18世紀の磁器碗が少量ながら出土しているので、この部分の一連の盛土は最終的に近世の開墾によるものと考えられる。



第34図 球道部攢乱土出土擦原石片



第35図 第6トレンチ南端擾乱部出土榛原石片

2) 石材（第33~35図）

榛原石・凝灰岩・花崗岩片 第4章の石材鑑定に述べられる奈良県室生郡一帯に分布する流紋岩質熔結凝灰岩（室生安山岩）、いわゆる榛原石の破片が石室内堆積土や墳丘の後世の搅乱盛土から出土している。

石室内部に関連する出土層位としては、石室内堆積土（第186~207層）、削られた墳頂南斜面の現在の耕土下の一連の盛土（6トレンチ南北断面第157~172層）、周辺では前面テラス状施設南端の搅乱盛土（6トレンチ南北断面南端第271~276・289層）から、小片も含め100数点採取された。その中には接合可能な破片が10数点あり、石室内堆積土出土片が、前面テラス状施設の南端搅乱土の破片と一体になるものも含まれている。

破片には側面の端面や棱角、一部平坦面を削っている痕跡が認められるものがある（168・169・180）。また全周に加工を施す例もある（164・179）。平面的には三角形のもの（164・170・172・182・185）や方形であったと思われるもの（167・168・169・173・175・176）の破片が見られる。厚さは1.0cmから6.0cmにわたっているが、2.5~4.5cmが多い。現地調査の時点で採取された破片以外に、室内洗浄の過程でも小破片が見つかっている。

凝灰岩は仕切り石として用いられたことは既に述べたが、榛原石と同様石室内堆積土の洗浄で屑や細片・細粒の状態でコンテナ（57×33×13cm）にして4箱分採取している。一部に面をなすものも認められるが、具体的な形状は不明である。破片の中には朱彩のある破片や、土圧によつて土混じりの凝灰岩の屑に漆塗籠棺の編目そのものの痕跡がとどめられた例もある（巻頭写真図版18）。

石室構築材として用いられた花崗岩の屑や細粒も堆積土に含まれていた。側壁のどの石も端部から風化が進んでいるので、その剥落したものがかなり混入したと思われる。

3) 金属製品

接合の作業が進んでいないので全形を知りえない破片が多い。そこでここでは巻頭図版と巻末写真のほぼ番号順にしたがって個別に特徴を説明する。

銀線（巻頭写真図版1） 断面が底辺2.0mm、高さ0.5mm強の三角形を呈する銀線に繋によって刻みをつけ、山形の浮き彫りをつくっている。これより幅狭の破片もある。山形の数は1cmあたり17~19本である。破片には真っ直ぐなものとやや彎曲したものがある。大刀柄間の銀線葛織と思われる。

銀製帶飾（同2） ハート形垂飾の円弧をなす肩部から幅5.0mmの帯状の懸垂部にかけての破片である。肩部に下向する短い鋸が、また内側には滴状の飾りが付く。

垂飾部品（同3） 鎖環は銀製、金銅製である。大きいもので径9.0mm、中程度のものは4.5mm、小さいものは3.0mmである。空玉は銀製で、径6.0mmの半球状の破片であり、1.0mmの孔がある。頸飾、耳飾など垂飾の部品であろうか。

金糸・銀糸（同4） 幅1.0mmほどに細く截断した截金を捻っている。これとは別に鞍金具象

嵌に使用されているのと同様の金糸片も出土している。

指環（同5） 幅6.0mmの帯状の金箔を、両端を内に折り曲げて銅の薄板に固定している。綾杉文を打ち出している。

銀箔飾金具（同6） 打ち出しによって横位の条線で画した間をそれと直行する短い縦位の線で埋める。全形は不明。

鉢（同7） 半球状の笠形の頭部をもつ長さ5.0mmの鍍金製ものと、長さ7.5mmの鉄製のものがある。飾金具装飾用の鉢で、軸断面は円形ではなく、多角形をなす。

用途不明銀製品（同8） 薄い銀板製。平面的には径5.0cmの突出する稜をもつ部分の破片である。その上下にも径のやや小さい同様の突縁がある。これらの突縁に対して縦位に方形の小孔が穿たれている。馬鈴の一形態とも考えられるが定かでない。

鉢具（同9） いずれも金銅製である。右の全長は6.3cm、輪金幅5.8cm、軸径は5.0mm、指金基軸は金銅製で幅2.1m、径は4.0mmである。左は全長4.4cm、輪金幅4.3cm、その径4.0mm、指金基軸径5.0mm、その先端はやや細くなる。また革紐鉢具の取付基軸は長さ3.7cmその径2.0mmである。

大刀責金具（同10） 幅8.0mmの金製薄板に径4.0mmの魚子文を連ね、その両側に幅2.0mmの刻文の縁帶を打ち出している。金具そのものの延長は15.0cmほどになる。両側縁を折り曲げて銅板に固定している。

帶飾金具（同11） 鉄地金銅張で、ハート形をなし、全長4.4cm、幅3.8cm、中央の縦断面台形の隆起部に固定用の吊環の通し孔がある。裏面には吊環の残るもの（同図左）がある。

鞍金具（同12） 鉄地に金細線で龍文を象嵌した鞍金具の破片である。龍の胴体と脚が表現されている。縁取金具の脱落した痕跡がある。縁取金具の付近では厚さ4.0mm、鉄板だけの部分では2.0mmと薄い。

杏葉（同13） いずれも鐘形杏葉の破片である。左の破片は立間から右肩にかかる部分で懸垂孔には鉤金具が接着している。内側に斜格子の浮き彫り模様がみられ、交差部に鉢留孔がある。右上の破片は杏葉の右肩部分にあたり、径6.0mm、高さ3.0mmの鉢頭がある。右下は内側の斜格子交差部の破片である。

銀象嵌大刀柄頭（同14） 残存長6.0cm。横断面八角形をなす、幅4.6cmの大刀円頭柄頭で、幅4.0mm、断面蒲鉾形の銀製責金具が付く。裏面には木質が残る。亀甲繁文の中央に左向きの頭部と両翼を表現する上半身の單鳳凰文を配置する。亀甲文は2本線で六角形の交点は二重円で表す。鳳凰の両翼は逆ハート形に立ち上がり、頭上に集まる。その周囲は上向きの旋毛で埋める。左下に繋がる亀甲文の六角の頂部の二重円から三弁の花飾が垂下する。以上の文様が銀細線の象嵌により仕上げられている。

雲珠・辻金具（同15） いずれも鉄地金銅張で、雲珠・辻金具の伏鉢、脚、革紐端金、爪形、鉤などの部分である。

鉄鎌（写真図版36） 大半が仕切り石周辺で出土した。ほとんどが破片となっていたが、まと

まって錆着状態で出土したものもある（195）。固体確認できるものには長頸式の両刃細根の鎌がみられる。刃部の長い鎌は刃部長6.0cm、刃部幅1.6cm、厚さ0.3cmで、茎部に向かって裾広がりとなり、茎との境には左右に幅3mmの突出した棘範被がある（188）。刃部の短い鎌は、刃部長2.6～3.0cm、刃部幅0.7cm、厚さ0.3cmで、左右に突出する棘範被は1.5mmである。茎は一辺4.0mm程度の方形断面を呈し、先細りとなる。範被は長さ12.0cmほどになる。範被の錆着したものでは断面4.0～5.0×7.0mmの長方形断面を呈している（195）。

刀子（同37.197～200） 断片で形状はわからないが。背幅3.0～4.0mm、刃部幅1.1～1.4cmの刃部の破片に木質が残る例（197・198）がある。また下方に幅狭となる断面八角形の口金物に銀装を施す刀子がある（200）。金具の幅は1.5cm、横断面の上幅1.0cm、下幅0.7cm、厚さ0.5cm弱である。木質部に一端では幅0.5cm、厚さ0.2mm、他端では幅1.3cm、背幅0.5cmの刀身が残る。

大刀（同37.201～207） 木質部を残す刃部や茎部の破片がある。刃部幅は2.4～2.9cm、背幅0.6～0.9cm、茎部幅は1.7cm、背幅0.6cm（201）である。

挂甲小札（同38.208～214） 褐敷に密着した形で出土した。幅2.1cm、長さ8.2～8.5cm（208・209）、それより幅広で短い幅2.8cm、長さ7.5cm（211）、幅2.8～3.0cm、長さ10.2cm（210）の小札が見られる。腐食のため確認困難であるが、211や212では上下の左右両辺に沿って紐通しの孔が縦に2ヶ所認められる。重なった状態で出土した小札には幅2.4cmのもの（213）、幅3.0cmのもの（214）がある。後者の裏面には粗い布目の痕跡がある。

その他（同38.215～219） 厚さ2.0mmほどの鉄板で、一端が円弧を描き、もう一端に向かって狭くなる扇形を呈する（215・217）。215では右下隅に角を残し、そのやや上に孔の痕跡をとどめる。円周部分の残存長は6.5cm、右角より円弧までは7.0cm。216は平面将棋の駒形を呈し、右上隅に角を残す。三角形の開きは115°で、左上斜辺が3.5cm、それに続く上辺が7.0cmある。小札の一種であろうか。217も215と同じく一方の辺が円弧をなす厚さ2.0mmの鉄板で、上辺右半分に2.0cmにわたって原状の鈍辺が残る。円周部分の残存長は6.0cm。218は一端が丸く、他端がやや開き気味になる厚さ1.0～1.5mmの薄い鉄板で、全体がやや彎曲する。全長は8.2cm、幅広の右鈍辺は2.9cmになる。219は中央が山形に曲がる。両端が幅広く中央がやや狭く1.8cmを測る。全長は12.0cm、両端幅は2.1～2.2cm、厚みは2.0～3.0mmである。220は銅板で彎曲する縁が外に折り曲げられている。以上のはかに内面に木質を残した厚さ3.0mmの袋状の鉄片（196）がある。横断面が八角形をなすので、鞍金具の覆輪の端部とも思われる。

素環鏡板（同39.221） 径9.5cmの鉄製円形鏡板で、鉄棒径は1.0cmである。円形の遊環をとどめる。

鉗具（同39.222） 鉄製。全長7.7cm、輪金幅5.7cm、輪金基部幅2.5cm。

鞍金具（同39.223～226） いずれも鉄地金銅張の礪金具周縁飾金具で、223・224は、厚さ3.0mm、幅9.0mmの鉄板を巻き込み、上から径8.0mm、高さ1.1cmの飾鉄で留めている。鉄頭の一部に金張が残る。裏面に漆の被膜が残る。鉄地金銅張の覆輪（226）は厚さ3.0mmの断面半六角形を呈し、

上辺1.0cm、上辺から続く側辺1.2cmの頑丈なものである。外面には金張が残り、内面には木質の痕跡をとどめる。

雲珠・辻金具（同39.227～229） 鉄地金張の伏鉢部分（227・228）と脚部（229）の破片である。脚部には径1.0cm弱の鉢留が3個所に残る。

壺鏡（同39.230） 木心鉄装琵琶形壺鏡の金銅貼鳩胸金具と思われる。幅2.6～2.7cm、厚さ3.0mmで、中央に縦位の稜をもち、その両側に笠形の鋲が一列に打たれている。鋲孔も認められる。裏面は両端から3.0mmのところで段がついて凹部をなし、この窪みに木質を残し、また木質の剥がれたところには黒漆膜が付着している。

小環（同39.231） 径2.6cmの鉄製環で、辻金具・雲珠の部品などが考えられる。

鉄製兵庫鎖（232・233） 232は、径0.8cm、長さ26.0～28.0cmほどの鉄棒を二つ折りにして、両端に径1.4cmの別の鉄棒が通る環をこしらえ、その両端以外は接合させた後、さらにその中央で二つ折りにして、先の両端の環を合わせ、一方中央で折り曲げた部分にも環を作る。このようにして全長6.5cmの二重の鉄棒の両端に、互いに直交する環を得ている。233は、径1.1cmの鉄棒が径3.4cmの環に通った状態である。232は鎧鞘、233は引手であろうか。

4) ガラス玉（巻頭写真図版16）

淡青色、紺色、農緑色、淡緑色のガラス玉があるが、大半が紺色中心である。径2.0～5.0mm、厚さ3.0mm前後で、ほとんど扁平な円形である。ほかには径2.0mm、長さ2.5mmの管玉が3点だけ出土している。石室堆積土は今も洗浄中であり、これまでのところ約800点の玉とその破片を取り上げている。

5) 漆塗籠棺（同17）

大は10.0～13.0cm四方の破片から肩粂状態のものまでコンテナにして8箱程度出土している。容器の口縁部、体部または底部、底部から体部にかけての破片がある。口縁部は、斜めに丸紐状の材質を素巻きで太く編み、角に丸みがついて肥厚する方形断面を呈するもので上辺1.2～1.9cm、側辺1.6cm、円形断面では径1.9cmになる。それ以外の平坦な体部、底部は平編みで、厚さ0.5～0.6cmが大半である。底部から体部にかけての屈曲部はしっかりとしている。内外面ともに厚く漆塗りで仕上げ、内面にはさらに朱漆を塗っている。編み方は、二つ超え二つ潜り一つ送りの綾編みであろうか。

第4章 シショツカ古墳の石材の石種とその採石地

奈良県立橿原考古学研究所共同研究員 奥田 尚

南河内郡河南町にあるシショツカ古墳の石材を裸眼で観察した石材の石種は石英斑岩、細粒黒雲母花崗岩、中粒黒雲母花崗岩、アブライト質黒雲母花崗岩、角閃石黒雲母石英閃綠岩、閃綠岩、斑纈岩、片麻状細粒黒雲母花崗岩、片麻状中粒黒雲母花崗岩、流紋岩質溶結凝灰岩、流紋岩質火山纈凝灰岩、流紋岩質凝灰角纈岩A、流紋岩質凝灰角纈岩Bである。

石室に使用されている加工石は角閃石黒雲母石英閃綠岩で、石材の隙間を埋めるために石英斑岩の自然石が1石使用されている。

羨道の壁石と閉塞石には自然石が使用され、石種は石英斑岩、細粒黒雲母花崗岩、中粒黒雲母花崗岩、アブライト質黒雲母花崗岩、角閃石黒雲母石英閃綠岩、斑纈岩、片麻状細粒黒雲母花崗岩である。

石室の入り口付近には方形に加工された仕切石が2石あり、石種は流紋岩質凝灰角纈岩A、流紋岩質凝灰角纈岩Bである。

また、石室内の発掘時の擾乱土内から、流紋岩質溶結凝灰岩、閃綠岩、片麻状細粒黒雲母花崗岩、片麻状中粒黒雲母花崗岩、流紋岩質火山纈凝灰岩等の破片が出土している。流紋岩質溶結凝灰岩の板石には周囲に加工痕が見られるものがある。山田寺金堂の犬走や飛鳥寺の回廊の側溝にみられるような方形に加工された板石が使用されていたのである。

石室に使用されている石材と石室内から出土した石材の特徴と推定される石材の採石地について述べる。

石英斑岩：色は灰白色で、亜角纈である。石英の斑晶が散在する。粒径が1～1.5mm、量が僅かである。基質はガラス質である。

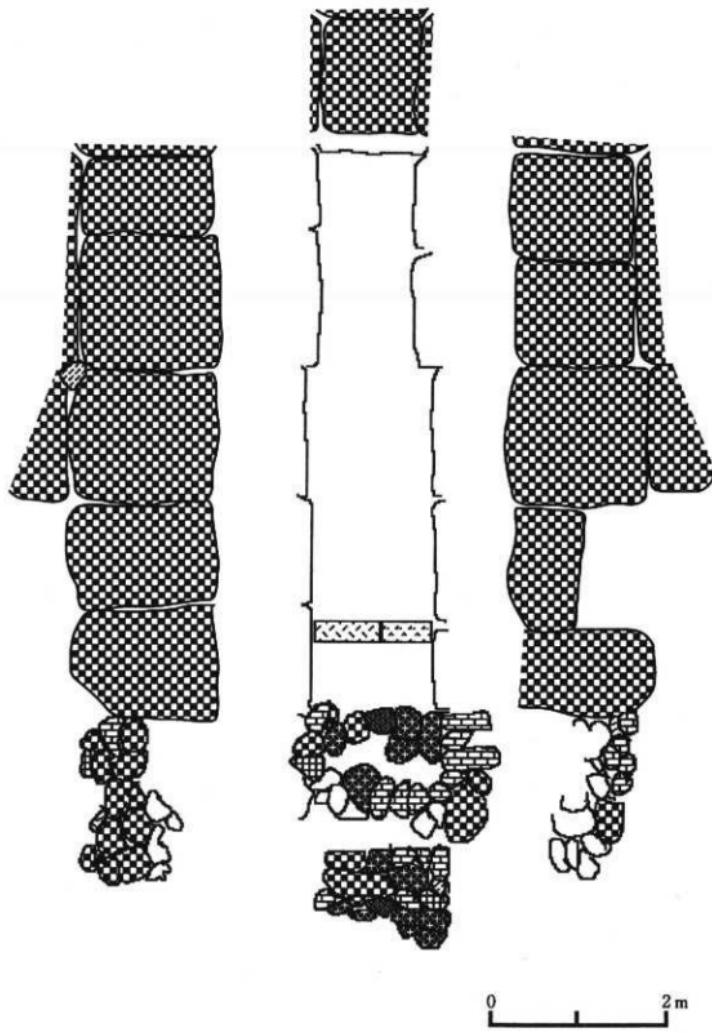
このような岩相の石は岩脈として分布する石にみられる。東古墳の南方にある平石川の川原でも稀にみられる石である。

細粒黒雲母花崗岩：色は灰色で、亜角纈である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～1mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が0.5～1mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が中である。

このような岩相の石は当古墳東方の岩橋山に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。石材は川原石様であることから、平石川の川原で採石されたと推定される。

中粒黒雲母花崗岩：色は灰色で、亜円纈である。風化して砕けやすい。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径は2～3mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～5mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1～3mm、量が僅かである。

このような岩相の石は当古墳東方の岩橋山に分布する黒雲母花崗岩の一部に似ている。石材は



凡例

[Dotted Pattern]	石英斑岩
[Solid Black Pattern]	細粒黑雲母花崗岩
[Brick Pattern]	中粒黑雲母花崗岩
[Hatched Pattern]	アブライト質黑雲母花崗岩
[Cross-hatched Pattern]	角閃石黑雲母石英閃綠岩

[Solid Black Pattern]	斑鷹岩
[Wavy Pattern]	片麻狀中粒黑雲母花崗岩
[Hatched Pattern]	流紋岩質凝灰角巖岩 A
[Cross-hatched Pattern]	流紋岩質凝灰角巖岩 B

第36図 シシヨツカ古墳の石材の石種

川原石様であることから、平石川の川原で採石されたと推定される。

アブライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色で、亜円礫である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～5mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量がごく僅かである。

このような岩相の石は当古墳東方の岩橋山に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。石材は川原石様であることから、平石川の川原で採石されたと推定される。

角閃石黒雲母石英閃綠岩：色は灰白色で、加工石と自然石がある。自然石は亜円礫である。何れの石も風化して碎けやすい。石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～5mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2～5mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が2～8mm、量が僅かである。

このような岩相の石は葛城山に広く分布する石英閃綠岩の岩相に似ている。平石川の川原にも多く見られる石である。石室に使用されているような大きな石は平石川の上流にある持尾付近まで行かなければ採石できない。また、弘川から上河内付近でも採石できる。羨道部付近に使用されている川原石様の石は、平石川の川原から採石されたと推定される。

閃綠岩：色は灰褐色で、亜円礫である。長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～5mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状・粒状で、粒径が0.5～1mm、量が僅かである。角閃石は黒色、柱状で、粒径が2～7mm、量が僅かである。

このような岩相の石は当古墳東方の岩橋山に分布する閃綠岩の岩相の一部に似ている。使用石材は川原石様であることから、平石川で採石されたと推定される。

斑櫛岩：色は灰緑色で、亜円礫である。長石と角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～5mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～3mm、量が多い。

このような岩相を示す石は太子町畠付近に分布する斑櫛岩の岩相の一部に似ている。また、岩橋山にも部分的に斑櫛岩が分布する。川原石様であることから平石川の川原から採石されたと推定される。

片麻状細粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、角礫・亜角礫である。縞模様をなし、黒色部には黒雲母が集まっている。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が0.5～1mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が0.5～1mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量が中である。黒雲母は片麻状の方向に並んでいる。

このような岩相の石は当古墳北側の山地に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。石材は川原石様であることから、平石川の川原から採石されたと推定される。

片麻状中粒黒雲母花崗岩：色は灰白色で、亜角礫である。縞模様をなし、黒色部には黒雲母が集まっている。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～4mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が

0.5～1 mm、量が僅かである。黒雲母は片麻状の方向に並んでいる。

このような岩相の石は当古墳北側の山地に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。石材は川原石様であることから、平石川の川原から採石されたと推定される。

流紋岩質溶結凝灰岩：色は灰白色で、板状節理が顯著である。斑晶鉱物は石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明、粒径が0.5mm～5 mm、量が多い。複六角錐あるいはその一部が認められるものが多い。長石は無色透明、短柱状で、粒径が2～6 mm、量が中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～3 mm、量が僅かである。流理の方向に並んでいる。基質はガラス質で、顯著な溶結が見られる。

このような岩相の石は宇陀郡一帯に広く分布する室生火山岩の岩相の一部に似ている。板状節理が顯著であることから室生ダム北方付近で採石されたと推定される。

流紋岩質火山礫凝灰岩：色は白色で、全て破片である。構成粒は流紋岩質溶結凝灰岩・軽石である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色・暗褐色で、粒形が亜角・亜円、粒径が0.2～3 cm、量が多い。軽石は白色、粒形が亜角～円で、粒径が0.5～3 cm、量が多い。基質は緻密で、軟らかい。

このような岩相の石は二上層群下部ドンズルボー層の溶結していない岩相の一部に似ている。石材の採石地としては太子町春日の牡丹洞東方付近が推定される。

流紋岩質凝灰角礫岩A：色は灰白色である。構成粒は流紋岩質溶結凝灰岩・軽石である。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色、粒形が亜角・亜円、粒径が0.5～4 cm、量が多い。軽石は灰白色、粒形が亜円で、粒径が0.5～5 cm、量が多い。基質は緻密で、軟らかい。

このような岩相の石は二上層群下部ドンズルボー層の溶結していない岩相の一部に似ている。石材の採石地としては牡丹洞東方付近が推定される。

流紋岩質凝灰角礫岩B：色は灰白色である。構成粒は流紋岩・流紋岩質溶結凝灰岩・軽石である。流紋岩は灰色、粒形が亜角、粒径が0.5～0.8 cm、量がごく僅かである。流紋岩質溶結凝灰岩は黒色・暗褐色と黄土色のものがある。前者の流紋岩質溶結凝灰岩は、粒形が亜角・亜円、粒径が0.2～4 cm、量が多い。後者の黄土色のものは粒形が亜角、粒径が2～2.5 cm、量がごく僅かである。軽石は白色、粒形が亜円で、粒径が0.5～5 cm、量が多い。基質は緻密で、軟らかい。

このような岩相の石は二上層群下部ドンズルボー層の溶結している部分に近い岩相の一部に似ている。石材の採石地としては太子町山田の鹿谷寺跡北方付近が推定される。

以上のように、淡道部付近の川原石様の石は当古墳の南方にある平石川で採石できる石であるが、石室に使用されているような大きな石は平石川の上流に位置する持尾付近や弘川付近まで行かなければ採石できない。更に、仕切石として使用されている流紋岩質凝灰角礫岩は牡丹洞東方付近や鹿谷寺跡北方付近に行かなければ採石できない石である。また、石碑として使用されていたと推定される流紋岩質溶結凝灰岩は室生ダム付近まで行かなければ採石できない石である。

第5章 まとめ

今回の調査で把握できたシショツカ古墳の規模・構造、その他の概要は以上のようなものである。その大要を再確認するならば、以下のようなになる。

1. 各段四辺を一定の比率で長方形に平面取りした3段の墳丘を築成し、斜面に大振りの板状の石を貼り、南向きの前面には旧地形の上に盛土してテラス状施設を築き、その裾に大石を東西に据え連ねて外域を画した、南向きを強調した古墳である。
2. 内部構造は、前室と奥室をもつ切石積みの横穴式石室で、奥室は入り口両側壁角に扉受けをもつ横口式石槻の形態をとり、その前に続く前室と閉塞石までの間には直方体凝灰岩を立てて仕切った疊敷の空間を設ける。石室の空間の長さ・面積には一定の関係が認められる。南北の長さでは、疊敷の3倍が奥室の長さであり、5倍が前室（疊敷も含める）の長さとなり、閉塞施設の長さも疊敷の長さのほぼ2倍である。また面積では前室は奥室の2倍となっている。このように墳丘とともに石室の構築にも一定の平面取りがなされたらしい。
3. そのような石室の側壁・天井石では、接合箇所の隙間に石が詰められ、漆喰が塗りつけられ、崩れや水気の浸透を防いでいる。また床面では仕切石より奥室側に砂を入れて排水の効果を狙うような工夫がなされたようである。扉・床石・床面など当初の状態は失われてしまっていたが、奥室に散乱していた疊をはじめとして、加工の痕跡をとどめる凝灰岩や特徴的な榛原石の板石の破片が多数出土したことは、前後両室の床面にそれらが敷石として用いられた可能性を十分に示唆する。しかし奥室の床面は両側壁が床となる石に載る構造ではなく、側壁に挟まれる形であった。
4. 石室内での葬送儀礼後の密閉は、石室側と羨道側から石を積み上げ、その空間に土を充填した閉塞施設と、閉塞後も羨道の側壁と同様の規模の川原石を羨道床面に積んだ後、羨道入り口に至る側壁上辺まで土を盛りあげ、最後に墳丘第1段南斜面に大振りの板石を貼って、非常に厳重に完遂された。
5. このようなシショツカ古墳の築造時期は、以上のような慎重な密閉によって幸いにも原位置を損なわれることなく残った羨道部出土の須恵器壺と高坏の一括、そして閉塞石北側疊敷上の須恵器壺から6世紀後半の時間幅が考えられる。これに加えて、石室内の搅乱土中にかろうじて残っていた龟甲繁单鳳凰文銀象嵌大刀円頭柄頭、鉄地金銅張鐘形杏葉、龍文金象嵌鞍金具、木心鉄製琵琶形壺鏡、挂甲小札などもその根拠となろう。しかし一方では横口式石槻構造、版築状盛土、切石造り、漆喰、榛原石の使用、漆塗籠棺、金糸など、従来から取りざたされている、7世紀に入って認められる要素も併せもっている。

以上のように、平石谷にその存在が確認されたシショツカ古墳は、7世紀中頃まで追葬が続けられていたとされる下流の横穴式石室墳の加納古墳群と、7世紀中頃に築造されたとされる上流

の横口式石槨構造をもつアカハゲ・ツカマリ古墳との間に展開した古墳造営の動線を、空間的にも時間的にも離起的に繋ぐ古墳であると考える。

参考文献

大阪府教育委員会『平石地区・桐山地区発掘調査概要』2000年

大阪府教育委員会『加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要』2002年

大阪府教育委員会『陶邑』Ⅲ 1978年

河南町誌編纂委員会『河南町誌』1968年

田辺昭三『須恵器大成』1981年

近つ飛鳥博物館「金の大刀と銀の大刀」1996年

中世土器研究会『概説中世の土器・陶磁器』1990年

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VI』 1975年

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告VII』 1976年

奈良県立橿原考古学研究所『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』1990年

日本中央競馬会『日本馬具大鑑』第一巻 古代 上 1990年

最後になりましたが、現地調査に参加した庵ノ前智博、草別卓郎、佐藤三和子、島内洋二、進藤智美、周藤光代、田中政之、原田亮子、矢倉嘉人、山下舞子、整理作業に頑張っていただいた東英美子、荒木波子、井上能子、宇沢ヒデ子、江藤豊子、大上馨、大矢ノリ、奥野容子、川東貴子、小門邦代、古下佳代子、高田真由美、中辻三沙穂、納谷有香子、野崎明美、東野穂澄、二見雅子、細川眞弓、堀口友里、増川順子、松谷文江、村井律子、八柄あさ代、山下美佐子、山田洋子の皆さんには、心から感謝申し上げます。

今回の調査の最初から最後まで常に温かいご指導をいただいていた今村道雄さんが、調査を終えて2ヶ月もたたないうちに、不慮の事故によって突然帰らぬ人となられました。その教えを無駄にせぬように今後の調査に生かしていきたいと思います。ここに記してご冥福をお祈り申し上げます。

遺物観察表

品 名	器種	出 土 個 所	層 位	法 量 (cm)			特 徴	備 考
				口徑	底(高 台)径	器高		
1 磁器碗		6トレンチ前室 上層部	第180・ 181層	10.40		4.85	樹花文染付碗。疊付無釉。波佐見窯系。	17世紀
2 瓦器碗		6トレンチ 閉塞石北側	第207層	11.20		4.00	小さい底部からやや内嚙気味に薄い器壁の口縁部がのびる。端部はわずかに外反し、わずかに内端面をなし細い園線がめぐる。内底面から口縁部内面にかけて粗いミガキが連弧状に施されている。底部外面の高台をわずかに残す。炭素吸着は全面に及ばない。	大和型III-E
3 瓦器小皿		6トレンチ 閉塞石北側	第207層	8.00		1.10	平たい底部から厚みのある口縁部が外斜方にのび、端部を丸く仕上げる。口縁部ヨコナデ、底部外周指オサエ。	13~14世紀
4 土師器小皿		6トレンチ供進 部	第207層	8.60		1.90	平坦な底部から短く細い口縁部が外反して立ち上がる。口縁部ヨコナデ、内底面ナデ、底部外周指オサエのまま。	13世紀
5 土師器小皿		6トレンチ閉塞 石北側	第207層	10.20		1.90	丸みのある底部から口縁部がなめらかにのびる。口縁部ヨコナデ。口縁端部に煤痕あり。	13世紀
6 土師器小皿		6トレンチ 閉塞石北側	第207層	10.60		2.00	丸みのある底部からやや内嚙気味に口縁部が立ち上がる。口縁部から底部外周に至るまで横方向に密にヘラミガキを重ねる。内底面のみナデ、一部口縁部からのミガキ。口縁端部に煤痕あり。	13世紀
須恵器台付壺 7 横部		6トレンチ 閉塞石北側	第207層	16.80			壺部上方で段をなし、あまい凸帯が巡り、下方は底部に向かってなだらかに下る。武縫面は平坦に接地面となる。凸帯より上に浅い沈線が巡る。この沈線とその上にもう一本の浅い沈線があり、この2本の沈線の間に高い二等辺三角形の透かし窓が切ってある。内外面回転ナデ。外面暗灰色、内面灰色。断面は内部が赤紫色のサンドイッチ状を呈する。胎土には白色微砂粒を多量に含む。	
8 須恵器子持ち壺 小壺口縁部		6トレンチ閉塞 石北側	第207層	4.80			ゆるやかに斜方にのびる口縁部。回転ナデ。外面暗赤紫色で暗緑色の釉がかかる。内面は暗緑色の釉が全体にかかる。断面は赤紫色。	
9 須恵器高坏壺部		6トレンチ閉塞 石北側	第207層				壺部上下に拡張して横角をなすが、上端は鋭い。内傾する内側はやや凹面となる。外面灰色、断面は赤紫色を呈する。	
10 須恵器高坏壺部		6トレンチ 閉塞石北側	第207層		14.40		壺部は上に拡張し、両端が稜角をなす。端部は外傾して凹面となり、内面も浅い凹面となる。回転ナデ。外周部のある黒色、内面灰色、断面赤紫色で、胎土には白色微砂粒、黒色粒を含む。	
11 須恵器高坏壺部		6トレンチ 閉塞石北側	第207層		19.00		外下方に拡がる壺部で、壺部は上下に拡張し、両端は稜角をなす。外端面は内傾して浅い凹面となる。回転ナデ。外周部のある黒色、内面灰色、断面は内部が赤紫色となるサンドイッチ状を呈する。白色微砂粒、黒色粒を含む。	
12 須恵器高坏壺部		6トレンチ閉塞 石北側	第207層		20.40		壺部は上限に拡張し、両端は稜角をなし、外端面はやや内傾して浅い凹面となる。回転ナデ。外周部のある黒色、内面灰色、断面は内部が赤紫色のサンドイッチ状である。白色微砂粒を含む。	

13.須恵器四耳壺	6トレンチ閉塞 石北側縁敷上面	第280層	19.00	52.40 体部最大径 51.40	口頸部はやや外反気味にのび端部にかけてやや肥厚する。端部はわざかに内傾し上下に拡張し、よってその内側には浅い凹状の端面を得る。肩部は内擣して体部に至り、体部はやや突出する丸底の底部に向かってさらにな内擣して下る。体部最大径は器高全体の半ばやや上にある。基部の少し下の肩部に先端が下に向く鉤形の把手が付く。把手が残存していたのは2個所であったが、同じ高さのほかの位置で把手が剥離したわずかな痕跡がかるうじ認められ、それを考慮して本来4カ所に取り付けられていたとして復原した。内面は口縁部から基部上端まで回転ナギ、それより下方底部に至るまでは同心円タタキを施す。	陶邑II-4
14.須恵器壺	6トレンチ模造 部西側	模造部埋土	20.90	41.40 体部最大径 38.40	腰高の張りのある体部に外上方にのびる口頸部がつ。肩の張りが一方に偏し全体としては不均齊な器である。口縁端部は肥厚し、下端は若干垂れて稜をなし、上端は外側に軽い斜めの端面をなす。肩部は大きく内擣して体部上半を形作る。体部最大径は器高全体の半ばやや上にくる。その位置からほぼ直線的に底部に下った後、底面より4cm上でやや屈曲する形で丸底の底部に至る。頸部から基部にかけて縱方向の沈継2本からなるヘラ配刃がある。口縁部外面を回転ナギにより仕上げる。内面では頸部下にも及んでいる。外面は基部から底部に至る全面を平行タタキ、先ほどの底部との屈曲部まではタタキの後、横方向のカキメで調整する。内面では頸部下から底部まで同心円タタキを施す。内面は灰色、外面は口縁部～体部下半が暗灰色、肩部～底部が青灰色、断面は内部が赤紫色となるサンドイッチ状を呈する。	陶邑II-4-5

15	須恵器甕 長脚高 部東側	6レンチ漢道 部埋土		19.50	46.80 49.30	ほぼ球形の体部に直立気味に立ち上がる頭部そして外反する口縁部がつく。口縁端部は肥厚し上下に拡張して、特に下縁は斜め下に突出する様をなす。口縁部内外面は回転ナデ調整、内面は頸部以下底部まで同心円タタキであるが、底面より10cm上位のあたりから別のタタキ具を用いたためか弧線の間隔が広い同心円となり、施し方も粗い。底面より16.5~17.0cm付近では横方向のナデ調整。外面は頸部以下底部に至るまで格子タタキである。その後頸部から脚部そして体部下半には細い工具による部分的なスリ酒い状のナデ、底部にはそれより密に同様のナデが、さらにこれとは別に体部最大径の位置より下半にかけて横方向の板状の工具を用いた強いナデ痕が認められる。上位のものは1~2mmと幅狭、下位のものは3~5mmと幅広である。内面は暗青灰色、外面は全面青灰色であるが、口縁部から体部下半にかけてぶい赤紫色を呈する。断面は外面にみられたにぶい赤紫色と同様の色調である。	海邑 II - 4-5
16	須恵器無蓋 長脚高 部東側	上記14甕内		12.25 12.60	19.40 14.50	深みのある楕形の坏部に細長い脚が付き、脚拡がりの端部が段をなす。2段3方の透かしがある。坏部外面に2条の凸線巡る。上下の凸線を整形した後、3本程度の細いヒゴ状の工具の先端で、右上から左下にかけて長さ1.5~2.1cmの斜行縫を描く。描き始めは強く山形をなし、左下へ斜めに長く引っ張り、これを相次いで連続させる。工具を器表面から離さず次の部位に続けるため、部分的に重複する部分がある。脚部は上下の透かし窓の間に凹線が2条巡る。下段の透かし窓の下縁に凹線の名残と思われる浅い沈線様のナデ痕が認められる。窓の切り取り幅は3~10mmの範囲で、下段窓の下縁が最も幅広となる。坏部に上縁8.3cm、高さ3.3cmの半円状の焼成後の拂りがある。内面坏部は淡青灰色、脚部は淡灰色、外面淡灰色、断面灰色。坏部から脚部下方にかけて薄い暗緑色の種がかかる。胎土には白色微砂粒を含む。	海邑 II - 4
17	須恵器無蓋 長脚高 部東側	上記14甕内		13.60 13.00	21.65 16.60	深みのある楕形の坏部に細長い脚が付き、脚拡がりの端部が段をなす。2段3方の透かしがある。坏部外面に2条の凸線が巡る。上下の凸線を整形した後、3本程度の東ねた細ヒゴ状の工具の先端で右上から左下にかけて1.5~2.0cmの斜行縫を描く。描き始めは強くやや深く押さえて小さい山形をなし、それから斜め左下へ長く引っ張る。これを連続して施す。脚部は上下の透かし窓の間に、下段の透かし窓の位置に凹線が巡る。透かし窓の切り取り幅は3~10mmで、下段下端が最も幅広い。坏部は半円状に2段にわたって抉られている。上段の縫幅はほぼ直径に等しく、下段の幅は10.8cm、高さは5.0cmを測る。内面坏部は淡青色、脚部は淡青灰色、外面は暗灰色~淡灰色、断面は内部暗灰色、外側灰色のサンドイッチ状である。	海邑 II - 4

18	須恵器無蓋 長脚高坏	上記14窓内		12.50	12.00	20.30	脚高 15.50	深みのある楕形の坏部に縦長い脚が付き、粘れがりの端部が段をなす。2段3方の透かし窓がある。坏部外面に2条の凸線が巡る。その上下の凸線を整形した後、3本程度東ねた細ヒゴ状の工具の先端で右上から左下にかけて長さ1.0～1.6cmの斜行線を連続して描く。ただし描き始めの3本のヒゴの先端の痕跡があきらかに部分ごとに割離された残い1本の描き始めの線のみみられる部分がある。また陶邑II-4
19	須恵器無蓋 長脚高坏	上記14窓内		12.80	12.80	20.30	脚高 16.40	深みのある楕形の坏部に縦長い脚が付き、粘れがりの端部が段をなす。2段3方の透かし窓がある。坏部外面に2条の凸線が巡る。上下の凸線を整形した後、3～4本に束ねた細ヒゴ状の工具の先端で、右上から左下にかけて1.5～2.1cmの長さの斜行線を連続して描く。描き始めは強く小さい山形をつくり、左下へ斜めに長引つゝ張り、これを相次いで施す。しかし全体としては斜行線は浅く、強く撫でたような印象を受ける。脚部は上下的透かし窓の間に回線2条、下の透かし窓の下縁や上に1条巡らせる。窓の切り取り幅は3～6mmで、下の窓の下縁が最も幅広である。内面は灰色～淡灰色、脚部は淡灰色、外は灰色～淡灰色、断面は淡灰色で、全体的に白色微砂粒を含み、2～3mmの穂粒も若干混じる。
20	土師器小皿	6トレンチ北側 周溝	第14～7 層	11.60				肥厚する口縁部が直立気味に立ち上がり、深みのある器。
21	土師器小皿	6トレンチ北側 周溝	第63・ 88-99層	9.20		1.25		口縁部1段ナデ。端部外面ナデにより軽い面をなす。
22	瓦器碗底部	6トレンチ北側 周溝	第63・ 88-99層		5.40			内底面に格子状暗線。高台は低い三角形断面。
23	瓦器碗	6トレンチ北側 周溝	第14～ 17層	15.20	2.70			浅い器で、底部外面に高台の名残の細い粘土紐の貼り付け。内面に渦巻状の粗いミガキ。
24	土師器高脚部	7トレンチ東側	第47層					ヘラケズにより断面八角形となる太い輪をなす面取り高坏。
25	須恵器坏塗	7トレンチ東側	第56層					比較的平たい天井部。回転ヘラケズ、未調整。
26	土師器小皿	7トレンチ東側	第47層	9.70		0.70		口縁部立ち上がりゆとりと目立たない円板状の器。
27	瓦器碗口縁部	7トレンチ東側	第47層					器壁の薄い器。内面は口縁端部に至るまで横方向に密にミガキ。
28	瓦器碗口縁部	7トレンチ東側	第47層					器壁の薄い器。内面は口縁端部に至るまで横方向に密にミガキ。
29	土師器龜裂部	7トレンチ東側	第51層					外面龜裂方向の細かいハケメ。内面はハケメの後ナデ。底端面はナデ。
30	須恵器坏身	7トレンチ西側	第64層	10.60				口縁端部丸く、立ち上がりは短く内傾する。
31	土師器坏口縁部	8トレンチ東側	第34層					内傾し上端面をなす器。坏または皿か。調整不明。
32	土師器坏口縁部	8トレンチ東側	第43層					内傾し上端面をなす器。坏または皿か。調整不明。
33	須恵器長頸壺 頸部	8トレンチ東側	第43層					回転ナデ調整
34	土師器把手	8トレンチ東側	第34層					壺Bの把手。
35	土師器甕口縁部	8トレンチ東側	第43層	18.00				ぐの字形に短く斜方にのびる口縁部をなす。調整不明。

36	須恵器壺蓋	8レンチ東側	第43層	9.80		3.50	天井部丸みがあり、端部は内側に面をなす。天井部はヘラギリのままである。	陶邑II-6
37	須恵器壺蓋	8レンチ東側	第34層	15.80			端部がやや内側へ屈曲する	陶邑IV-2
38	須恵器壺身底部	8レンチ東側	第43層		8.80		底部端やや中央寄りに低い高台がつく	陶邑IV-3~4
39	須恵器壺身底部	8レンチ東側	第43層		10.40		底部端に中央寄りの高台がつく	陶邑IV-2~3
40	須恵器壺身底部	8レンチ東側	第43層		11.00		底部端から中央寄りに高い高台がつく	陶邑III-3~IV-2
41	須恵器壺身	8レンチ東側	第43層	15.10	4.05~4.15		口縁端部丸く仕上げ、やや中央寄りにハの字形の高台がつく。底部外側回転	陶邑IV-2~3
42	須恵器無蓋高壺	8レンチ東側	第43層	16.00			無蓋高壺。体部外側に文様なく1条の突線巡る。	陶邑II-2~5
43	須恵器壺	8レンチ東側	第43層	19.80			ゆるやかに外反する口縁部、端部は内側に矮く、また上端面をなす。体部外側面凹き、部分的に櫛目調整。体部内~IV-2面円弧叩き後ナズ。	陶邑III-2
44	須恵器甕口縁部	8レンチ東側	第43層				ゆるやかに外反する口縁部で、端部が陶邑III内側に巻き込み、外端面をなす。	~IV-1
45	須恵器平瓶把手	8レンチ東側	第34層				断面は四角形に面取り。	陶邑III~IV
46	瓦器碗底部	8レンチ東側	第34層		4.00		わずかに高台をとどめる器壁の薄い器。調整不明。	13世紀後半~14世紀初
47	瓦器碗底部	8レンチ東側	第25層		5.40		わずかに高台をとどめる器壁の薄い器。調整不明。	13世紀後半~14世紀初
48	磁器碗	8レンチ東側	第34層		3.40		青磁碗、波佐見窯系。	18世紀
49	磁器碗	8レンチ東側	第34層		4.20		染付碗、波佐見窯系。	18世紀
50	須恵器壺底部	8レンチ西側	第31層		7.60		幅広の高台がハの字形につく。内端面が接地面となる。	陶邑IV~V
51	瓦器甕口縁部	8レンチ西側	第31層	8.20			外面口縁部のヨコナデ範囲広く、口縁部以下は指オサエのままである。内面軒く疊らにミガキ。	III-3~IV-3
52	瓦器甕口縁部	8レンチ西側	第31層	13.20			内底面に粗いミガキ。	III-3~IV-3
53	土師器小皿I 口縁部	8レンチ西側	第31層				やや肥厚する口縁部をなす、いわゆる「へそ皿」にみられるもの。	15世紀
54	土師器小皿II	8レンチ西側	第30層		8.20	1.25	口縁部は底部からゆるやかに外斜方にのび、端部は丸くおさめる。	13世紀
55	土師器小皿III	8レンチ西側	第31層		9.90	1.00	口縁部は底部からゆるやかに外斜方にのび、端部は丸くおさめる。	13世紀
56	瓦器甕口縁部	23レンチ	第5~10層				内面に太く粗いミガキ。	III-3~IV-3
57	須恵器壺蓋	24レンチ	第8層	11.40			内面のかえりは口縁端部より下方に張り出す。	陶邑III-1
58	須恵器壺蓋	24レンチ	第8層	13.30			天井部平らに近く、端部の屈曲はゆるやか。	陶邑IV-3
59	須恵器壺蓋	24レンチ	第8層				内面の小さいかえりが口縁端部より下方に出る。	陶邑III-1~2
60	須恵器壺蓋	24レンチ	第8層				内面の小さいかえりが口縁端部より下方に出る。	陶邑III-1~2
61	須恵器壺身	24レンチ	第8層	11.80			手跡丸みをちつともやや横に気味。内側傾する短い立ち上がりをもつ。底面部外側は陶邑II-5(ラケヅリ)。	陶邑II-5
62	須恵器壺口縁部	24レンチ	第8層	16.30			外反する口縁端部が肥厚し下方に短く伸びる。	
63	土師器壺身	6レンチ南端	第270~276層	17.10		3.90	口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる环A。端部は軽く巻き込み、内側に沈線が巡る。底部外側面はヘラケヅリ。口縁部以下底部までヨコナデ。口縁部内面に斜放射状略文。	平城II~III
64	土師器壺身	6レンチ南端	第270~276層	17.00			口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる环A。調整不明。	平城II~V
65	土師器壺身	6レンチ南端	第270~276層	15.80			口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる环A。調整不明。	平城II~V
66	土師器皿	6レンチ南端	第270~276層	17.00			口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる环A。口縁端部の肥厚小さく目立たず。内外面ヨコナデ。	平城III~V
67	土師器碗	6レンチ南端	第273層	16.80			内側に弧を描いて立つ口縁部をもつC。端部内面をなす。口縁部ヨコナデ、以下は指オサエ。	平城III~V

68	土師器椀	6トレンチ南端	第270～276層	13.80		内嚙する弧を描いて立つ口縁部をもつ椀C。端部内端面をなす。口縁部ヨコナデ、以下は指オサエ。	半城Ⅲ～V
69	土師器椀	6トレンチ南端	第270～276層	15.20		内嚙する弧を描いて立つ口縁部をもつ椀C。端部内端面をなす。調整不明。	半城Ⅲ～V
70	土師器椀	6トレンチ南端	第273層	20.00		内嚙する弧を描いて立つ口縁部をもつ椀C。端部内端面をなす。口縁部ヨコナデ、以下はヘラケズリ。	半城Ⅲ～V
71	土師器椀	6トレンチ南端	第270～276層	14.60	3.80	内嚙する弧を描いて立つ口縁部をもつ椀C。端部内端面をなす。口縁部ヨコナデ、以下は指オサエ。	半城Ⅲ～V
72	土師器皿	6トレンチ南端	第270～276層	16.20	2.95	ゆるやかに外反し端部をやや内傾気味に丸く仕上げる皿A。調整不明。	平城Ⅲ～V
73	土師器皿	6トレンチ南端	第270～276層	17.00	2.45	ゆるやかに外反し端部をやや内傾気味に丸く仕上げる皿A。調整不明。	平城Ⅲ～V
74	土師器坏若	6トレンチ南端	第273層			天井部から滑らかに下る端部を丸く仕上げる皿Bの蓋。	平城II～V
75	土師器皿口縁部	6トレンチ南端	第273層			内嚙して立ち上がる口縁端部をもつ皿Aか。端部は内傾し、外端面をなす。内外面ヨコナデ。	平城IV～V
76	土師器坏または皿口縁部	6トレンチ南端	第272層			底部から内嚙して立ち上がり、口縁部は弧を描いて外反し、端部内側に丸める坏Aまたは皿A。口縁内面に放射状暗文。	平城Ⅲ～V
77	土師器坏または皿口縁部	6トレンチ南端	第272層			底部から内嚙して立ち上がり、口縁部は弧を描いて外反し、端部内側に丸める坏Aまたは皿A。調整不明。	平城IV～V
78	土師器坏身口縁部	6トレンチ南端	第272層			底部から内嚙して立ち上がり、口縁部は弧を描いて外反し、端部内側に丸める坏Aまたは皿A。調整不明。	平城IV～V
79	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第272層			ぐの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわざかに巻き込み外端面をなす。内面に横方向のハケメ、外面ヨコナデ。	7世紀後半～8世紀前半
80	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層			ぐの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわざかに巻き込み外端面をなす。内面に横方向のハケメ、外面不明。	7世紀後半～8世紀代
81	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層			ぐの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわざかに巻き込み外端面をなす。調整不明。	7世紀後半～8世紀代
82	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層			ぐの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわざかに巻き込み外端面をなす。調整不明。	7世紀後半～8世紀代
83	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層			ぐの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部をわざかに巻き込み外端面をなす。調整不明。	7世紀後半～8世紀代
84	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層			ぐの字形に外反する口縁部をもつ甕。口縁端部を内へ折り曲げる。調整不明。	7世紀後半～8世紀代
85	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第273層			ぐの字形に外反し、口縁端部の内側への巻き込みが目立たず、小さな外端面をなす。口縁部内外をヨコナデ。	8～9世紀
86	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第270～276層			ぐの字形に外反し、口縁端部の内側への巻き込みが目立たず、小さな外端面をなす。口縁部内外をヨコナデ。	8～9世紀
87	土師器甕口縁部	6トレンチ南端	第273層			ぐの字形に外反し、口縁端部の内側への巻き込みが目立たず、小さな外端面をなす。調整不明。	8～9世紀
88	土師器短頸壺	6トレンチ南端	第273層	13.20		肩の張った体部に直立する短い口縁部がつく壺A。口縁部内外ヨコナデ。ほかは調整不明。	平城II
89	土師器壺底部	6トレンチ南端	第270～276層	10.30		低い高台がつく壺Aの底部。外面に横方向のヘラマギ残る。	平城II
90	土師器壺口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	15.20		体部から直立気味に立ち上がり口縁部は外反し、上に軽い端面をなす。口縁部内面ヨコナデ。ほかは調整不明。	7世紀後半～8世紀代
91	土師器把手	6トレンチ南端	第270～276層			壺または壺(鍋)三角状把手。	8世紀代

92	土師器羽釜鋸部	6トレンチ南端	第270～276層				口縁部下に水平につく鋸部。	7世紀後半～8世紀中頃
93	土師器羽釜口縁部	6トレンチ南端	第273層				外反する口縁部下に鋸がつく。	7世紀後半～8世紀中頃
94	土師器羽釜口縁部	6トレンチ南端	旧耕土・擾乱盤土	26.20			羽釜の外反する口縁部。	7世紀後半～8世紀中頃
95	上師器甕	6トレンチ南端	第270～276層	15.60			球形の体部から口縁部が直立気味に立ち上がり、端部は軽く外反し小さく丸める。頭部内外面はヨコナデ、体部は指寸サクの後、ナデ。	7世紀前半～8世紀代
96	須恵器坏蓋	6トレンチ南端	第273層	14.40			端部は内方へ屈曲させている。	陶邑IV-1～2
97	須恵器坏蓋	6トレンチ南端	第270～276層	15.20			端部は内方へ屈曲させている。	陶邑IV-1～2
98	須恵器坏蓋口縁部	6トレンチ南端	第273層				端部は内方へ屈曲させている。	陶邑IV-1～2
99	須恵器坏蓋口縁部	6トレンチ南端	第273層				端部は内方へ屈曲させている。	陶邑IV-1～2
100	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第270～276層				逆ハの字形に外反する口縁部。	陶邑III-3～IV
101	須恵器坏身	6トレンチ南端	第273層	15.36	10.95	7.00	ゆるやかにS字形を描いて外反する口縁部。底端部やや内側に幅広の高台がつくり、内側面で接地する。底部外周回転ナデの際に工具があたった痕跡あり。	陶邑IV-3
102	須恵器坏身	6トレンチ南端	第273層	14.80	10.40	5.34	逆ハの字形に外反する高い口縁部。比較的高く締い高台が底端部付近につく。	陶邑IV-3～4
103	須恵器坏身	6トレンチ南端	第273層	13.40	10.00	3.85	やや内側気味に立ち上がる口縁部。底端部に低い幅広の高台がつくり。	陶邑IV-3
104	須恵器坏身	6トレンチ南端	第270～276層	13.90	8.80	4.05	逆ハの字形に外反する口縁部。底端部よりやや中心寄りに低い幅広の高台がつくり。	陶邑IV-1～2
105	須恵器坏身	6トレンチ南端	第273～275層	12.90	4.20	4.50	直線的に外反する口縁部。やや幅の狭い高台が底端部につく。	陶邑IV-3～4
106	須恵器坏身	6トレンチ南端	第270～276層	15.00	9.80	5.10	やや内側気味に外斜方へのびる口縁部。底端部に直立する幅広の高台がつくり。外端面が接地面となる。	陶邑IV-3～4
107	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第273層		13.80		底端部近くに幅広の高台が逆ハの字形につく。接地面はほぼ平坦。	陶邑IV-3～4
108	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	14.40			逆ハの字形にゆるやかに外反する口縁部。	陶邑IV
109	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	12.80			逆ハの字形にゆるやかに外反する口縁部。	陶邑IV
110	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第270～276層	15.40			内側気味に立ち上がる口縁部。	陶邑IV
111	須恵器坏身口縁部	6トレンチ南端	第271～272～276～289層	11.10	4.20		S字形のカーブを描いて外反する口縁部。	陶邑III-2～IV
112	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		11.80		底端部に低い幅広の高台が逆ハの字形につく。内側面が接地面となる。	陶邑IV-3～4
113	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		10.00		直立気味に立ち上がる体部。底端部やや中心寄りに幅広の高台がつくり。接地面は平坦面をなす。	陶邑IV-2～3
114	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第273層		11.40		底端部よりやや中心寄りに幅広の高台がつくり。接地面は平坦面をなす。	陶邑IV-2～3
115	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		7.80		底端部よりやや中心寄りに幅広の高台がつくり。接地面は平坦面をなす。	陶邑IV-2～3
116	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		12.00		底端部よりやや中心寄りに幅広の高台がつくり。接地面は平坦面をなす。	陶邑IV-2～3
117	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		11.40		ハの字形に開く細く高い高台が底端部より中心寄りにつく。	陶邑IV-1～2
118	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		12.30		やや内側気味に立ち上がる口縁部。底端部に低い幅広の高台がつくり。	陶邑IV-3
119	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		10.40		ハの字形に開く細く高い高台が底端部付近につく。	陶邑IV-3～4
120	須恵器小型蓋底部	6トレンチ南端	第270～276層		7.00		底端部に低い高台がつくり。	陶邑IV
121	須恵器坏身底部	6トレンチ南端	第270～276層		9.40		底端部に幅広でやや高い高台がハの字形につく。内側面が接地面となる。	陶邑IV-3～4

122	須恵器坏身底部	6レンチ南端	第273層	8.40		底端部に低い高台がつく。底面は平坦面をなす。	陶邑IV-3
123	須恵器坏身底部	6レンチ南端	第270～276層	7.80		底端部に低い高台がつく。底面は平坦面をなす。	陶邑IV-3
124	須恵器坏身底部	6レンチ南端	第273層	12.00		ハの字形に開く窪くて高い高台が底端部よりやや中心寄りにつく。	陶邑IV-1～2
125	須恵器坏身底部	6レンチ南端	第270～276層			ハの字形の細く低い高台。接地面平坦。	陶邑IV-3～4
126	須恵器坏身底部	6レンチ南端	第270～276層			低く幅広の高台が底端部につく。	陶邑IV-4
127	須恵器坏身底部	6レンチ南端	第273層			底端部よりやや中心寄りに幅広の高台がつく。	陶邑IV-2～3
128	須恵器坏身底部	6レンチ南端	第270～276層			高台が底端部につく。	陶邑IV-3～4
129	須恵器坏身底部	6レンチ南端	第270～276層			底端部に低い幅広の高台がつく。	陶邑IV-3
130	須恵器坏身底部	6レンチ南端	第270～276層			細い高台が底端部付近直立するようにつく。	陶邑IV-3～4
131	須恵器壺口縁部	6レンチ南端	第270～276層	17.20		口縁端部上面をなす短頸壺か。内面に沈線が巡る。	
132	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第273層	25.40		短く外反して立ち上がる口縁部。端部内側に面をなす。直口壺の可能性もあり。	陶邑II～IV
133	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第259・268・269層	28.20		外反する口縁部で端部が肥厚し、外端面をなす。	陶邑IV
134	須恵器坏身口縁部	6レンチ南端	第273層	20.00		ゆるやかに外反する口縁部。鉢の可能性もあり。	陶邑IV
135	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第270～276層	20.50		外反する口縁部で端部が肥厚し、外傾する面をなす。体部外面平行叩き。	陶邑IV
136	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第270～276層	22.00		ゆるやかに外反する口縁部で、端部がわずかに肥厚して内側に稜をなす。	陶邑III
137	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第270～276層	26.00		外反する口縁部で端部が肥厚し、外傾する面をなす。	陶邑IV
138	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第273層			ゆるやかに外反する頸部から外端面をなす口縁部にいたる。外面に鈍い凸線状の上下の条線に挟まれて波状文の文様帶がある。	陶邑I-4・5～II
139	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第270～276層			外反する口縁部で端部が肥厚し、外傾する面をなす。	陶邑IV
140	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第270～276層			ゆるやかに外反し、端部丸く仕上げる。	
141	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第270～276層			外反する口縁部の端部が直立して立ち上り丸く仕上げる。	
142	須恵器甕口縁部	6レンチ南端	第270～276層			口縁端部が肥厚し、内傾して上端稜をなす。	
143	須恵器鉢口縁部	6レンチ南端	第270～276層			内側する口縁部で、端部は丸い。	陶邑IV-1～3
144	須恵器小型壺全体部	6レンチ南端	第270～276層		体部最大径7.7	やや肩の張る小型の長頸壺の体部。外面上に沈線巡る。	陶邑IV
145	須恵器壺肩部	6レンチ南端	第270～276層		体部最大径19.0	肩の張る体部。広口壺か。	陶邑III-3～IV-3
146	須恵器壺全体部	6レンチ南端	第270～276層		体部最大径19.4	肩の張る体部。	陶邑III-3～IV-3
147	須恵器壺全体部	6レンチ南端	第270～276層		体部最大径24.0	肩の張る体部。広口壺か。	陶邑III-3～IV-3
148	須恵器壺底部	6レンチ南端	第270～276層	11.80		幅の狭い低い高台がハの字形につく。接地面は平坦である。	陶邑III-2・3～IV
149	須恵器壺底部	6レンチ南端	第270～276層	11.20		比較的高い幅広の高台がハの字形につく。接地面は平坦である。	陶邑III-2・3～IV
150	須恵器壺底部	6レンチ南端	第273層	10.00		低く小さい高台がハの字形につく。外端部が接地面となる。	陶邑III-2・3～IV
151	須恵器壺底部	6レンチ南端	第273層	10.60		幅広の高い高台がハの字形につく。内端部が接地面となる。	陶邑III-2・3～IV
152	瓦器柾	6レンチ南端	第273層	13.80		薄い壁壁、柾の丸みの形態をとどめる。内外面の調整は不明。	III-1～2
153	瓦器柾口縁部	6レンチ南端	第273層			薄い壁壁、柾の丸みの形態をとどめる。内外面の調整は不明。	

154	土師器小皿	6レンチ南端	第270～276層	8.80		1.95	丸みのある底部から内輪気味にのびる口縁部。端部は丸く仕上げる。調整不明。	
155	土師器小皿	6レンチ南端	第273層	11.10		2.95	深みのある皿。口縁部ヨコナデ。	13世紀
156	土師器小皿	6レンチ南端	第270～276層	12.90		3.30	深みのある皿。口縁部強いヨコナデにより外反し端部細く丸める。	13世紀
157	磁器碗	6レンチ南端	第273層	11.10	4.20	5.95	五井花文碗。豊付無輪で使用時に豊付をすり減らし。波佐見窯系。	18世紀
186	須恵器环身 口縁部	9レンチ	床土	21.20			口縁部が底部から丸みをもって斜上方に立ち上がる环A。口縁端部内傾する。調整不明。	平成II～V
187	須恵器环蓋	9レンチ	床土	17.00		1.85	天井部から端部にかけてZ字状のカーブを描く。端部を下方へ屈曲させ、段をなす。擬宝珠形つまみは扁平で、中央がやや突出する。	陶邑IV-3～4

図 版





シシヨツカ古墳遠景（南から）



シシヨツカ古墳遠景（南西から）

図版二 シショツカ古墳全景（1）



シショツカ古墳全景（南から）



シショツカ古墳全景（南西から）

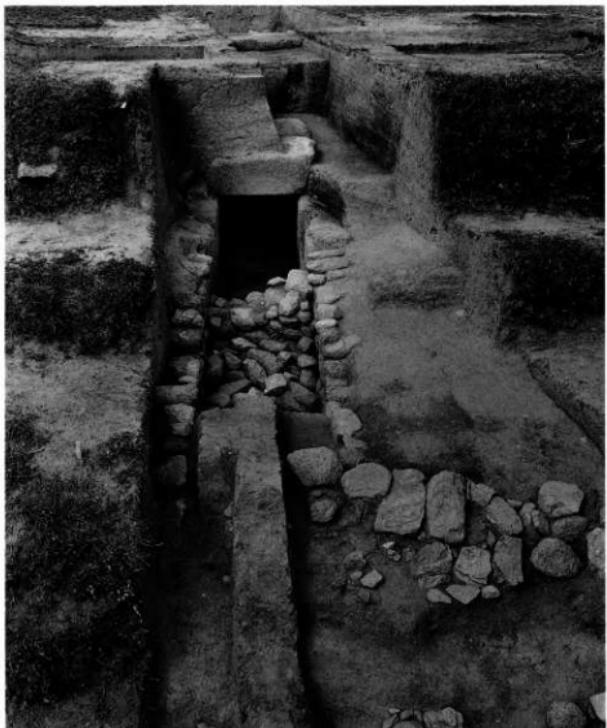


シシヨツカ古墳全景（西から）



シシヨツカ古墳全景（東から）

第6トレンチ
古墳前面
貼石（南から）



第6トレンチ古墳前面埴丘第1段貼石（東から）

図版五 墳丘北側全景

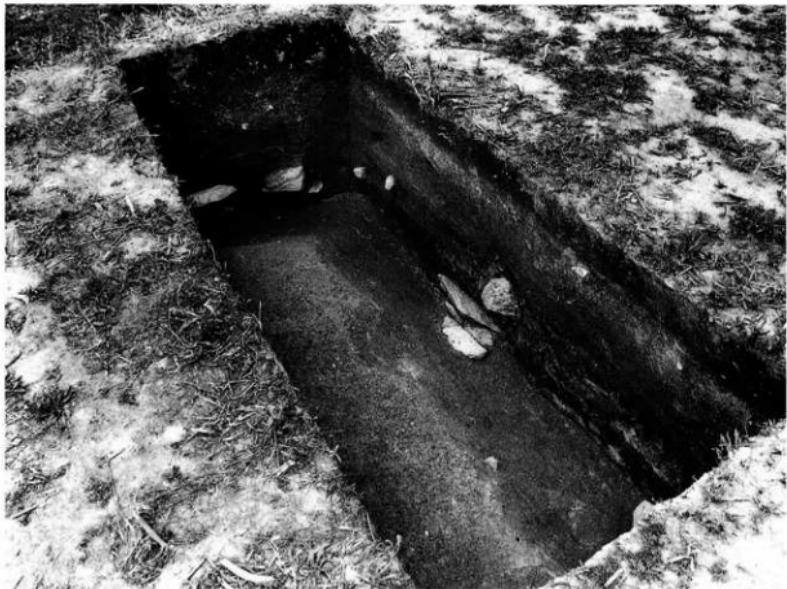
第6トレンチ
墳丘北側
(北から)



墳頂全景 (北東から)

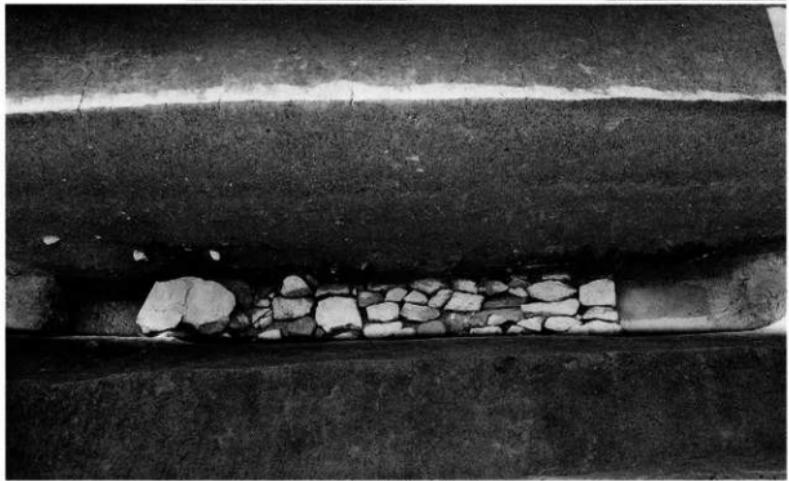
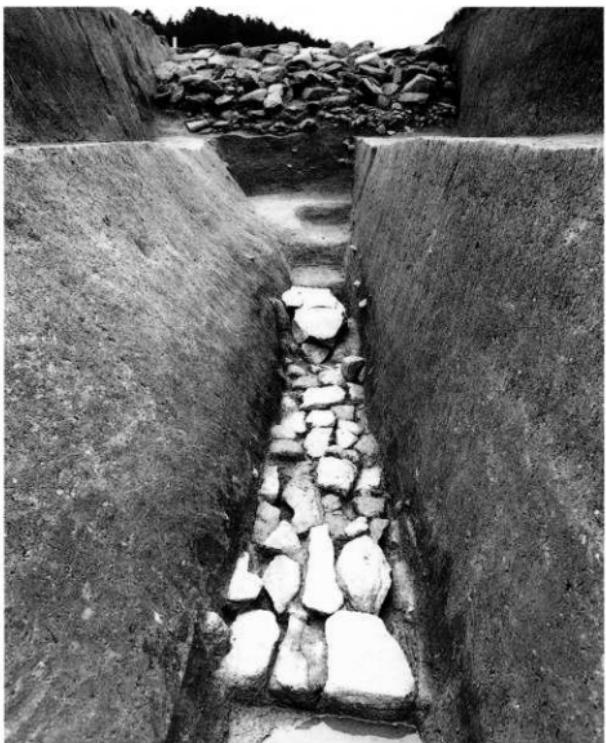


北東トレンチ墳丘北東コーナー貼石（東から）



北西トレンチ墳丘北西コーナー（東から）

第6トレンチ
墳丘北側
周溝・貼石
(北から)



同周溝底面石敷（東から）



第7トレンチ（墳丘）東側第1段貼石（東から）



第7トレンチ墳丘西側貼石（西から）



第7トレンチ墳丘東側第3段貼石（東から）



第7トレンチ墳丘東側第3段貼石（北から）



第7トレンチ墳丘西側第2段貼石（北から）



第7トレンチ墳丘西側第1段貼石（西から）



第7 トレンチ墳丘東側第3段貼石中出土棟原石（南東から）



第6 トレンチ墳丘北側第2段貼石中出土棟原石（北東から）

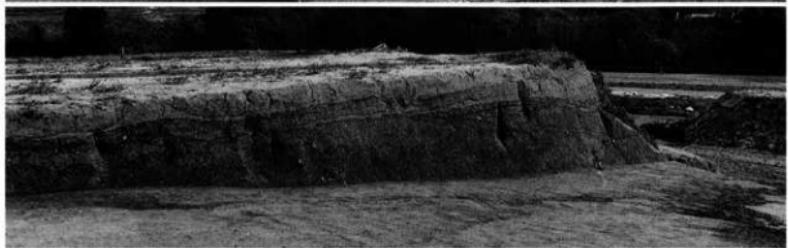


第8 トレンチ西側周溝肩石列（東から）



第6 トレンチ南側周溝・前面テラス状施設（北東から）

図版一三 南側・西側周溝ほか



上) 第23トレンチ周溝南～西側(南東から) 中) 第24トレンチ西側(北東から) 下) 第3調査区西壁断面(西から)

図版一四 前面テラス状施設下裾石



南西トレンチ裾石（南から）



第6トレンチ南端裾石（南から）



第6トレンチ（天井石上）盛土断面（北東から）



第7トレンチ墳丘西側第3段盛土（西から）

図版一六 第7・8トレンチ縄・遺物出土状況



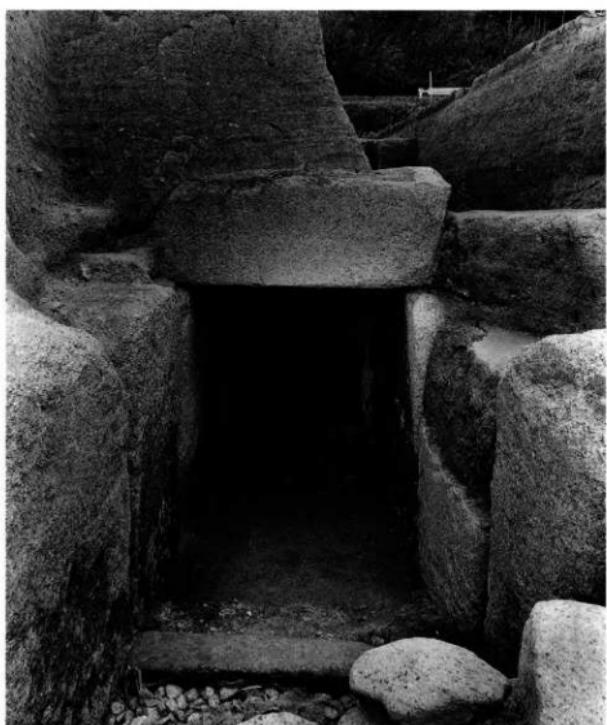
第7 トレンチ西側墳丘第2段堆積土第37層縄出土状況（南から）



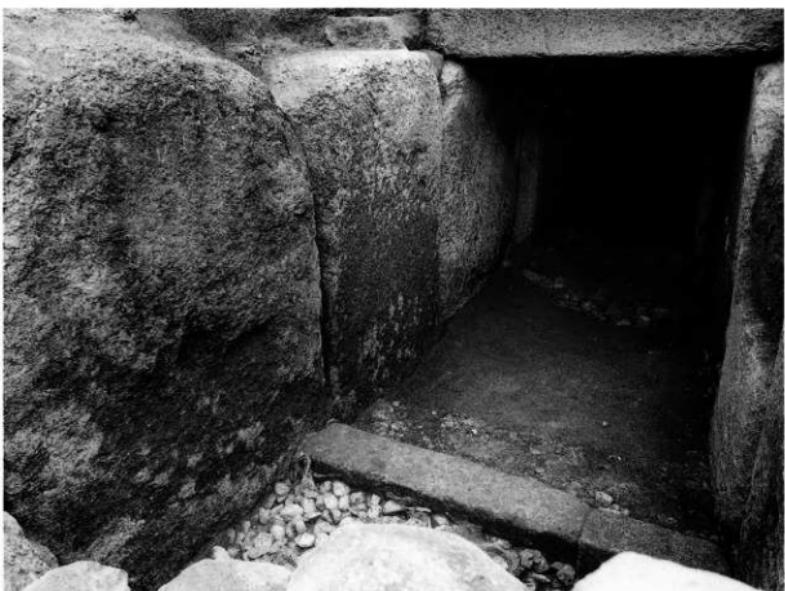
第8 トレンチ東側周溝内土器出土状況

第3 トレンチ西側第37層石縄出土状況

第6トレンチ
石室前面
(南から)



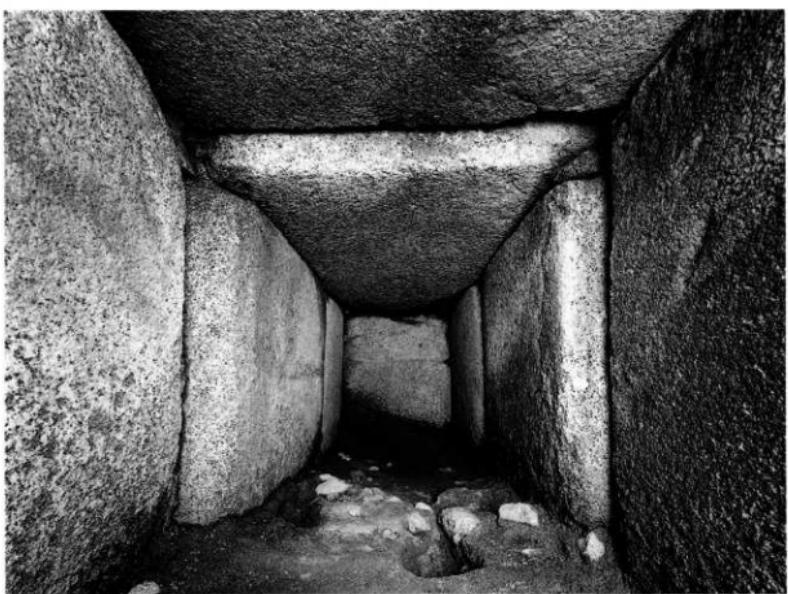
仕切石・襍敷 (北から)



前室右側壁（南東から）



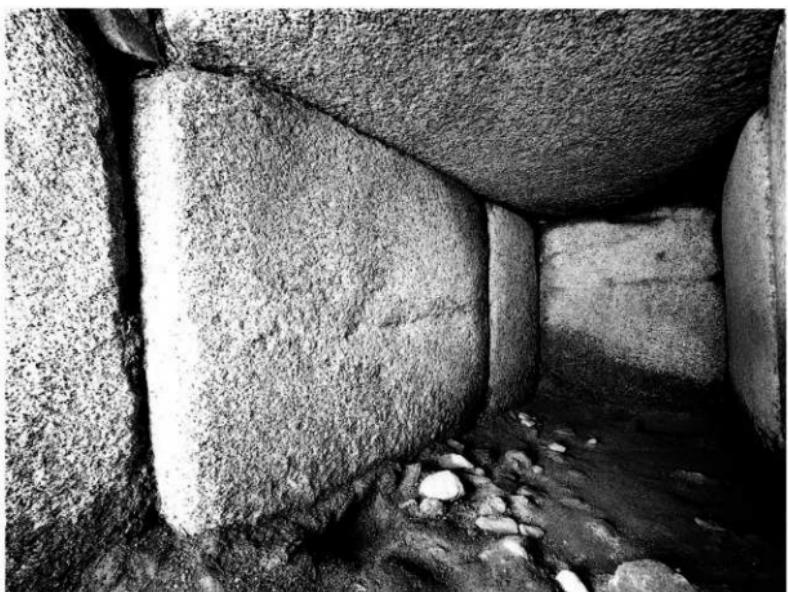
前室左側壁（南西から）



奥室全景（前室から）



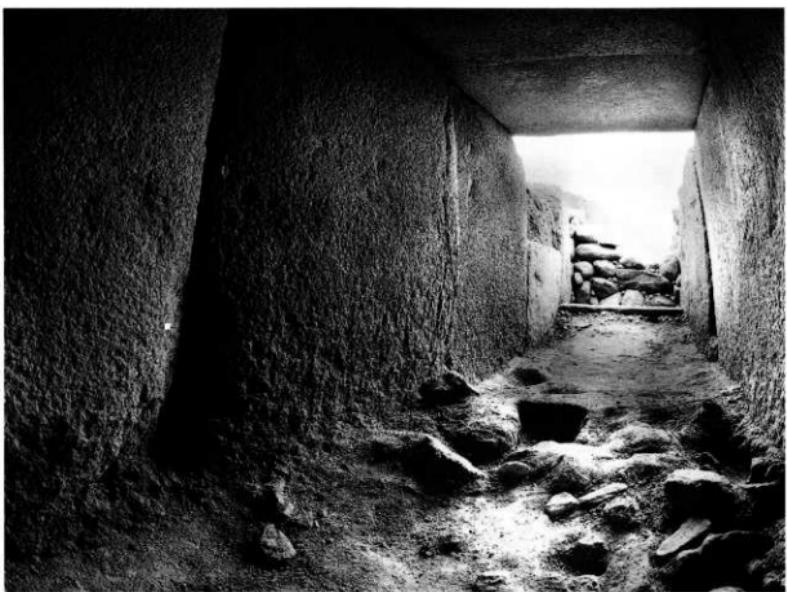
前室全景（奥室から）



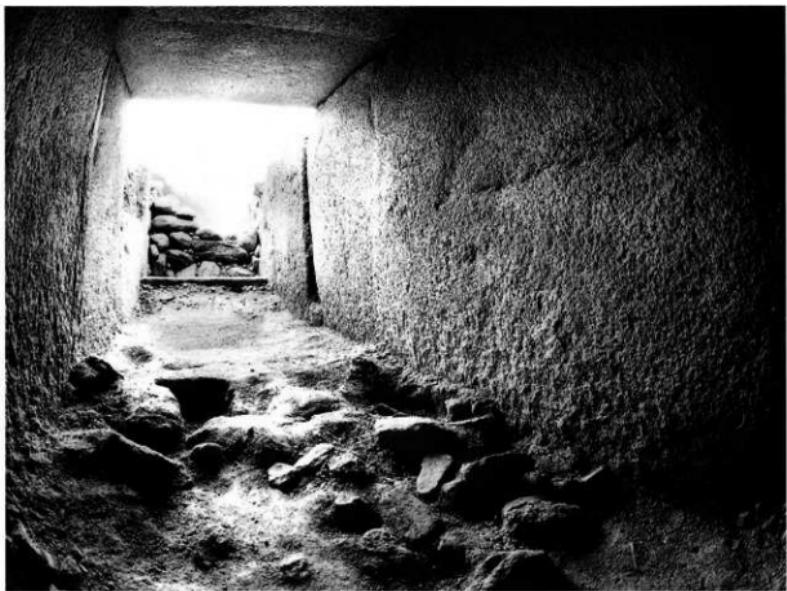
奥室右側壁（前室から）



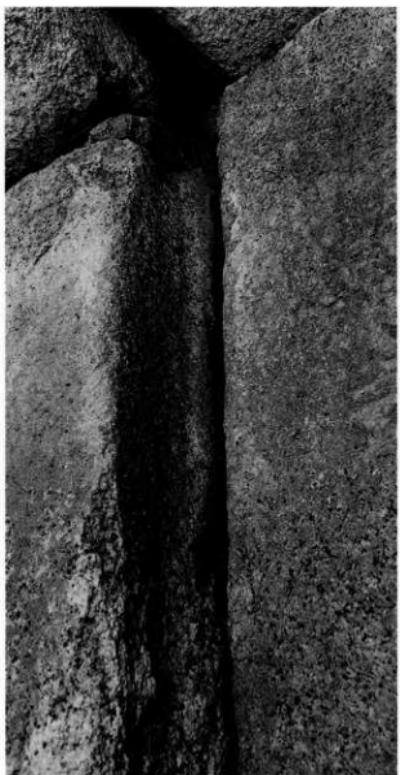
奥室左側壁（前室から）



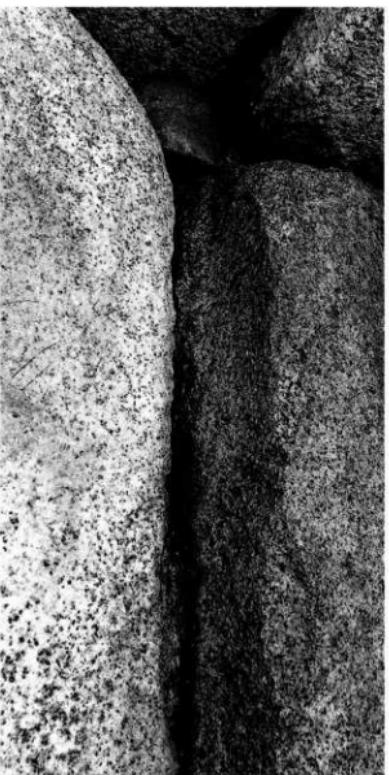
前室左側壁（奥室から）



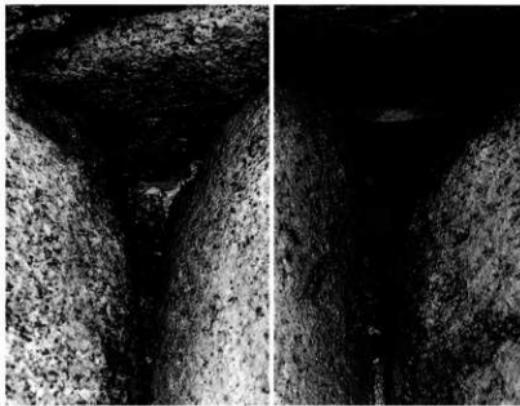
前室右側壁（奥室から）



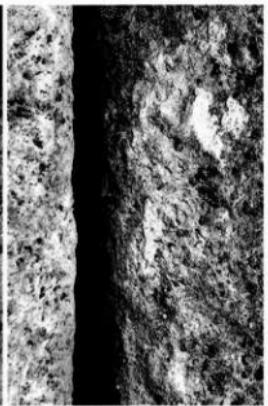
奥室左側扉受



奥室右側扉受



奥壁右上隅漆塗り込み



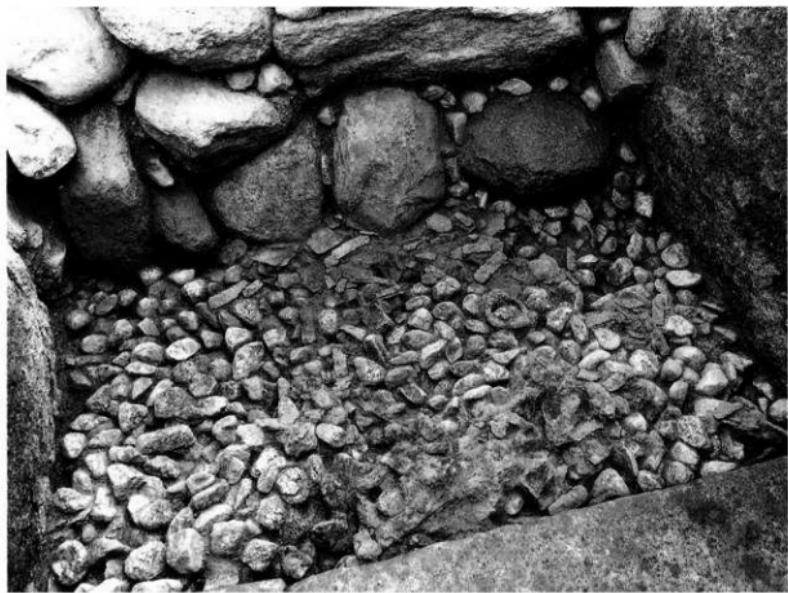
奥壁左上隅詰め石

奥室左前側壁端漆喰

图版二三 石室内遺物出土状況



前室堆積土第207層遺物出土状況（北西から）

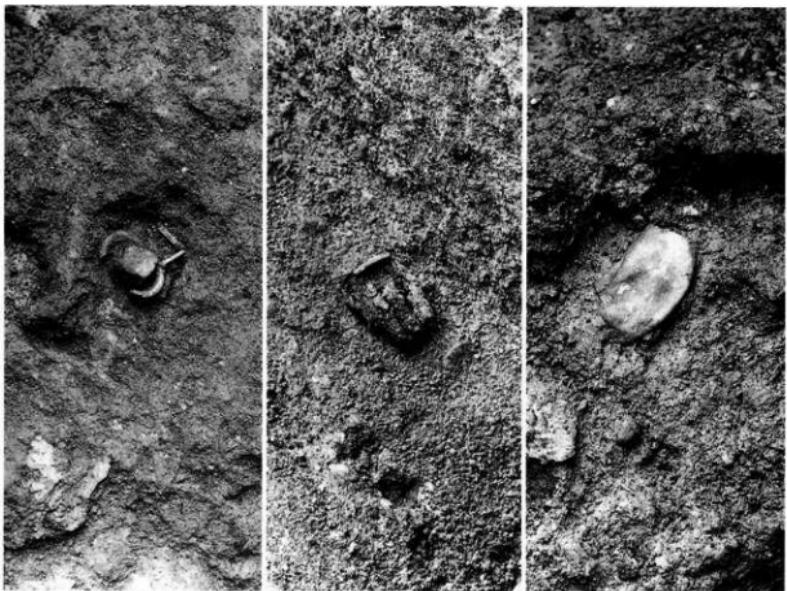


碓敷上挂甲小札・銕板他出土状況（北から）

図版二四 石室内遺物出土状況細部

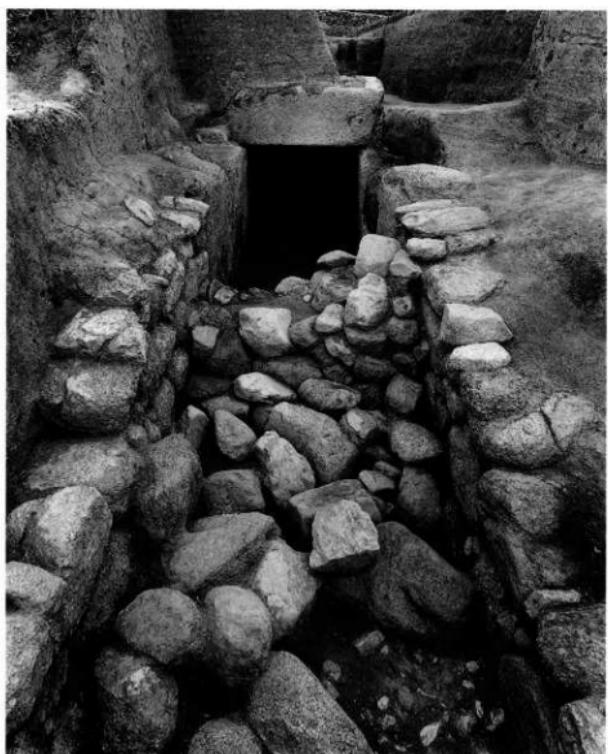


蝶敷上鏡板・挂甲小札出土状況（北から）



前室堆積土第207層遺物出土状況細部（左・鉸具、中・銅象眼大刀柄頭、右・中世土師皿）

第6トレンチ
閉塞施設・
羨道（南から）



羨道埋土・埋石出土状況（東から）

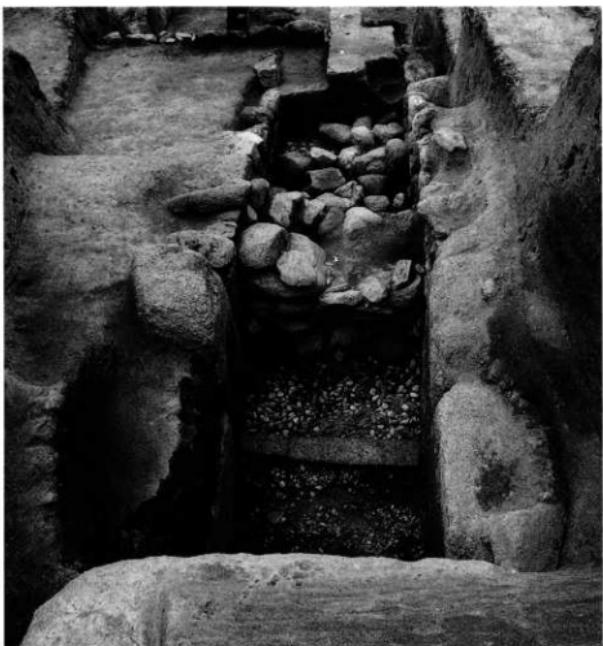


第6 トレンチ義道左側壁（南西から）

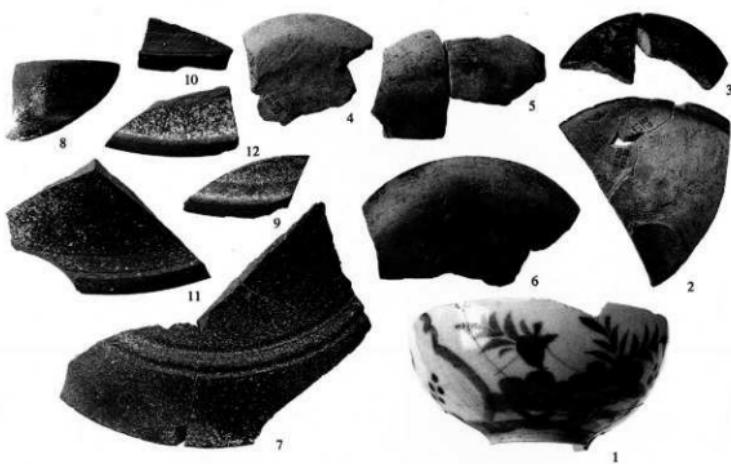


第6 トレンチ義道右側壁（南東から）

第6トレンチ
閉塞施設・
羨道全景（北から）



第6トレンチ羨道部埋甕出土状況（北から）



石室及び墳丘撲乱土出土土器



釋教出土壺



14

義道西側埋甕



15

義道東側埋甕



16



17

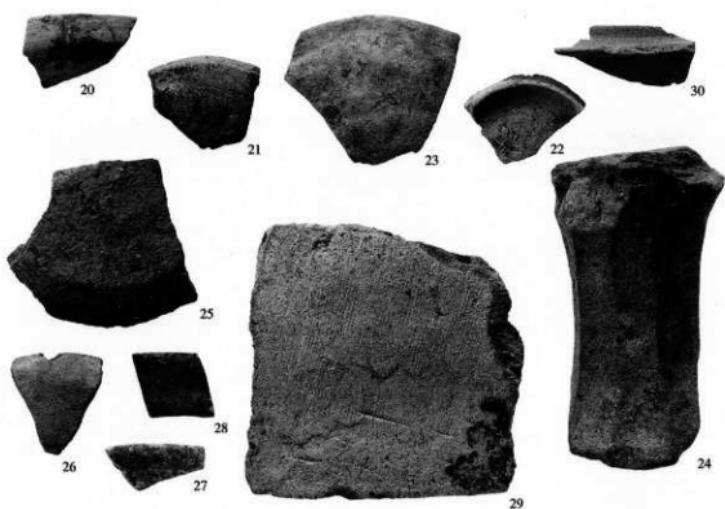


18

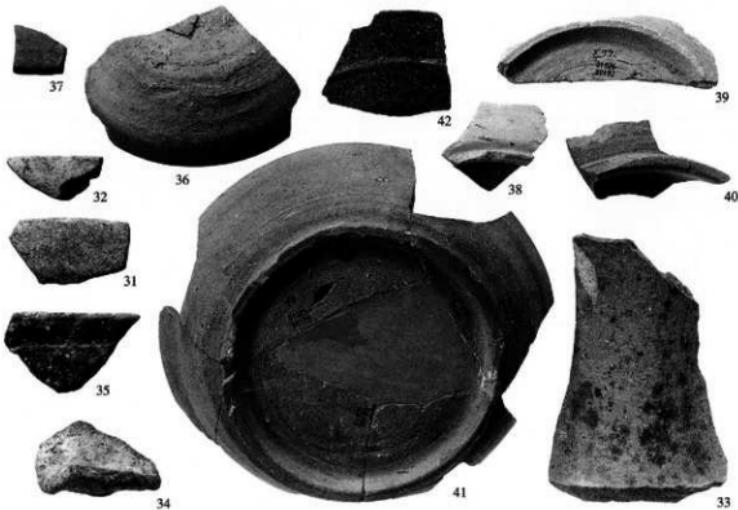
義道西側埋甕内發見高坏

19

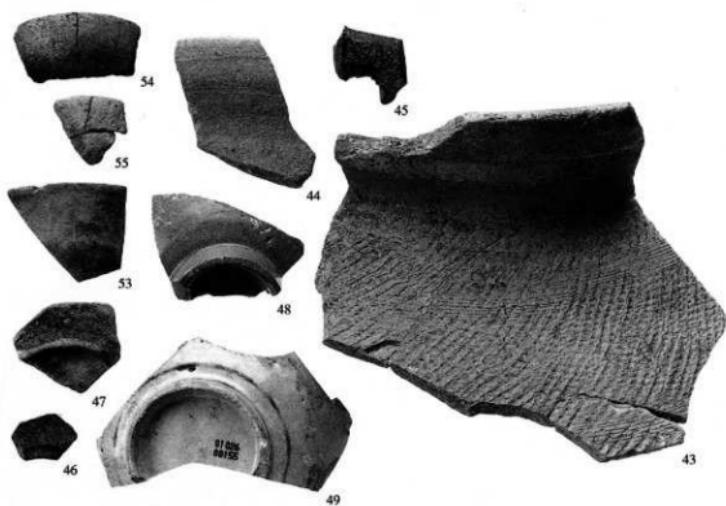
図版二一 第6～8トレンチ出土土器



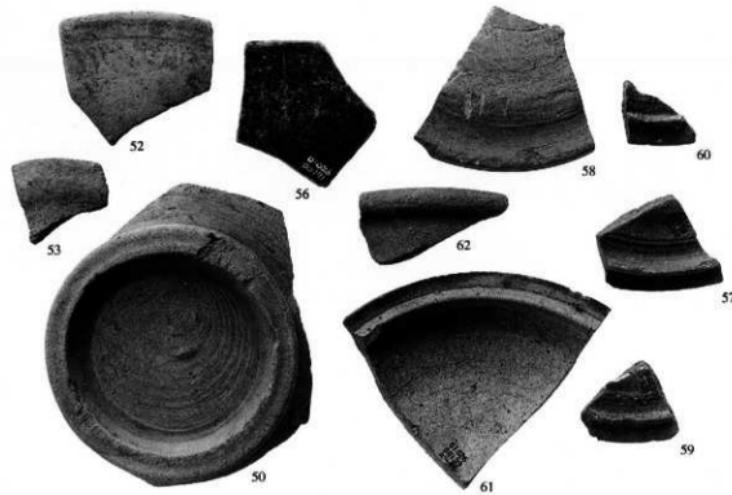
第6・7トレンチ出土土器



第8トレンチ東側出土土器（1）

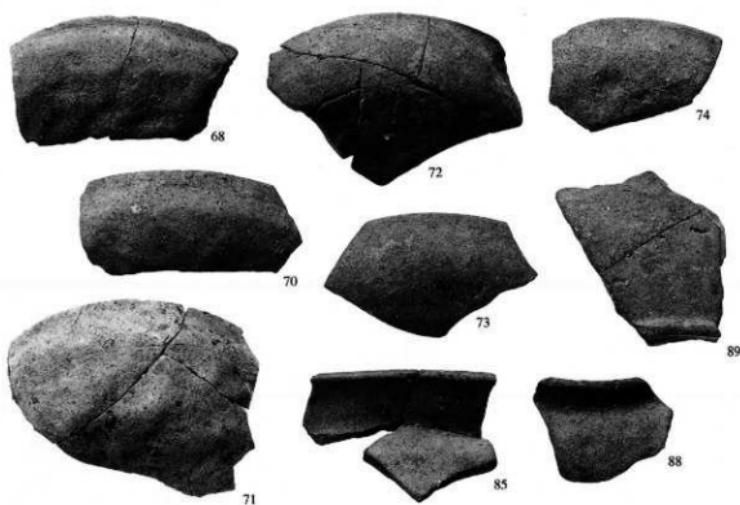


第8トレンチ東側出土土器（2）

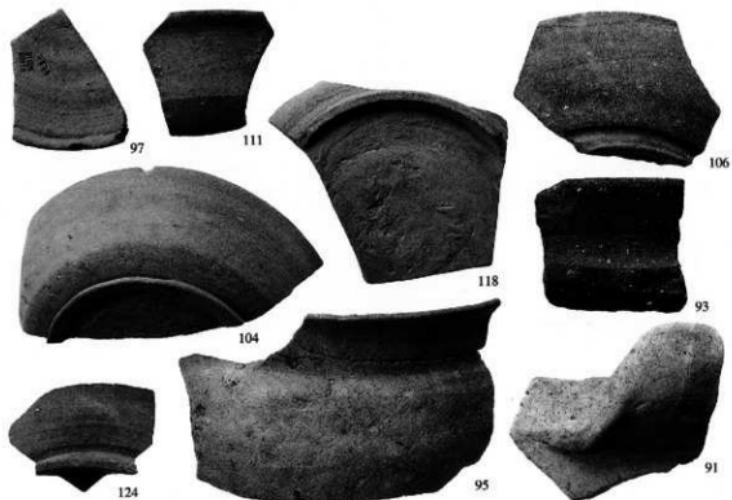


第8トレンチ西側・第23・24トレンチ出土土器

図版三三一 第6トレンチ南端擾乱部出土土器（1）

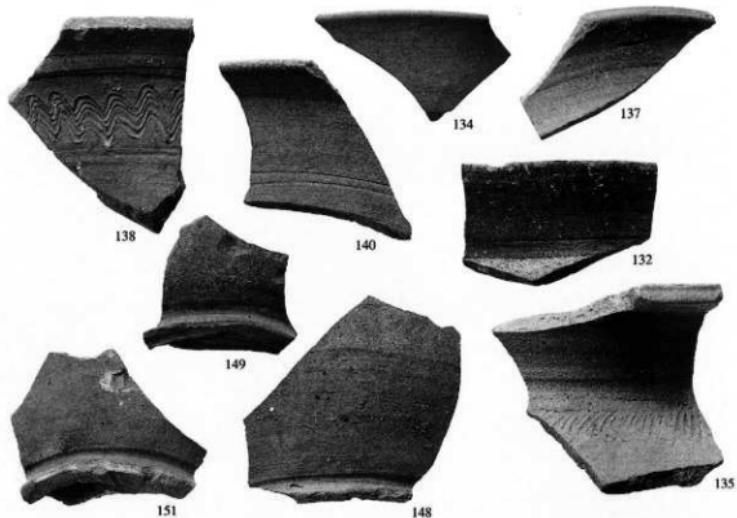


第6トレンチ南端擾乱部出土土器（1）

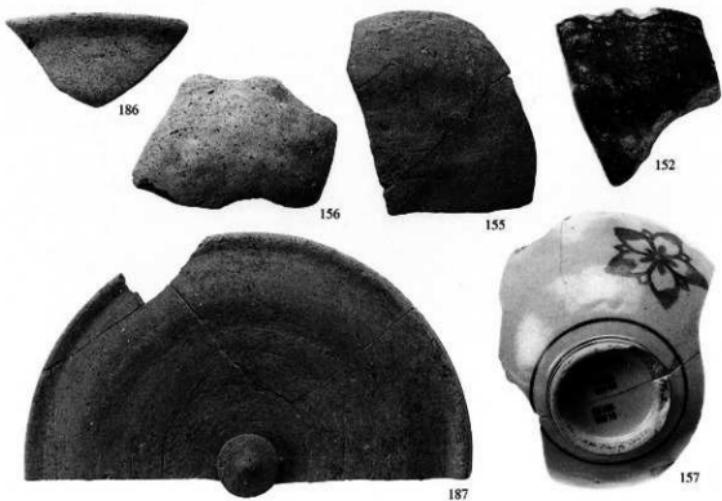


第6トレンチ南端擾乱部出土土器（2）

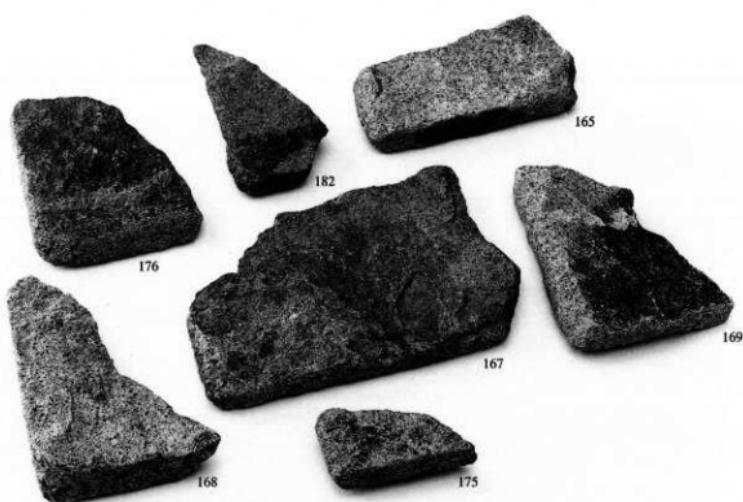
図版三四 第6トレンチ南端搅乱部出土土器（2）・ほか



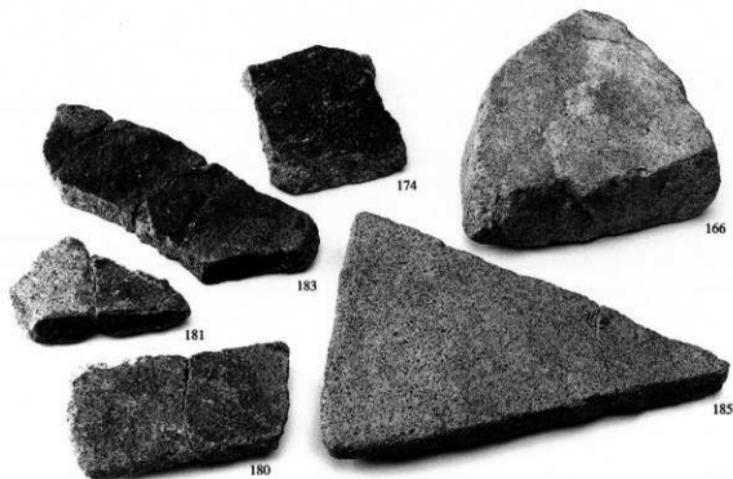
第6トレンチ南端搅乱部出土土器（3）



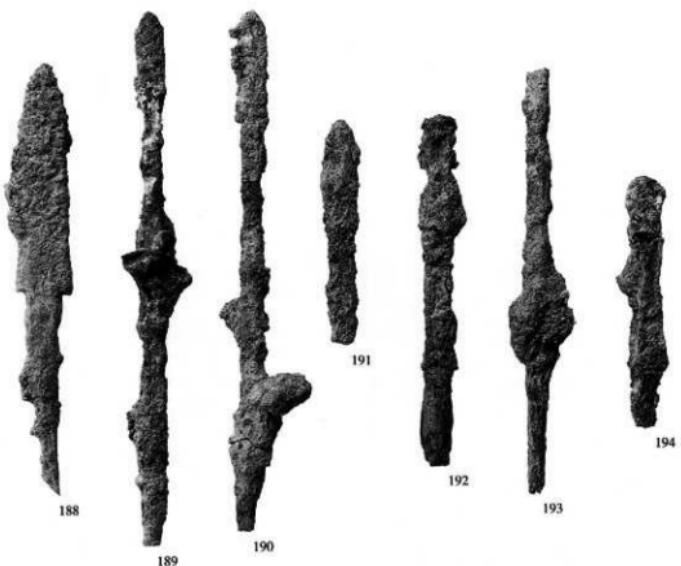
第6トレンチ南端搅乱部（4）・9トレンチ出土土器



石室・羨道・第6トレンチ南端搅乱部出土榛原石（1）



石室・羨道・第6トレンチ南端搅乱部出土榛原石（2）（166はアブライト）



仕切石周辺出土鉄鎌（1）

仕切石周辺出土鉄鎌（2）

圖版三七 金屬製品（2）刀子・大刀ほか



|

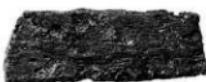


196

石室内堆積土出土刀子他



197



198



199



200



202



201



203



204



205



206



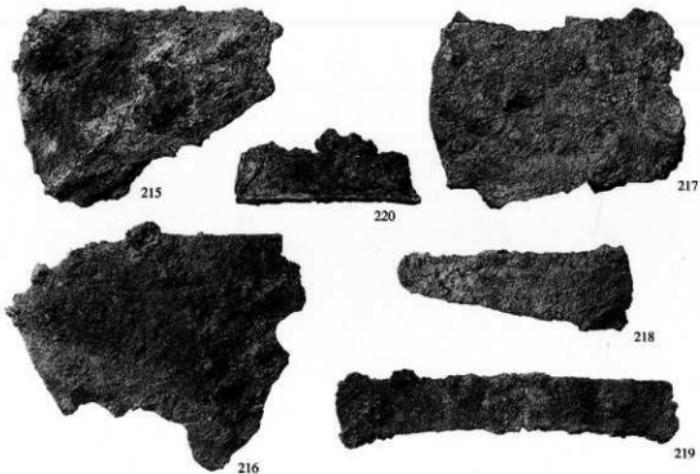
207

石室内堆積土出土大刀

図版三八 金属製品（3）小札ほか



裸敷出土挂甲小札



裸敷出土その他金属器



221



222

羅敷出土鏡板·鉸具



223



226



227



224



228



229



230



231



232



233

石室内堆積土出土馬具類

報告書抄録

ふりがな	かのうこふんぐん・ひらいしこふんぐんはっくつちょうさがいよう							
書名	加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・II							
副書名	中山間地域総合整備事業（南河内ごせ地区）に伴う							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	橋本哲							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351							
発行年月日	2003年3月28日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ***	東経 ***	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かのうこふんぐん 加納古墳群・ 平石古墳群	みねおかむらごくかくとへいせきぐん 南河内郡河南町加納	27382	37・24	34° 29' 17°81'	135° 39' 02°81'	2001年10月～ 2002年3月	10,150	中山間地域 総合整備事 業（南河内 ごせ地 区）
所収遺跡名	種別	土な時代	土な遺構	主な遺物		特記事項		
加納古墳群・ 平石古墳群	古墳・集落跡	古墳時代～ 飛鳥・奈良 時代	横口式石室 を主体部と する方墳1 基 飛鳥・奈良 時代の権立 柱建物・上 坑・構	須恵器・土師器・ 銀象眼大刀柄頭・ 鐵製掛甲小札・金 銅製馬具・飾り金 具・銀製帶金具・ 金糸・ガラス玉・ 漆塗籠格・瓦器・ 土師器・磁器・石 器	<ul style="list-style-type: none"> ・6世紀後半の横口式石室を主体部とし、貼石を施した3段築成の方墳 ・基道部に埋め甕（原位置）と甕の内部に納められた高环4点 ・漆塗籠格・亀甲紫鳳凰文銀象眼銀金具・抹平・玉類の出土 			

加納古墳群・平石古墳群発掘調査概要・II

－中山間地域総合整備事業（南河内ごせ）地区に伴う－

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06-6941-0351

発行日 2003年3月28日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

